128
2
129

020078-000-5

特10-945

日蓮大士真実伝

小川　泰堂／編

M21.1

ABH-0280

No 8598

小湊より開き初しより身延の山に流り滿る布しの高ねは高き貴き事の蹟をねもころよろゝけ出て世の貴賤よもあふれや次く千萬代よも其さかりなる御法の華の妙よくそしく不惜身命の深意をもおのづからよ知らしめんの志高し東も高く貴しとも貴きはふしの御山ありけりれか頂きたるや八葉の蓮華あめり其蓮は御の李の高く貴きはいふもさちなり豊さら昇る日蓮大士のかゝやきわたれる高嶺たるや又彼御山よひとしらん爰よ相模の國人金蓮華能わさならんあの又弘通の一端といふへくそれところさ忠のもたしかたゞて一言あゝよいまとをしあれり

元治始のとし春の末

從五位上行刑部少丞兼肥後守中原定都謹撰

春日清朗人來示余日蓮師一代之德行雖有先師之所撰其文爲難以漢章解干女衆也今改作國字以加圖繪爲余觀之而撫初云得能著蓮師一代之旨耶夫師者末法之教主而極未曾有不可思議之理然化凡下衆生心既到安國論乎即爲保國全泰末曾有之妙論矣　世尊亦說唯佛與佛乃能究盡矣是止止不須說之妙經於世界而莫此師斷經主之眞實天台之秘訣而廣廣宣流布之路乎一披此書解大士無量無邊之辛苦然後得入一乘經大士亦滿歡喜稱耶

安政庚申春日

小山陰士述

日蓮大士眞實傳

特10
945

日錄

○貫名家系伊谷明神奇瑞の事
○貫名次郎重忠房州小湊配流の事
○梅菊女夢を感じて懷胎の事
○善日麿誕生祥瑞不測の事
○善日麿村里頑童と無益の殺生を誡る事
○六月雪霜を降らせ又磔石を雨とする事
○善日麿清澄に登山して藥王と改名の事
○梅菊女藥王麿を清澄に訪給ふ事
○藥王麿剃髮名を蓮長と改むる事
○智恵を虛空藏に祈りて一切經を讀を給ふ事
○鎌倉に出て大阿然阿に淨土宗を聽給ふ事
○對海に伴れて比叡山に登り給ふ事
○慈覺大師の義を不審の事
○泉涌寺に入りて大覺禪師に參ずる事
○三井學室に智證の跡を尋ね給ふ事
○善證に値て鎌倉の凶事を聽給ふ事
○三浦泰村鎌倉に謀反法華堂にて自害の事
○蓮長師南都に六宗遊學の事
○江川吉久に値遇の事
○高野山に登りて眞言の秘法を學び給ふ事
○聖德太子の御墓山に詣給ふ事
○蓮長師比企能本と儒佛の離合を論談し給ふ事
○冷泉家に詣て數寄に道を問給ふ事
○叡廣法印に交て東寺御室の學室に入給ふ事
○法華守護の番神敕山に示現の事
○淨本夫妻の厚情に依て京都創年の事

○伊勢ヶ神廟ヶ靈場の事
○鄉里ヵ師て兩親を慰ヶ給ふ事
○道善御坊惡で流長師を變應の事
○旭日に向て初て妙法を唱へ宗旨建立の事
○東條景信ヶ怒を避て草房ヶ隱れ給ふ事
○日蓮と改名して兩親ヶ大飛を授給ふ事
○故國を去て鎌倉ヶ趣き給ふ事
○相州三浦米が濱着船の事
○名越松葉ヶ谷ヶ悲室經營の事
○成辨啟山より來りて徒弟となり日昭と改名の事
○四條頼基遊祖ヶ教導を受る事
○鴨士善寺途中ヶ同傘して遊祖ヶ歸伏の事
○印東有國の一子を法弟として名を日朗と召事
○遊祖剃髮以來富木殿資財を見繼たる事
○鎌倉十字の辻ヶ立て折伏弘通の事
○荏原池上南部等歸依隨從の事
○鎌倉大地震大雷の事
○高祖駿州岩本實相寺の經藏に入給ふ事
○天下大飢饉疫病流行人多く死亡の事
○立正安國論を作て鎌倉殿を諫る事
○最明寺時頼公高祖ヶ對顏ヶ事
○松葉ヶ谷御悲室燒討乱妨の事
○高祖中山ヶ在て百座說法教化の事
○吉田兼益より神道傳授の事
○高祖伊豆國伊東ヶ御流罪の事
○源兵彌三郎祿見ヶ消に高祖の危難を救ふ事
○高祖伊東朝高の重病を祈治す事
○閻浮提第一の釋尊高祖感得ヶ事

○北條重時遊去子息長時惡夢におそへる事
○高祖赦免を得て鎌倉ヶ歸り給ふ事
○神妙の經力高祖の母堂蘇生延壽の事
○道善御坊に草房ヶ會して教化の事
○小松原橫難法子檀越討死の事
○市ヶ坂の雪中老婆綿冑子を供養の事
○野州宇都宮遊化の事
○長さ七十餘度の大彗星一天ヶ亘る事
○高祖富木ヶ館に越年まて鎌倉ヶ歸る事
○大元襲古の賊軍日本ヶ逼る澁柿ヶ事
○高祖十一通ヶ書を方々に贈て法論を促給ふ事
○甲陵ヵ遊化して富士山ヶ登給ふ事
○大旱魃瓦觀上人雨請不覺の事
○高祖田邊ヶ淵ヶ雨を祈り給ふ事
○諸宗より高祖ヶ謀奏して北罪死刑に極る事
○松葉ヶ谷ヶ高祖を召捕て町々を引渡事
○鶴が岡八幡を諫曉して正法ヶ威力を示し給ふ事
○老婆初壁の餅を捧ゲて今生の面別を歎事
○龍ヶ口に法華經の利驗を顯給ふ事
○明星依智ヶ降て高祖を擁護そる事
○高祖依智を發て佐渡國に遷給ふ事
○難風角田の岸ヶ着船して不圖毒蛇を度ヶ給ふ事
○海上の激浪ヶ題目を唱て龍神感應の事
○佐渡國の配所御難難の事
○六箇國の僧塚原ヶ來て問答の事
○本間六郎重連歸依の心を發す事
○北條家一門京鎌倉合戰の事

○高麗一之谷より移りて化導益々盛なる事
○嚴島辨財天示現して本尊を請給ふ事
○高麗十界勸請の大愛陀羅を顯して本地を示す事
○執權時宗靈夢より感じて大士を赦免の事
○日朗赦免狀を持て佐渡より渡海の事
○大士佐渡を發て鎌倉より歸り給ふ事
○鎌倉殿大士を館より召て懇懃に應接の事
○法華宗門弘通の免狀を賜はる事
○大士甲斐國波木井實長の方へ赴き給ふ事
○八代山梨兩郡より信州蒿木まで遊化の事
○石和川より鵜飼の幽靈濟度の事
○身延山より幽栖閑居の事
○日朗平賀忠晴の一子を將て登山す大士名を經一と賜ふ事
○小童は普智大士を毒殺せんと謀る事
○大士上野殿ふ大橋太郎の因緣を詳給ふ事
○日蓮鎌倉桑ヶ谷より龍象坊と問答の事
○四條頼基主家の勘氣を蒙る事
○七面大明神示現影向の事
○蒙古退治旗曼陀羅現證利驗の事
○大士發病預しる死期を知召て池上より赴き給ふ事
○經一磨より京都弘通を伺遣言の事
○高祖大士池上において涉入滅の事
○御遺狀を任て御廟を身延山より築く事
○御願滿足妙法一天より光輝事

日蓮大士眞實傳

東海相模州　小川泰堂編述

（日蓮大士眞實傳）

一天靈驗て日月濟く、四海風收りて萬邦靡らぬ例はあらじ、あゝよかしあくを、本地四八比妙相を稱し、日本國東海より誕生し、末法萬年の闇を照し給ふ、日蓮大士、俗姓の先蹤を遠く考うぶれば、天津兒屋根の神裔よして、皇極帝の御時、入鹿父子の惡逆を伐て、天下の靜謐を奏したる、正二位內大臣鎌足より十二代の正嫡、備中守共實、正歷の元年夏の頃京都を去て遠江國村櫛といへる里より住居せしより其軀男子なき事を歎き神にろの傳統の冥助を祈ること久し、寛弘七年庚戌の正月元日、同國引佐郡井谷神社より參詣し神前より新禮を凝ける時、祠の前瑞垣のほとりより稚兒の啼聲を共實あやしとて立出見るより虛栖の樹のもと、筒井ほとりより綾の衣より〳〵きたる、いと美しき嬰兒ありし抱き揚てあれを觀るより鎭高き男子にて、眼の光初空の旭日よりかゞやき、尋常ならぬ稚兒にありければ共實これを神の賜ならんと、懷き歸て我が子として、此をいつくしを發けるゞ生長よしたりひ、腦力猛く智慧亦萬人に優れたり共實我が女を配合て備中大夫共保を聘、初て姓を伊井と名乘、彼共神前より瑞祥を以て井桁より廣榻を家共絞所と定めけり、あくて共保の子備中次郎共家其子九郎共直、その子新大夫惟直、惟直は子を赤佐太郎盛直といふ、盛直より三人の子あり、嫡子い次郎貞直次い三郎俊直、次は其名四郎政直同國山名郡貫名より銅居するゆゑ、貫名をとつて姓とす、あれ日蓮大士の祖先なりこの四郎政直ゆ二人の子あり、長男い四郎行直、次い六郎直友なり、行直の子重實、重實の子交二人あり、一男い早世し、次男い次郎重忠といふ重忠より五人の子あり、嫡子い腦太重政次い早世す、次い彼三郎神、次は日蓮大士、末子を鎌平重友と號し、此子孫繁平を姓として、今稱上總國

姓あしゐゝをもりて其委敷をつくさず但その來歴をしるすよゐんゐりける、此時よ當て、右兵衛佐源頼朝卿は平家を西海よ追落し、相州鎌倉に都を立、四夷八蠻を伐鎮た、武威を天下よかゝやかす折ゐら貫名次郎重忠と、政直以來、遠州山名郡よ在て、鎌倉よ懇勤し我が領地の民を憐み、文を瞞じ武を厲き、德き家名を落さしと朝暮勵む時しもゐれ、當時源家の執權職、北條四郎政時、ひそうよ諸國へ人を馳、二心ある武家を探りこれを誅して天下の憂ひを除くゐと、怡も劈を拔て五穀を費ふが如し、貫名重忠い性質忠直よして諂ふ色なき、武備を遲しうして其職を勤む大幸ゐ孝よ似ず、大忠ゐ不忠よ混じ、平家の殘黨と志を通ずるやのよしゐやしきよ預り、鎌倉よ召寄糺明をも遂ず罪なくして所領を沒收し安房國長狹郡よ流罪とありしは、建仁三年五月七日の事なりき、其栖べき方とては、東條市河の郷小港といへる海濱にて、浦山近く、松が嵐の吹ゐれて、寢覺の床よ夢と結はず、昨日まで眺ひ暮しなる、男女の影をとゞめず所領なければ粟飯だよ炊ぐべきたつきもあらず、斯を果べき世の住家ならねば、蕎きゆゐりを求め、下總國路野邊なる大野吉濟ゲ女梅菊女を迎へて妻となゐぬ、此は清原氏よして、舍人親王十世の孫裔世よ殘しゐらぬ身よゐれど、夫增の罪なくして、配所の月よ憔悴たまひし面影をいたゐり、磯が根よ甘海苔を採て日の暮るをいとはず、夜ハ麻を績、網をつゝりて、宵の更るを知らず、夫增は次郎を沖の小舟よ命をまうせ、釣する海士の群よ入りて漁獵を事とし妻も夫も軀よ馴ぬ、賤が仕業も恆となり其いとまよハ郷の畫帷よ筆掘術あど教るにぞ、在しむゐしの思はれて、物辨へぬ磯村の伏屋のうちよも敬れ、寵としもなけれども、物不足なく暮しける、梅菊女はいとけなきより、神よ佛よ能念じ事へけるが、此小湊の浦ゐ日本の東海よしそ、朝日よ遮る島山もあし、梅菊女い朝な〳〵、窓の戸しらむ晩天よゐ明る間遲しと起出ゐゝ、鏡を淨かよし香を焚、夫の行末兩親の延齡、いのらぬ日とてはなうりげる斯て承久三年夏の初梅菊

女は夫婦の次郎よ語るやう、今宵不測の夢ゐそ見つれ、慥にゐゐらず、日天子を拜をつゝ、見仰れば、日輪れ光明いやまさり、八葉の金蓮華よ乘給ひ海上はるゐよ飛來、妾が懷よ入と見て驚きさめて、ゐへるかし、婦女の恩ある心より、正なき夢をとつるよと、叱りたまうあとありければ、次郎重忠も、傳然としておとろき、我も日永の疲にそ、まどろむ中に、いとも尊き白髮の老翁が玉の如き稚兒を掌の上ゐ居られ、汝ゐ授る子能養て出家よせよと、再隱再三ぬんごろゐ、さし示く給ひぬ此は不測なる夢想ゐなと、互ひよ語り合給ひける、夫より梅菊女ゐ懷妊身となり給ひ、擔の柏に秋告て、海原くらき時雨雲夜半の鐘よ鐘さにて、いりしか氷る鏡水の音ともたへし冬此來、今年も夢と暮よりり明れば貞應元年壬午の春、時よ人皇八十五代後堀河帝西機の政事を攝て、四海を撫育成給ふ又、鎌倉よゐ四代の將軍藤原頼經公なり、此は右大將頼朝卿の血緣なるをもつて、後室二位尼政子の方のゐからひよりて、二歳の時鎌倉よ請迎へ、當年五歳よ渡らせ給ふを、將軍と仰奉り二位政子の方ゐ、玉體の中よ將軍を護り、武門の仕置、天下の成敗、公家の進退まで、皆ゐれ政子の方寸よて殊よ舍弟北條義時ゐ當時の執權たり、保元平治の國亂も、きのふの噂と消ゐて、今ゐ青の葉ようなて、いひ出る人となく鎌倉山の星月夜日本の大小名、弓箭とる身も取ぬ身も、心を鎌倉よ寄ざるゐなく諸侯の邸宅雲をさゝへ、神社佛閣、堂宇棚曳、街をひらき衢を分け、朝市夕店の繁昌は、谷七郷よ聽ひて、新王の春いく萬代ゐ立のへり、靡せぬ聖代の、榮きい其頃中納言基綱卿の歌よ

吾妻路のゐまた郡のその中よいゐで鎌倉さかへ初けん」と詠給ひしよ、

其繁昌い知られけり、ゐくて房州小湊の浦に、奇特の事ゐろゐれ、此里近き磯村よ、雖が植おきし種もゐき、遠の若葉の生出て、立葉蒐葉の茂り合ひやがて白遮華の咲出たるに華德大いよしてろの色白銀の如ノ、旭日よ輝き、いと美麗を見にければ、此遠近け心なき浦人もゐな不審、夏ならでは咲ぬときゝし此華れ、赤風さゆる冬霜よ、あく珍らしく咲たるゐ、此法よんでたき事れゐりとやする

貞應元年
壬子二月
十六日高
祖大王御
誕生善日
麿と名
つけ
奉る

と、いと怪しく見物す、あの吉瑞のあとゝめて蓮華淵とて今は猶其名所の殘りけり、さても去つとしこゝは配流なる貫名次郎重忠の妻梅菊、はこれ二月の十六日、曉入より、產の氣つき給ひ、此日きさらぎの空いと長閑なる風も止、紅旭潮あきらめきたりさしいる庭の柴垣は、今を盛の梅の宿りふも來馴し黃鳥の、法々華經のこゑいさぎよく、次郎重忠い身を沈た日天子を羽し、妻の安產を祈りなる產舍の內よい、得られぬ妙香のこの得り高く、午の刻ばかりよ、玉の如き男子は生なしさまひけり、此清人の兆もく〳〵と音信て、悦いふ者ひきときらず、中よ齡高おとなびて、望陀木綿の布子さへ、折目の見もる村長が、門口より次郎の主よこれ見たまへ、かゝる不測の事ありと、呼立られ、次郎立いで見てあれば、來花さく前栽よ、忽ち泉の涌出て、高く噴揚滔々と珠を飛しを潔よく流るゝよ、ぞ倖ひ、あの清泉を汲で產湯となせり、彼といひ此と盲夢の奇瑞と夢ならず此兒の生前いかならんと、人にい言ぬ二親れ心のうちろ頼ましき母梅菊とやもらよ肥立この稚兒の面貌を見るよ頤廣く眉高く鼻正しくして色いと白あり口れ氣息香ばしく其容儀凡ならねば日天子の吉瑞よ因て善日曆とこれを名付日よろひ月を重つゝ蝶を追花を摘ていと壯健に生立給ひ日遊大士い此稚兒よ在しけりされば此年をとてしのぎ經王法華の利益を三千界お被らした給ひし日遊大士い此稚兒よ在しけりされば此年をとてむかしを逆算れば大聖釋迦牟尼世尊月氏國雙林よおいて入滅まゝ〳〵ける其年より正法千年像法千年すぎ經て末法よ入て百七十一年如來の滅後ずでに二千百七十一年に相當る彼の月氏の釋迦如來い西天の國王と生れて本果妙の功德を三界よ施ま今この日本の日遊い東海の下賤よ生れて本因妙の利益を閻浮提よかゞやかし給ふ彼は西天の月氏此い東海の日本なり彼の入滅は二月十五日此誕生は二月十六日天竺の法華經は西より東よ傳へ弘まりて正像二千の靈を拂ひ今日本の題目は東よ發り反て西に進を弘つて末法萬年れ冥を照す先聖後聖誠よ符節を合たるゞ如じ佛法修行せん輩いゝゝる大因緣を辨へ知て茲よ悟入せずば無數億劫よも得脫の道あるべからずとぞ思はれける實

よや柳樓れ二葉類伽北卵殼暫日磨い日よまし智慧づきて父を慕ひ母よ遵衍る頃より人よ愛憐ふかく唯假初よ怪拗まあらせし人も長生これをいとおしみ曆を亦ひとたび掌打愛しかるをば日を歷てよ生遺れたまいず忘母れ恨を汚さず乳を不吐三四歳の頃より世の七八歳の小兒の動都ありていとおとなしく常よ家よ在て母のためよ塵を拂ひ席を淨むるの手を扶け父の餌よ事へては塾を摺或ひは茶をまあらせ萬態よ心を配ることいとゝ不測よ思はれけり今四も浦の夕月よ里の河蛍れ三四人友迎ゞはに音信て燈火の影よ居倚きのふは彼所の磯よ螢蟲拾ひぬ今朝しゝ背戸で橋よ結さーて雀をあまた捕たるはと鄙風たる片言もて己が樣い囀るをきゝ幾日曆は頓掉していやとよ曆はさいつ頃慈父の寢物語よきゝはべりぬ程近き事なるゞ京都よ山陰中納言とかいへる人ありて或日桂川をいふ河原よ往かゝり給ひて茲に鵜飼を業とするいやしの老爺ありて大きなる泥鰌をとらへを殺さんとせしを山陰の卿いと憐み身よ添給し衣服ひとつを其料よ取らせ鰌を放ちて還たまひぬ其後山陰殿は太宰の少貳といへる官に成を家の男女を引具をて船ようちのり筑紫をさしを下給ふ此卿よ若君ありて母い繼親よて育ければ深く心よ怨を居て折あろよけれと過ちれやうに此兒を舷より投落したりしゞ不思議や此兒波れ上よありて沈給はず能々見ありければ數百の鼈れ甲海ようかび其兒を捧戴て衣服さへ濟さりしを其儘取揚妻をば路より京都ふ還還給ひしろは若君後よ出家して如無僧部とて道德たかき聖僧よなり給ひぬ此事肉奏へきこにければ後白河れ常たり三年の間離國よ殺生を禁たまひまとぎく生あるものゝ雄の命の悲しのらざるべき其身等も今よ人とし生立ば補の朝綱夕綱ふ數限りあき命を取世の生業のあさましく取るゝ命を取人も他よ逃れぬ惡業あればせんて幼き其うちよ無益の遊びよ殺生せずば同じ報ひを蒙かるべしとまいちぬ舌よりたまへば理も非も譯ぬ賤の兒があくび伸して眼を擦り板金剛よ蹠屐よゝい探しつゝ歸りけりかくて次郎夫婦も曆日磨ゞ心づくしれ孝行よ年月れ憂を忘れてくらしけるが嘉祿二年戊の秋鎌倉よていい二位の

尼政子の力世を去給ひ將軍御齡わづかに九歲なれば世の人浮寂の思ひをなす折柄六月九日辰の刻美濃國時田の莊に六雪降りてつもるあと一尺餘夏の日影に窓を閉燈を開き酒を飲て漸く寒さを凌ぐよし同十六日鎌倉に往還を又武藏金子の鄉には雪交りの雨降出後にも大概とあり禽獸を多く打殺したりとぞ其上鎌倉にも大路小路に霜のふることと雪の如く六月中雨のみ降つゝき晴る空なく風いと寂くして手足も凍凍けり同く七月に初奥州には小礫を降せとと雨よりもしげく屋を碎き屋を破り人の傷つけるもいと多かりとぞこれに依て今死十二月十一日改元あつて明れば安貞二年善日曆七歲この年京鎌倉洪水にして人馬の死滅大なたならず此よりうちつゝき五穀登らず諸國に疫癘多し又辛の卯四月廿八日鎌倉の御所に怪き鳥數千飛群り其形鳩に如くにして色黑く啼て不吉の歌をつたへしばしゝて何地共なく飛去けり鎌倉に僧俗その鳥を見知たるものたにあらねば況て其名を識さる人もなし何なる凶變の惡瑞にやと思うち八月大風洪水田畑山林を荒し翌年にいたり天下大飢饉に時執權北條泰時五十條の憲法を立て國政を勵たゞも四海の困窮こゝに究り衣食なき民に仁義を敎へ難たしかゝる京鎌倉のありさまを風の便にきくにつけ次郎重忠の妻の梅鶴に物語やう善日曆もいや十歲を超ぬれど里の友達と物詩ひせしことをなく走狂ひず殺生せず魚鳥の肉を喫ことを好まず雖をしへぬど神に誓を佛を敬ひ親の機嫌を伺ひつ山に登せ學問さしを玉いれや出家さして玉ひぬと聞事おとに胸潰れ彼といひ此といひ思ひ合せの十年のむかし御身歷を懷妊せし折出家にせよと靈夢の告我を五十路を越なから願む方なき片海の此小湊に補遺く則なき罪に身を沈た浮ぶ時なき宿世の因緣せたて暦を出家とせば先祖に追福身の得脫御ゞも我も後世の深き功德のあからずやと夫婦が語れば妻も悅び曾日麻呂に云〳〵の緒いひ喻し善師もあなと思うち其年も嘉天福元年癸巳四條天皇御諱は秀仁後堀河帝の皇子にして去年の冬八十六代に玉位を踐玉ひ今歲もづけき四方の寒人に心も世の沙汰もやゝ穩に成りにけりとゝに小湊より北に當り

程遠からず清澄といふ山寺あり眞言密宗の靈山にして寶龜二年の開基なり此頃の住職道善密師といへるい道德を高きよし聞傳へ次郎重忠の暦をひらき吉日を撰善日曆を携て清澄に登り諸佛坊に在します道善師に見えあげ此麻呂を徒弟にあむして玉はれと懇願に頼さるに道善師も最快よく受胥つ善日麻呂が容貌の優美にして過ぎを見て且驚し且歡び頂戴をあい拔ひ賞で兒ぞけふよりは藥王麻呂と改名せよとて其儘此山に止たさるい天福元年五月十二日麻呂が齡十二歲の時之けり此より道善の御坊ふかゞいたいり手習ふ事を敎玉ふに二字三字あらずして錄法書跡を帶なすあと年來修練の人の如き當山より南一里餘に二間寺といふあり此坊い道義とて道善の弟緣の兄なりなるがけふ茲に有て藥王麻呂が凡人ならぬを見て斯兒は往々我が宗風を輝やかすべきぞ能いつくしみて敎たまへと舌を卷て語りけるそれより小學を始め論語をさいふ　よりをべて忠孝仁義を喻しさる儒道の書類を敎へ讀しむるに一を聞き萬を知り二遍三遍を過すして暗誦をするをきくに筒の水の道理が如く書漢土の天台大師おさなのありし時父に伴れて山寺に遊ぶるの寺の住僧さし招ぎ兒に登き御經を敎て取せんぞと普門品三行ばかり日づから敎たるに苦なく誦給ふゆゑ和尚を不測に思ひ一品を殘らず敎へたるに進一度にしてあれを誦じ覺にたるはゾ台藥年七歲の時なりしとき く今藥王が手習ふ事といひ物讀ふの肩ならず眞の東晋がたうさに讀を靖海士の眼が家にあゝるうちに繁きゾ又此山に修學をる所化兒迄も並なら愛度兒に出生したるはいうある事と道善も心のうちに驚きゾ又此山に修學をる所化兒迄も並なら ぬ立振舞の藥王やといはぬ者あるあり々れ妬み怪みて信もせず道法ちのき清澄も海山隔り心地して彼方の天をうち詠め人思隱し山寺に手習ふ業と讀書の數々多ゆ僧達にあらけなくそてあをれ我父變し母床しと泣もやすると思わび彼山深く訪んと幾度も胸にあまりて宵出るを夫次郎に告たられ訪ふとうさき清澄の山のはたてを我か子ぞと露に露にあちつゝ憂年月を送られけるゞ哀き婦女は心に思立つ矢もとゝ夫婦に說てけふの

日を優曇華の咲心地して麻呂が好る岩梨よ種々れ物取ろへり飾磨の褐れ袷衣赤皮染の肌衣まで傳の男よ持つゝ清澄よおをむきて山よ登れどいかよせん女人禁制の寺あれば沉障の雲よ遮られて入事かたき密殿浄土心の月もいや遠り側の石よ腰うち掛しばし憩ひよ伏沈たまひしよ枯木を高き背負たる寺の奴僕の山路より歸るを見かゞ喃々と呼とゝゝた此山ゐ諸佛坊よ學問せる藥王よ母が參りぬ疾出を無事ある顔を見させよと坊の庫裏まで言傳を玉ひぬと詞せいしく嬉きたまへ寺れ男はうあづきを杉れ木陰森の下茅もて葺るい裏門よやゝ彼方をさして喘きつゝいとも重躰よ入よける藥王はうくときゝ賢母よい似氣もなし出家をさしにおこしたる歴が安否を訪玉ふは投し礫を尊る迷ひ値まじものと幾度か思ひかへせどしかずゞよ恩愛ふかき慈母を逢て此まゝ歸しなば不孝の罪の深かるべし昔唐土よ曾參といぬ孝子ありり他よありける日其母曾參い歸りの遲きを待わびて指を噛玉ひければ其心痛よ應へいろきて家よ歸りしとぞ曾子が母の噛指の其子の胸よ通じたるは親子いひとつ血肉よて冥合所感の不測なりと思ひりへして師れ坊にりくと告寺門を出て慈母に値玉ひしよ梅菊いそれを見より走伯藥王が手を取て此年月繰し煩ひはべるいと喜の涙せゝ敢ず道理よこそと思はれける藥王麻呂はゝ禮を正し麻呂もさいつ年慈父よ伴はれ參らせて此山よ入し頃いさすがよ里の戀しくて時鳥なく梅雨月の心雲も晴やらず湖ぬ軒端よ袖のみぬれをいとゝ悲しくありけれど師め御坊れ情深く三月なゞき教の窓よ寄を讀唐土の日本の古事をさへ此彼と思合て此程い心長閑き彌生空霞いと高き松杉の黒きよ交る山櫻さくかと見れば入相れ鐘の音よ散花ふゝき花より脆き夢の世よもれを重て悟さぬ悪業の因緣よ繋れて或時い地獄よ泣又ある時は天界よ樂を又畜生よ身を苦しめ餓々人間よ生れてい生老病死れ四苦八苦百年久しき胡蝶の夢さぬずはかゝる凡身のいつゐ山離れ期わらん嚴よ百年の榮耀い風前の灯火一念の發心い命後の礎とりきゝはべる歴も頓て出家してかゝれとてしを垂乳根の撫玉けん斯黒髪を剃落し佛の法弟の數よ入三寶國土の恩を報ひ

一切衆生を助る身とも成はべれは先父母を救ないらせん御經よも四恩のうち父母の恩第一とあろぶ暫ひれ剃髮染衣ろれをも思し譯られず慈母の御歎き猶ふかくば歴が菩提の障りぞかし此上は安否を問せ玉いぬを慈母の厚情と喜ぶべしさもがよ長き春れ日と稍傾たり木立の茂る谷陰は里よりはやく暮るよなん山路の程も心もとおくへべるはとゝと穏よ急ゞせは慈母も頻りに歎息しし見ぬ間よ藥王が長者たる菩提の月よ心の闇も明けを喩すべき子よ喩されて嬉泪よ胸ふさがり唯呼子鳥路わけを泣々家路よ歸り王ふ此梅菊ゞ涙を注たまひたるを涕涙石とて今よ猶清澄の山路よ殘りぎゝよ詣ずる人々の其むりしを思ひ出てともよ涙をろゝぐよなん有なる光陰は弦を離るゝ矢よりもはやく春と明秋と暮て今年嘉祐三年丁酉の冬藥王今を十六歳よありければ道善密師道場を淨め一山の大衆を集れ十月八日剃髮の規式嚴重よ通經梵唄みづから道師となり繼王麻呂い御髮潔ぎよく樂恩入無爲眞實報恩者の文を三遍まで唱揚唱揚翠の黒髮を剃落し紅白の袂を黒染の袖とあらためたまひたる此ぞむりし天竺國淨飯大王の御子悉達太子御齢十九歳よして王宮を忍び出王や冠錦れ御衣を御記念よとゝめ麻の衣を玉体よ纖ひ檀特山よ分登玉ひけん昔の則の忍ばれて哀よも尊くぞ思はれなる此より御名を是生坊道長と呼改れ諸事を掬樂專一佛理に心をもたれ眞言梵語の奥藏を學ひ玉ひ教相ゐは眞言三部及び諸論等事相よは求聞持等れ印契を相承し法兄淨顯義淨れ二人は所化僧多きろの中より道長師をふりく懇み學問の志ざしをたするもゑそれこれと力を得て此程は一代藏經ゐとりかゝり晝夜肺肝を碎き給ひしゞ一日心よ思すやう佛法といへば釋迦一代の法なるを今八宗十宗に立別れ己ゞ隨意弘る法を我こそ佛の本意を得たれとおもひ彼をろしりこれを謗さらよ一轍なきよ似さり抑我が本師釋尊はいづれれ宗旨ゞ眞言宗か華嚴宗ゝまた教外別傳の禪宗あるゝ今御經を案ずるよ決して諸宗兼學よあらず太海れ潮よ二の味なく如來の教法さたて

二の道にあらし其尊釋を知らんには智者をならでは協ふべからず幸ひ當山此本尊虛空藏菩薩は東方莊嚴世界の大菩薩にして一切衆生に智恵を授けんとの誓ひなりしこと大乘經に見へたり其上法堂に安置の尊像四寶鎧の開闢以來稍五百有餘年利益多かるべし眞像とさけば及び祈願を願ばやと湯水を絶食を斷し御堂に籠り一心一念に祈念する事三七日願くは佛智を得て如來の本懷をさとりあまねく諸宗の是非を改め佛燈を一時に揚て末世五濁の闇を照べき願くは衆生利益の大願をあはれみ日本第一の智者と成て玉いれと丹心骨を削りて新々る此御堂の側に清水を湛へし池あり此池水に蓮も猶ほ明星の星影赫々として浮びたるはいとも嬉しき吉瑞かなといよ〳〵丹誠祈念ありしよその願滿する曉天に夢現の境もおぼえず朦朧たる其中に白髮銀の如くに成て御服の光冷凄き異人影向ありて右の御手に光明まばゆき大寶珠ともいひつべき玉を持汝が祈る智恵を與んずと云て斯を渡し玉ふ道長師右の手にあれを受て左りの袂に入収給ふ瑞の風の音ろひを身に降ろゝる露に目ぐれ佛山高く見仰れば本尊の寶冠よりけし圓鏡のおのれと脫々金扉に八字に開けてありければ大願すでに滿足ぬと心中の喜悅たとへを取に物なく此曉來の禮讃にふかく佛恩を感し本坊へあへらんと御堂の階側三四級下立玉ふ其折柄俄に胸元氣逼り夥しき血を吐てぞ其儘氣絶し倒れ臥玉ひけり同寂の所化あれを見出し坊に擔ひ歸り介保せしに忽夢の醒たる如く聊御身に夢を覺へず剩へ己れより境智格外にひらけ雲霧を拂て天の三光を仰るが如く萬法すべて疑ふ事なく辯舌まさに明了にして電光の如く一言ごとに教理を決すあれ全く凡身不潔の血を吐りくし唱に六相淨を經得なる去給ひさる利驗の程あそ尊とけれ

清澄寺に千光山と號す寶龜二年不思議律師七開基にして慈覺大師これが中興たりいま寺祿八十石東寺流の眞言に屬す本尊虛空藏菩薩に開山律師の靈作ありとぞ此山に宗祖大士初發必の靈地にして此寺に修學ありし事七年に及び慈母梅菊が愛別れ涙をろゝぎし湯涙石普光天子の影を宿

したる明星が池あり凡躰の血を灑たる處にその地に生ずる草の葉に血の染たる斑あり今に凡血の草といひ傳ふまことに當山に大法甚元の靈地とぞ思はれける

かくて曆仁三年戊戌の春に入いさゝか道長師はいよ〳〵勤學いとまあるに木を枕の如く丸く削なして枕とし御身つかれを覺ゆる時に此枕に肘を倚てしばし氣を休給ふもし眠氣付きぬれば轉び傾くも忽快く睡に引きかたしあれに唐土にて四枕とて學問に心寄なる人の造り初めたる物とぞ書に題に繩をかけ股に錐を刺て睡を防ぎしも同じ心の學びの關それは經學一世の教これは內典八萬四千釋迦如來の說給ひし一切經とぞ聞えしに七千三百九十九卷也されば大聖釋迦如來十九歲にして出家さし〳〵御齡三十成道あつて相傳の經を出家滅道場に於いて十玄六相の理を說給ふこと三七日これを華嚴經といふあれ釋尊說法の最初なりあれより阿含十二年方等十六年般若十四年以上四十二年佛齡七十二歲の御時靈山の嶺に法座を移させ給ひ法華本迹二門を說て如來出世の本懷を遂たまふ事こゝに八年あれを法華經といふ華嚴方等般若法華あの五時を說き了らせ給ひ御とし滿八十にして晚涅純純陀が家に入て一夜涅般經これを遺誡に殘して二月十五日涅般の夜に入くれ給ひし此一代の說相を一切經とは名づけたり道長師に此重漸く一切經を聞つゝし今宵更闌の程は日さし入窓に涅般經を讀給ひしに此御經の中に依法不依人といふ金言あり文の意に世の季よいたれば我が道を學ぶ者詞に巧を我意をのべ種々の宗旨出來すべしこれに依て我が入滅の後いかに智慧かしこく其位貴くとも人師の詞に用ふべからず我が說置經文に依て佛法に判をべしと末代の規を定め給ひし最期の御道に入り道長師に此御經を拜し夜學に燈燭も滅はりに御涙に咽び給ひ自餘の宗旨は未だこれを知ず我因緣ありて眞言密宗に出家を遂當宗の流義を學ぶに大日如來より密法綿々とこれを今に傳へたれども金剛智不空等に說を本とし日本に傳へ弘法慈覺兩大師私の了簡を加へたる事に多く眞言一宗既に佛の法にあらずして凡夫の法なり亦同じ御經に釋

尊ひとつの譬喩を揭王ふあゝよ巨なる象一眼を繫ぐ盲人多く衆りて探り見る後よ一處よ會合し一人の盲目がいふ様象い膝よ埃たる桶の如し一人いいやとよ我か見たる象い掃帚此如しと又一人い太鼓此胴の如きと又一人い箕の如しと衆の盲目諍を止ずされば其耳を捉へし者い箕の如くおもひ腹を撫し者い太鼓の如くといひ尾を捻りし者い掃具のおとしといひ脚を抱へしものい塗桶よ似たりといいん皆あれおのれが探り見たる處を知めるよて全き象此形を辨へざるなりと說たまへり我身不肖なれども八宗十宗の人師樂桶よ掃帚よと已が得意立たる諸宗門を十方無凝の眸子をひらき彼の全き大象を一眼よ見定べし父母養育の恩を樂此無爲の敎よ身を任するもの何ぞ凡僧傳來の敎を守て如來ノ金言を暴いざらんや今い此山此書籍もよをつくしぬ間へき師あく語るべき友なしいかんして我志願をいたさん此磯村山の片邊土よむあしく心を焦すことというよも信き月日なりいて や鎌倉よ趣て其宗々の明師よ問ひあらゆる和漢の書を讀ば智解をたすくる邇徑ならんと今年秋の初つかた師の御坊よしばしの暇を乞清澄をうち立て上總より下總よかゝり武藏なる隅田河原よ着玉ひけりこれぞ名よおふ武藏野や都いひろく十郡よ亘たり西い雨降山秩父が嶽南い多摩川北よ荒川こは隅田川い東の境よして郊原四方向百里旅人の也く方々よ踏分て蜘手よ迷ふ途多くむあし藥平の朝臣水禽を見て都あひしと讃れたる其名所もおぼつかなく渡守の男よ問へば彼方の山は待乳山おもかけよたつ嬉の森鶴の群たる千代が岡春よあらぬど淺ず蹋かゝる果なき野原よも名所い多くはべるかしと穗末波よる枯蘆を分つゝ片舟さしよする水手の下よ繇きて立鳥よりも旅人をおどろかしたる狀の風野寺の鐘を吹さろひ日いくるれども虫の音よ心おぐさむ花野路入山の端の遠くして月さへ影を宿したる千草の露よ裾うち濕り夜も稍初更よ鍾々たるころ海近けれども船よする浦おきゆゑよ名づけたる帽子の里よたどりつき宿りを求たばやと思せども賤が住居の舍のみなれば人宿すべき方もなく困じ果玉ひたる折しける水樺の生垣を一圍ある門口より旅の御僧よやどし

まゐらせんとゐりければ遲長師い喜び玆よ一夜此ぐみをうけ玉ひ爐燈の燭よさしよりて折焚柴よ袖を乾かしおいせしに家の主い持佛よ向ひ念佛してゐりけるが稱名はてゝ玆よ居て種々の物語ふうち泥て遲長師此請玉ふやう今宵こゝよ止宿をめぐまれてやどりて見ればいかよぞや幼稚者の容器獅子の頭よ狗張紙土もて造る偶人の數の雜器ようち交て佛像とそゐれわやしまて手に取見ばあいいゐ本師釋尊の立像よて押たる金も村剝て御手よ疵よ闕損じいと勿躰なくおぞましくと思ふよも但ぬ念佛三昧我れさへこゝよ宿したる佛法歸依の此家よ但氣おきとと意も解ずはべるいと難じ玉へば主いうちも竹の火筋に灰搔あでつ拙とよ不審い道理歪極我も初は佛と云ば同じ佛經と云ば同じ經神も佛も別なしと思て行しよ近頃所用の事有て久しく鎌倉よ在しよ當時念佛の生如來大阿彌陀佛とて尊き聖者のおはそときゝて其處よ受戒しまゐらせて念佛安心の要路をきくよ一代聖經八萬四千其數多　はべれども末代の我等が修行よは念佛三昧よ如いなし總ち釋迦よも餘師よも心うつして邪をば祓ひ雜行とそその修行の磯れ故たとへ念佛稱名をるとも千中無一とき千よひどつも往生い遂りがたし唯諸佛諸神を振棄て一向よ念佛せばよしや五逆のわれはとて弘き誓よ漏やいそる斯い彌陀尊の本願よそろの御經よ明白なりと法然上人の遺釋集とりいふ書を讀釋して いとありがたく說たまふかゝる事の實あればあたるも知らざるも念佛をる人い濱の砂此數多し天台眞言諸宗の名僧智識さへ今いとあへぬ人もあまたかゝる尊き敎をきゝ家よかへりてあれまでの持佛の釋迦を捨ゐも信と雜具の中ようち入て納入此阪ふさし置さるをいつの程よか小蓋帷が持出一笛に太鼓ふうち交い獅子と釋迦とを躍らせて遊ぶものから打割て風爐を焚にい堪らたと其儘よさしをきつゝ語るをきゝて遲長師は且おきれ且悲き法衣の袖よ涙をおさへ我い房州小湊よを浦崎ちかき山寺此僧おるか齡今二十を超ぬどもつゝ〳〵佛經を見るよ今此三界は釋加一佛の有緣なり彌陀稱名をすゝむるとて本佛釋加を禮拜するを

雑行とて飜したるはいあるまじや背の黄色き我口は言いいぬお増れども一夜の宿は露しのぐ恵を
お報ひんべるまぞ昔天竺伽毘羅衛城で五百の猿猴あり折しも秋の最中おろ月いと冷る溪間まうつ
り〻影を臨むでゐれあそ探らんとさそがは深き潤河は猴の智恵に浸ましくひとりその猴が松
の下枝は取つけば又ひとつの猴そは下に手は釣さげりのくしつゝ五百の猴い五百の猴に網をさかた
る如くして漸く水は手をさしゝ鏡に光六月影を鳥よ驚よと騒もて縋ひらかん深ともはてず斯夜
あすがらなすうちは松に木理の枝折て五百い猿々殘りなく水に溺れて死るとぞ本佛釋迦牟尼を
観ず称佛彌陀牟尼月影を一心專修の蔦蔓より取らんと思ぬうち命の松の枝折て奈落に底は沈を
やせんといと想は就愉したまひけるは若きは假ぬ者明の御僧かな夜もいとく更たれは納戸は入
て眠まり玉へ翌日またきのんと欠伸は念佛唱ませて主も其處は臥はゝり遠長師の明の朝おゝをう
ちは先鎌倉は入なば昨夜主の物語はきゝつる大河がもとに導ゆき書時謂宗は秀は念佛は心を寄
浄土は安心を明バやと心いるぞと迫はあゆかず漸く其日の来の刻その地にたどりつき車小路とい
ふ所はいさゝり繰故を尋ねあゝは野晒と枕うるは倉の繁昌は問しは塵るは昼ひと往来せはしき市人
は旅は心を慰はしばらく寄れを休は給ひけり當時鎌倉の執權職北條貞時平の泰時は去る元仁
元年六月十四日爽義時は逝去あり嫡子なれは北條を繼で執政たり泰時は賢慮温順にして仁君の
譽たあく簾謝節義を心に存し專ら天下は政道に預り記錄所の門は鎖を掛置不時は訴を聞給毎月十
月廿日晦日を決斷の日と定は頃人評定衆を聚は訟の理非を決も其政務厳加はしてしあも慈愛ふ
かく常は側は人は敬て宜やう人として足ことを知らずは百
萬の財寶を積ても安き心なく無理は非道もこれより起るなどいふよしを聞りて人は萬世の義直な
る道を論玉ふ故君の御側に伺侯る人はい嘛は交る蓬の如く曲ところいわらざりけり時しも弱生
十六日評定所より退出の處庭の一本の櫻花そよふく風はきのふ〻ふ梢淋しく散ければ泰時しば

しうち詠は天下の政務はいとまおく風は花人を待ず今年は春は色香はも飽で別るゝあおしさよと
筆を染て

事しゝき世のならひこそ物憂けれ花のちりなん春もしられず」と和歌を詠たまひきゝる優美
はして明察なる泰時晝夜心を政事はし玉ふゆゑ諸國穏にして鎌倉は年々は賑ひ増り鶴が岡赤橋
は前は常は騎馬の供待多く長谷觀音の大路はい嬌艶代參は女剰與ひきもきらず大藏は藥師供養
終れば街小路の不動は開帳は標を建繽紛街の遊女佐々目が谷は歌舞妓放下物見但社商人おの〻様
〻は稼業も知らで被る聖代の恩その街衢の繁昌は今を盛りと見にけりさて日蓮師は兼てきゝ
つる大河が住所をさづね給ふは御所より東十八町ばかり霧が澤好見といふとあろは庵を結び極樂
往生の一門をひらき鎌倉中の男女をありめ法談を師も亦その席は交り浄土は宗意を聽給ふは浄土
宗といふ觀經雙觀經阿彌陀經は天親菩薩は往生浄土論をそへてあれを三經一論と稱しもて宗旨を
建我朝は法然上人といふい美作國稻岡の人父は時國母は秦姓ある夜夢は剃刀を呑と見て懐妊
は長承二年四月七日誕生在まし生れおがらはして敏悟發明なりしが惠心僧都の往生要集を讀で
初て一切は經論を捨て念佛一宗を建立し給ふされはいかある五逆十惡の凡夫ありとも自力は根性
を捨南無阿彌陀佛とさへ唱ふれは北惡世界の濁を離れ九品蓮臺は彼岸へたやすく往生なずことい
ゆめ〳〵疑ひあらぬぞかし法華經言説は聖道門の難行雑行をば擲置て唯樂のうゝる凡夫を救
ひまそ大慈大悲をそれおと建久五年甲寅選擇集をあらはして無常をさとを餌撮水おいれ尊き
聖教は法衣は袖をうき合せ黒谷吉水のわたりは道場をひらき一向は專修念佛をそゝは給ひける尊
永元暦の合戦よりいまた十年はならざれば親を討れ子を殺され兄弟を失ひ妻子は別れ世の憂目を
見たるもの幾千萬ぞや幾億萬ろや血腥き風いまだ街頭を去ず哭聲叫びの脩羅のこゑ耳は殘りぬ
かゝる恐ろしき憂世を唯一睡の夜ありけり哀れいあなき飛花落葉の夢の世は何を樂み何をう待ん

と思なる身もうしあきも無常の風の心に染亡人の菩提の爲我が後の世の願よと念佛の聲四海まあまびすゝ何ある無道心の者なりとも高聲くわ唱法然上人の唱名念佛よなびかぬ草木ハあかりけり

今法然上人建暦二年の遷化より今年暦仁元年まで星霜わずか廿七年教遊ハぬ十即ち生遊長師も此念佛よ心を委ね安心の法門よ心耳を澄し給ひるまたこの頃念佛者の語るを聞給よ佐輔か谷ふ然阿良忠上人とて法然上人ゆ孫弟子よして學問ひろく念佛の得悟たしあなるよしをきゝ遊長師又あゝよも往通ひ三心四修の宗旨を受給ひるるれより延應の秋くれて仁治もいや二年を送り給ふち彼の好見の大阿上人病の床よ臥を古今の惡病を煩ひ苦痛よたへかね霜夜庵の中を轉び泣叫びつゝ虛空を掴で息絶さり遷化ゆ後化骸を見るに身縮りて小兒の如く其色黑くきて墨を塗たるが如しとぞ其隨身ゆ弟子等の物語よきゝさてゆ淺間敷あさかな守護國界經ふハ死人の十五相を觀て地獄よ落るを明し天臺摩訶止觀よも死人の形相を委しく敎へ給ふ此經釋を鏡とするよ大阿上人の地獄ハ疑ひあし凡俗の身あらば過去ゆ宿業もあゝよ現るともやはらん道德圓滿の上人數年の修行ろの證なく臨終の正念を失ひ最後よ地獄の相袋顯したるいいかゞぞやあれ正しく佛意よ協ハぬ處ありて其現罰よあらぬやと我と問我と答へて黙頭たまひけり又此鎌倉の繁昌よ諸宗の學者十宗の碩德淋の野よ立茅花の如くいときら〳〵たくみゆるもゆゑかれよ問これよ緯學解を凝さんと思せどもいあんせん鎌倉も泰平久しく御代の習ひ文道武道美業多く萬般すべて花車風流にありもてゆき琵琶を彈じあるいは爪琴小鼓よ囃す調べの糸竹も都下の白拍子袂かざして媚を唄ひあまめきわたる風俗のいとゝ出家よ押移り錦の袈裟よ七寶の珠をつらねし百八の煩惱つなぐ艶幣稱佛事供養も布施からと濁心の貪慾無數まあとしからぬ事のゝ多ゝ我も亦ゆ假初の草枕五年こゝにありければ一先安房よ立うへり其上に兎よも角よも思立ばやと歸國の要意彼あれと湖へ給ふち二月四日夜よ入戌の刻頃西の天よ赤白の氣三筋たちて二筋い程なく消て赤き一筋火の柱を建たるが如く中天よ衝立たり町中の男女驚を見物を御所よおいては陰陽師安貞を召て御尋ありけるよあれい對形の氣と名づけ俗に火柱ととなへ昔村上天皇康保年中あられたるよし萱記を引き書上せばいうなる事の前表よやと上下安心もなりりける遊長師ハ此取沙汰を後よきゝるし房州さして歸りたまひける幾程なく同七日の朝一天曇て雨にやあらん風にやあらんと見内よ己の刻頃大地俄よ震動し山鳴谷響鎌倉府内の大小名堂塔伽藍を搖潰し土煙天に覆ひて暗夜の如く其中より處々よ火燃出男女の泣叫ぶく聲いと哀れよ震動の間にきあ〳〵物凄も慄しなんといふばかりなし此一朝の地震よ人畜牛馬等死滅損傷ろの邊際を知ず御所よりは四日ゆ火柱七日の地震あはせ記しを京都よ注進すうゝる鎌倉の騒動を旅おきゝつゝ遊長師ハ東條小港よ歸り若兩親ゆかはらぬ面影を拜し鎌倉の物語ふ春の一夜も明やすく次の朝ハ清澄よ登師の御坊の慈なきを喜び此年月心をひそめ修行あしたる淨土の一宗ろの外諸宗の論義今古名僧の物ゆ宗り彼此同座の僧達へも談じ問せ給へハ師の道善をハじめ二間寺の道義もあの席よ在し淨顯義淨ろの餘書遊明心等同宗の所化まで且新しき物語よ感入ろれ達辯といひ才學といひ一山の衆徒勝をうつゝ驚歎し師の御坊ハ喜びの涙席を沾き給ひける清澄ふしばし在すうち小乘權大乘法華眞言の四門の戒行ハ次第を詳らかよしるき戒脉即身成佛義と名づけ山内ゆ僧達ふ示し給ふこゆ法門筆作の初なりかくて倩世の有樣を思ふに鎌倉は當時日本の大都會なれども法を弘むるよいよろしく道を學ぶよい益なし又あゝる山寺ハ閑寂なれども書籍よ乏しく其上道を談ずる友もなき千將莫耶の銘劍を屢磨ずはいかよせん傳へきく北敢山ハ傳敎大師圓密戒檀の山といひまた三井寺東寺南都の七寺ハ今の倡いうどくともあれ其宗々の開山ば入唐渡天よ艱難を凌ぎ苦修練行の跡ゑれば經論書類も定て多うらんいでや彼の山々を遊學し先師ゆ道をうかゝはゞやと其心搆しつ旅の用意を僧の身は立ことやをき水禽の跡よおさしと道善御坊及同宗ハをいとまを告今年も暮る秋の日の日影よ笠をかざしつゝ京都さして程なした

まひけるゞ鎌倉に立寄年頃親しき人々よ骨信給ふよ世よ國家の棟梁と頼つる北條殿時も此六月十五日春秋六十二歳にて草隅一時の露と消たるひ暗よ燈灯を失ひたるが如く政道れ古實忽よ亂なんとも泰時れ嫡孫四郎經時武藏守に補せられ鎌倉の執權をある為朝のとと昔よ似ず人のこゝろを改りろのうへ去年丑れ秋より五穀登らず二年の凶作四海あゝに困し世のあさましき事いふばかりあし道長師に鎌倉の旅のやどりよ思はずも北條山の學僧尊海といふ人よ因を結び種々佛理を談じ年ころの友の心地して旅愁あくものゝうさらひ求よ叡山よ學問の志願あるよし語り給へは尊海も大きよ喜び已は座主信尊の法弟よて經廻なれども叡山の四俊とう人も知る者なるが今度法門の事ありて鎌倉れ御所よ仕候ものそゞ用もへや果たり御身へ才學の壯士とおはしるゞ疾叡山よ登り給へ我ともないまいらせんとあり給るよゞ間に灯火渡りよ舟頼ふてもなき同伴と道長師へふゝく喜び秋れ日頃しの短くて其夜へ懐嶋よ一宿し書物くらき竹れ下けふ越ぼふる足柄の關路はどおく駿河なる百度見ても風よ姿さだぬ富士の嶺のけふも見へけり明日はまた字都の山邊の蔦紅葉わをるも夢あ武士の矢矧の橋の一筋よ皇都をさしていそゞ身は關東の渡し風寒く旅の疲姿はうりさじとけふれた曇る鏡山志賀の湖水旅清き道長師は彼の尊海よ伴はれ坂本より叡山よ登給ひつら〳〵四境の風景をながめ給ふよ西北へ山城國愛宕郡よわたり東南は近江國滋賀郡よ屬て嶺は四明か嶽とて人跡絶たる高嶺にしてこゝに登れば諸天の御殿ときおへンべし鴨川八井の二流愛宕高雄の山々より淀川の流れ遠く難波津の浦より蒼海渺々として帆を掛たる船は昆蟲の蠢くに似たり東南れ眼下よへ唐崎の松粟津の濱湖水の樂波悠々として沖の小嶋竹生嶋は水鳥の波よ遊ふかとあやしまる山水の美景四境を廻らし高れ風色是ずといふ事なし其接へき學窓れわたり樹木森々と生茂り庭に雲蒸若樹かよ山は默して佛の禪定を示し水へ語て如來の説法よかたどる億萬の經論へ一山の草木より多し三千の學僧は智解を凝してあしましあらず實や傳教大師へじたて北山を開きたまひし時

阿耨多羅三藐三菩提れ佛道我が立補わ冥加ならせたまへと諸王ひしもいと尊く天竺の鷲山歷士の天臺山とかくやあり〻ん我此山に久さしく修學せば一世の大師も疑ふ成就すべしと深く喜び始たを法華經をもけゝ我が本分とさだめ三塔の學衆よ親しミ給ふ爲安樂の靈地を繁盛し天臺一宗の學を講ずるとろの一日の學問除れ僧三年の修行をなほおよびがたしこゝよおゐて當山の役衆よ評議して東塔の圓頓坊といふ一院を住職せしめ此ところ淨明經面又心賀おどいへるいづれも三千大衆の上頭よして博學れ聚れたりし道長師へ常よ此寺の人に立交り經を講じ釋を論ずるの外他事おゞ月日を送り給ひゝり今朝しもまた常よあわらず香を捻り日課の御經よ心をうつゝ焚昔曉々と瞻澄し深く佛意をかんゞを給ふに上行無邊行等れ本化の大菩薩末法第五の今よ出現し法華經をもつて廣く濁惡れ衆生を救ひ給ふべきよ御經ゝ明かなり我佛緣あひなく進ては天臺傳教よ見へず退ぞいてい彼の上行菩薩出現の時よもいまだ逢來らず何をさのみ雖を師として今經れ利驗を仰がんやと御沿ろゝに膝をうゝほしける折へや講堂よ大衆を聚る鐘の聲溪間の裏の際もりて皇々ときこゆるよゞ御經を卷をさんつゝ立禮し徐々ゞ屢て講席よ出勤あしゝひゝり此日學徒多を聚りて講主より法華經と大日經とれ差別いかよといふ問を大衆よ出ず道長師席を進み法華經は醍醐の極説大日經へ生蘇味れ權ゝ力士と小兒へ腕比べ此二經に何の論かあらん當山へ慈覺大師よ至て開基傳教大師の法水忍ち彼の眞言の泥よ濁りたりと粗それ條々を舉て席を打て談じ給ひゝり我朝法華の元祖傳教大師といふは神護慶雲元年を以て生れ名を最澄とよぶ初め山科寺れ行表僧正を師として六宗を學ぶ後漢土よ渡り天臺の教法を傳て日本よかへり大ひよ華嚴の論筆の六宗を破南都七大寺の高僧蜂れ如く起り傳教大師を佛敵と罵る時よ延暦廿一年正月十九日桓武帝高雄寺よ行幸ありて彼の南都の六宗奏議勝劣等十四人を傳教よ召合給ふ日出はれば星あくれ法華の大典ひとさび出現して一切の諸經何の光輝りある唐の天臺へ釋迦よ信順して法華を四百餘州よ揚今

此傳教い天台ゑ相承して今經を日本ゑ弘ひす獅子一聲吼て百獸腦腐るが如く南都の六宗跡を削り六十餘州ゑ教大師ゑ帰伏せりしかるに法弟義真圓澄いその法を守護り給ひけれども慈覺大師弘法の眞言とあづけ又別ゑ理同事勝といふ義を立て玉ゑ瓦をろへ酒に醋を加へたるやうゑ四宗と法華と並び合せて教山の宗派あゝゑ濁りたるよし比叡において宣出し給ひけるにぞ一座興さめて見へゑけり兼て此學友尊海あの座ゑおゝしけるが遍長師の袖をひかへ講論果て我が坊ゑとをゆひあへり筑紫宇佐山の茶を煎じ掬うち豆ゑ獅菓ゑ黄物など取いでゝ饗應がてらうち解ての物がたりゑ遍長師のさまふ樣あの年月天臺傳教両大師の遺教を深く考んがふれば慈覺大師とそ心得ぬ身へこの山ゑありて其宗流を繼ながら心い雲と曇染ま袖ゑも聞ぬ師敵對今い一山のありあく何時しか慈覺の宗風ゑ染たり其經譯を知ずして在す君かは君はまたいかゝ思ずと問り給へば尊海もさしうつむきて應もせずひそかに其天機秀逸の才智を感じ給ふ遍長師は一山の老弱みな其實學ゑ快き今年寛元四年午の春横川華芳谷淨光院ゑ住職せしゑ圓頓坊を兼帶して名を三塔ゑといろゝを給ふ三非寺南都高野山の遊學も皆あれ教山修學の餘力にしそ春秋あわせ十二年此山ゑ心をとゞめられ一期の修行全く當山ゑ成熟すとそ思われける此程い一代經の要文ま處ゑ抄書ま三藏要文といふ冊を作て學衆に示し給ふ猶當山の宗風ま乱れたるよまを時々參會の序ゑもつて此事を歎き談じ給ゑ永和このゝ三百有餘年慈學の學風此山ゑ染中ゑひろがへるべきゑとわらず同友の智識博學の徒もあれを聽て説ばず還て苦々敷おもひけるとこれ全く傳教大師の化緣あゝゑ斷絶の時節ゑやあらんと深くなげき思しけるこれより折々京都に出て内日さゑ大裏山の春のあがめゑ九五ま空いと長閑ゑ百官百司の袖を列ぬて參内するありさまゑ赤裳引官女上臈達の花見がてらゑ神酒を促がし都畫の嵯峨野ゑ若菜を摘土筆を折さすがゑ京の春氣色夢と悟りし世ありしも現ぞゝろの移りもて柳櫻をこきまぜし都を春の唐錦なゞめもわかぬ風景を遠近見めくりつゝその夜い五條油の

小路天王寺屋といへる書籍を商ふ家ゑ宿り玉ひしゑ主翁淨本性質篤實ゑして才あるものゆゑはやくと師の稀當あらぬを察し一向こゝゑひきとゝいた妻もろともゑ疎略ならずとてなしけるあれより京都に出ていつを此天王寺屋ゑやどりを定め主夫婦も他事なく尊敬せしゑ不測の大因緣ゑて後年ゑ及び主翁淨本ろの妻妙とともに法子とあり淨本い弘安三稔九月十一日をもつて卒し其孫涌妙宅を轉して寺となし本遍寺と號す永緣二年中興ゑ及び本國寺日栖上人寺號を改む今の妙蓮寺あれなりさて遍長師い淨本が厚き情を喜びあゝゑ滯留なし玉ふゑ此頃圓爾和尚とて普門寺ゑ住し臨濟を弘むる禪僧あり遍長師折々この方ゑ遊び玉ひたるゑ圓爾和尚もその博學智辯を感じ其法弟等ゑ向ひ師を指さしかゝる器量ならでい衆生の導師ゑは成がたしと語られけるゆゑ其頃人いひ傳へて師を輕からずをてはやしけるとぞ圓爾は後ゑ聖一國師とて世ゑ名高く寛元年中九條關白道家公の本願として一寺を建立す遍長師平日の交り深かりければ結緣の爲ゑ大なる良材を一本寄附あり しゑ程なく諸堂結搆してこれを京都五山ま第四ゑ淮じ惡日山東福寺をいふ今ゑろの贈りし材木い柱となりてこれを日蓮柱と稱し世ゑ奇特ま利益ありとて削り取者多かりけり又同頃聖興寺ゑ道源といふ僧ありて曹洞一派ま禪を華洛ゑ弘通す遍長師又此僧ゑも親しみ玉へり今京都ゑは道源禪師圓爾和尚といひ又其上ゑ唐の禪僧道隆蘭溪和尚後ゑ鎌倉建長寺の開山となりし大慧禪師とて世上ゑ聞へさる唐僧の來朝して泉涌寺の來迎院ゑ住居し世の渴仰大方ならず遍長師あれを聞玉ひ泉涌寺い禪律眞言淨土四宗兼學の大山ゑして開基已來宗朝より渡りし經論ろの外佛具等もいたありときく能僥ひと來迎院ゑ入道隆禪師の御下ゑひろゝ禪宗の見性成佛の工夫を疑ま參究稍子の處ゑ交り玉ひけり此禪宗といふい楞伽經楞嚴經金剛經等を大旨として其宗風他ま諸宗ゑ似もつかず大聖世尊一切經を說終り機緣の耆闍崛山の遊ゑ入滅の時人天四衆五十二類悲歎の涙雨と降ち伽葉尊者雞足山の洞より涅槃雙林のもとゑ來り玉ふ如來寶棺ま中ゑ在して蓮を拈て見せ玉へば人天大

會ろ此意を悟る者なし迦葉尊者ひとり微笑たまふこれ心を以て心に傳へ正法眼藏涅槃妙心を名付たり伽葉あの佛宗と得て此を如來禪と稱すれちは南天竺の達磨尚和尚且は來り其心印を傳へて教外別傳と名乘り此宗門は不立文字と立て一切佛祖に依らず一代聖經は月を指ゆびの如く月を見て後指何の用あある經論は藥を試ひし紙帋佛像は屎帋を拭さくる厠木なり釋尊の頃を踏て初て佛果を證すとは丶しり腕を切て明悟し猫を殺して悟道し鹿の動くよさとり瓦を投て得悟すあれを直指人心見性成佛といふ讀經修學を疎んし座禪工風を專とす凡俗の耳を驚ろし强味の膽を奪法外不測の宗旨あり此宗の日本に渡りしは仁安三年稔釋の榮西天竺山の臨禪師より心印を傳へ歸朝有て建仁寺を草創しこれより禪流海内に彌布道長師い此宗風をよりしべし禪機を凝し玉ひけるゞ又思立て江州滋賀郡三井寺に遷き玉ふこの寺い比叡山に先立こと一百餘年天智帝第五の皇子大友の皇子を寺とし圓城寺と名づけたり本尊彌勒菩薩にして五十六億七千萬歲龍華に成道を期する翰ふあく其三會の曉を契らん初ぞと入和尚に鑄に無常の響をつたへ涉賀に園に無ゐに風を觀するといと尊し當山に中興智證大師は讃州の人なり十四歲の時叡山に登り密眞和尚の法子となり後慈覺大師に興同し日に天臺を唱へ心に眞言密部を存しかを大德にして三代の帝王に御戒師となり世上の尊敬大ひたならずのく盛なりし蹟あれば學匠も亦多かりひとたび其境に入て不測の法理をも極めやと其學窮に入て智證大師傳來の聞記書錄を讀玉ふに皆これ慈覺の同論にして寺門山寺とに法華經の蹟を絕し天臺傳教のおもうけもとゝいず日本一宗正法に背き釋尊の本懷を滅却す哀れとの嗜のうつゝに迷ふなる一切衆生い何を賴みとして後世を助からんと兩眼に御泪をうかめ忙然たる折しもあれ禪をしわけ本院の所化見なれぬ僧を伴ひ門道長御坊に此はるの初め此山に御覽したる者なるが久しく鎌倉にありて今又ふたゝび歸り登りし發證といふ沙門なり此寺に同居させよと學頭の下知なるといとさし示せば道長師は唯々と聽へ式禮終て宜やうさても床しき友を得つるか

な我さいりとし五歲までも鎌倉に住て親しきうたといと多し關東の動靜をきあん管領さへ絕て六年をへしとゝよ夢路も遠き鎌倉の安否を聞んられしさよと宿れば善鬼坊い歎息吐戒れ前年齡いと弱しく師に誘れて鎌倉に下り大藏なる大慈寺に住思ふに增る府内の繁華うゝるめてたき地に樓あそ世に稱るかひの果報なれと落る月日の箭をいやめ幾世ふりし白雪に積る病ひに師の坊の消て跡なき我が湖金寺内に親しき友達いと懇ゝとゝいめもまたれ近年つゝく鎌倉に凶變に袖うちぬれひかへり來ぬと舌を卷ての物語遠長師は耳を傾てその鎌倉の凶變とはいかあある事と根葉分て問るゝ韓藤つくろいさればとよ鎌倉將軍賴經公とときあへしは二才の御時關東に下向なり九歲にして征夷大將軍に任ぜられ今年三十にも得あり給いずとうく世を憂事に思召給ふその根い北條一家權威に因あり將軍家いあれとも無ゞ如く其上諸國に非分の沙汰のみ聞へ彼是御憂といたた給ひ明しき間なき御病惱あとに去る寛元元年極月廿九日の事なりき白き虹唯一筋日輪をつらぬいて一天に跨りたれるい不測と御所のうしなしきに將軍家御庭に下立あれを仰見給ひしに俄に御目眩身毛たちければいそき其儘御寢に入りうせ給ふこれより雨風度々吹荒を時候順當あらず是に依て北堂の辰此三月將軍家御心願とおつて鎌倉中の神社佛閣殘りなく御願拜あり同四月廿一日御嫡子頼嗣公御元服なし〳〵京都へ奏聞のうへ征夷大將軍に任じ給ふ御齡わづか六才あり同七月五日先將軍頼經公は御齡廿六歲久遠壽院に入て御飾りをおろし入道なし御名を行知と稱し御來の御本懷なりと悲ひ玉ひしこと心無き下賤に者まで聞と勿躰なくあなしく限りと人皆いひ合世の中何とおく物哀れに頼すくおく覺ゆるに打つゝき去年三月の彗星あれまで日本にありとを聞ぬ怪しき形なりと思ふ處に今年寶治元稔未の三月十二日の夜戌時に大ひなる流星いでゝ丑寅の方より未申の方へ飛渡る其長五丈ばかり虛空をわたるうに光り晝の如く鳴轟く響大地に震動して雷電より凄しく人皆魂を消ぬ同十七日天氣うらゝかなる晴天に黃色なる蝶の數限りもなく飛繁り幅一丈餘長十丈ば

かり撲標亂れず恰かも黄色ある旗絹をひるがへすが如く飄々として虛空にひらめきあるひは高く雲間よりかゝるを又は近く軒端よ鏑けるよゝ鎌倉は町中こゝよかしあど見物せしゞはてには破落〳〵と飛散さしもよ廣き鎌倉中は人家よ飛入て死しぬ昔朱雀院の御字承平の初常陸下野の兩國よ黄色ある切蝶多く集りしゞ程あく相馬將門反逆して東國暫く亂れたる事ありきと昔語りをきゝ傳へ安き心もあらざりしよ同廿一日の事なりき由井ゞ濱の沖俄よ紅ひゝ變じてゐた色朱を流したるが如く大海皆血潮とあり紅ひの波岸を洗ひ磯よ生し磯草も砂よ交る種々は貝も礫も皆ゐた色よ染成て珍らしくも又恐ろしと市中の者見物をさへ爲ざりゐ御所よりゐ執權を始大小名までそれ〳〵由井が濱よ出馬ありてゐの不測を見屆玉ひけり此月十一日奥州津輕の浦々海の潮水血よ變じあやしき魚數多く死して流れよりぬ其長一丈餘手足い人間の如く鱗鰭よして頭と尾鰭は魚なりしよし彼の國司より注進すこれよより博士を召て御尋ありけるよ先例こゝろよからず昔文治五年は夏此魚あつて泰衡滅亡し又建保元稔四月あの魚鎌倉の海よ見へて和田義盛亂を興しその一門滅亡せり此魚の怪異い世の中の不祥あること論なし但し海水の血よ變じたるい和漢兩朝前代いまだ其事をきかずといへども大方天下の御大事あらんと言上せりときく彼といひ是といひ斯春の不吉の凶兆耳目を驚ゐし鎌倉の上下萬民をあ面色土のごとく驚おのゝき恐じあんと言ん方あくいへるぞと其を見る如く語りければ遠長師いゐまさゝび歎息ゐ日月二天いまだ地に墮ず水は流れ火へ燃る此世の滅そる塊刧にはよもあらじ其上天下の政道正しく民を撫下萬民は五常を守りて五倫乱れずうく正しかる此の中ゐ天地の怒り烈げしきい鎮護國家の佛法よ僻たる事の有とやそると思ひ惑りて口籠よ御言し玉へは善觀は明谷あい不審仰ゐなる京鎌倉いふもさらなり陸奥筑紫のさゝひまで明僧知識の開きたるその宗門は數多く佛法は繁昌い津々浦々のはゝまでも神に佛よ敬いぬ人とても なき此國よ何を罰して幸目を見玉ふべき事あいと詰詞よさいわらじ神も佛も妙法の法味あけれ

ば此國よ影もとゞめぬ空蟬のゝぬけの殼よ入替る惡鬼魔王のなす事より國も衰へ世も亂る嗚呼あさましと言ば得よいいで止よし御意を知るよしもあき尊澄がたがひに顔を見合せてともに憮然たるばるりなりける斯て寶治元年も半を過七夕津女は空ちかく殘る暑さはたへがたぎよ是知りがほよ咲のめりす桐は一葉よ思立南都の大寺高野をも遊覽せばやとおほしたし三非の學室よ別を告大津より京都よ出賜ふゐ鎌倉よ兵亂ありきとて下賤者の癖として路よ語り門よ傳へいと喋々しく聞ゆるよゞ遠長師い天王寺屋淨本ゞもとよ立より南都よ學問せんと思立しその志しを物かたり且また鎌倉の騒乱といいかある事よはべるやと緒賜ふよ淨本い眉根よ皺よせいざよと昨日往問の書簡をもたらして六波羅殿は記錄所の庇まで參りたるよ侍所の諸衆遠その始め終りまで聞し賜ひたる鎌倉の爲躰ろの混雜よ我が用は得遂ずして歸り來ぬ法師に用なき事なから耳の法樂なし賜へと矢背の姥が手作とて貧ひたる初穂の黍の搗餅折數に盛てすゝたつゝさてとよ鎌倉よ在て三浦若狭前司泰村ときこへしい鶴が岡八幡の東の山際よ邸を搆へしかも先執權北條泰時の縁なれば天下は政事をも談合し世よ輕からぬ家筋ふぞ在しけるゐゝよまた秋田城之助義景といふば勝丸郎盛長の孫よして代々長谷の甘繩よ住居し當時は執權北條時頼と無二は交りよてあれまた世よ威勢を振鏑ける此兩家いとゝも累代の諸侯よして右府頼朝卿あのゝた鎌倉は城郭天下の礎石あり けりしるよ此は兩家たかひよ權威を競ひ年頃快よからずありなるより事起り前司泰村とかく我意を行なひ我ゞまゝの所行多く將軍家の下知を蔑り非法の働き多かりければ北條時頼深く心を痛め泰村ゞ野心を窺め泰平の謀おとをあさんと樣々よ扱ひ賜ひければいよ〳〵心高振增長して無禮の事のゝ多く其兄弟一族みな其氣よ乘じて見へければ時頼を今はろの謀叛は下心を察し用心いとまなかりける此の事を聞傳へたる近國の諸士我と〳〵と人數を纒ひ鎌倉さして參着し御所をばじめ北條家の邸を守護し鄰仰山よ見へければ秋田城之助い折あろよけれと表に忠義は色をあらはし

角心記れ日頃の意趣を晴さんと欲ず下知を傳へ、大曾根左衛門尉長泰武藤左衛門尉頼福十郎公義等をはじめとして一族同意の輩三百餘騎若宮大路より神護寺の門外に屯して鬨を作り五石壁の紋畳たる旗をさし揚筋遊橋北より陣取たり諸國の御家人すゝや軍ゞ始りふるぞとて迫々此手より馳加はる三浦前司泰村い不意を討れて驚きつゝ家臣郎等より手配を傳へ嚴しく防ぎ戦ふ處執權北條時頼も今ははや軍破に及びたれば是非もなきと北條奥陸守貫時をもつて將軍家の御所を固た北條六郎時定をば討手れ大將とさだた五百餘騎をさしむけられば堵の辻より駈加いる軍勢雲霞のごとく既お鎌倉大亂よ及び老たる親を負泣叫ぶ兒を引携妻よ兄よと逃惑ふ家財を荷ひ雑具双運ぶの狼狽よ病人を踏殺し幼兒を倒よ抱懐き西へ東へ辻々に泣喚るあゝ物凄く修羅闘諍の悪道を目前あゝよ感じけるさてしも敵味方の哭のあゝい天地よひゝき軍馬の物音地よ震動し鎌防兵衛入道信濃四郎左衛門軍勢をはかまし北の手を攻破る處左原十郎左衛門泰連同十郎頼連能登左衛門尉これを拒んで血戦ししばしろの髪見へざりけるゞ伊豆國の住人輕久八と名乗て泰村ゞ南の小屋ゝ攻登り向ふ敵三騎まで伐て落し小屋よ火を懸たりしうば折ふし風烈しく火燄四方よ散乱せり三浦の一族はや防ぐべき手立もなくとても逃れぬ運命あれば徒らよ焼死んより法華堂よ引退き故右大將頼朝卿の御影れ前よて自害し前代の御恩よ報じ奉りらんと各々北の塀をうち破り法華堂さして引を行泰村が舎弟能登守光村い永福寺の惣門の内よて郎等八十騎を隨へて眼に餘る大軍を引受挑を戦てありけるゞ兄泰村ゞ引退くを見て彼生を一所にせばやと一方の敵をうち破り法華堂をさして落行を敵萬の敵軍きびしく後を遮て退討にゞ三浦泰村が兄弟毛利入道西阿大隅前司重隆義村前司時綱等返し合てい引討拂ては退きつ漸く法華堂よ引入ける赤線て込入る敵軍をば白川七郎兄弟岡本次郎頼生小太郎佐野三郎に防せを頼朝卿の尊像の前よ居並んで高聲よ念佛し三浦若狭前司泰村を始とし一族二百七十六人家臣二百餘人同時よ腹を掻切て同枕よ死じてければ申の刻よい全く戦い集

ぬけり嗚呼此日いかなる日ぞや實治元年六月五日累代武威を關東にあいやるしたる三浦の一族滅亡の事ふ結びし夢の跡とあゝ皆滅亡よ及びける又泰村妹聟上總權之助秀胤ば下總國一の宮大柳の要害よ楯籠り近邊を押領し合戦の要意取々ありと注進を依て大須賀左衛門尉胤氏大將どして二千餘騎鎌倉を進發ずこの注進櫛の齒を挽ゞ如く京都六波羅へ聞へ海山隔つ九重の空さへ驚る心地なれば關東よそむ民百姓の心のうち思やられていべるはと思つきあへず物語るを遮長師い心れ底に抑あらん佛法亂れば王法乱よ左もあるべき道理ぞと明ていはれぬ本地の内觀さてを恐ろしき浄世よは成果ゞる物かあと深き心を岩が根に下流水のいと浸くいらへおし玉ひつゝ北夜い浄本夫妻かわりなくとゝむるもゑ一夜をありしそれより南都よ趣き給ひゝり青丹吉奈良の郷といふは帝王六代の都よして昔い匂ふ八重櫻けふ九重よ移しはしたれ古き寺々の多く殘りて佛法盛の地なればや世よ奈良學といひ傳へ古都經論を高くつみて佛學の達者いと多し遮長師は敵山よて知已の僧あゝふあるを紹介をして元興寺よ入玉ひ彼の高麗國の惠灌和尚の傳來せし唯心無境と立たる三論宗を學び又傍らよ我が朝天平七年玄昉法師の弘た初めし倶舎宗の論三十卷を讀て其宗意を究め給ふあゝあ又興福寺の僧釋の道昭律師唐よおゐて玄浄三藏より傳へたる法相宗といふわり此等れ諸宗をろれこれと習ひ併合近きころい東大寺ようりり住いく月日を送り給へども奈良の古跡を見物せんいとまもおらず在しけるゞ此程うちつゝく彌生の空のうちゝあるよ學宝を立山玉ひ振さけ見ればほれかすむ春日れ山を眞中にて南は高間北い若狭あの三の山を羽買の山ゞ歌よよみまた三笠山のと世よ傳ふ萬葉集よ

はし鷹れ羽買の山を今朝ゆけば飛火野の原よ雉子なくありと見へたるとおもしろ生いま盛日ありて若菜摘あんとある野守の池雪消の澤よ萌いでゝぬよゆよ見ゆる若草を已ゞ臥處と小雄鹿のあきふ遊ぶれどなさと心いさきて千早振神垣れ森御手洗水清流るゝ水源の春日の社よ詣給ふ當社

は大宮四社一の御殿と聞へしは武甕槌命にして、神護景雲の二年より春日野に影向ありて天が下の
百民を護ますことといと尊く思はれ猶ろこゝと尋ねま博しくおぼせども學べき諸宗の經論最多く
て心のまゝに遊ぶよしあく猿澤の池の玉藻のたまさかに昔を恐び玉ふれみ今ちの東・寺に在し
て華嚴宗を修學あし給ふよこれい孝謙天皇勝寶六年良辨大僧正　勅　を受て入唐し廬山の恵遠法
師より習傳へ華嚴經よを三界唯一心と立十玄六相の法門を備へたりまさ成實宗ときあへたるれ体
空無生の法理とて獅子鎧三藏が造りたる成實論を根とする宗門なりかれあれ學びの道に今年　戌
申の秋も深くなりけるころ遊長師は泉州左界の浦より待り人ありて東大寺をうちたち郡山小泉より
龍田よあゝり山路へさゆる霜風に散て流るゝ紅葉へいざといはぬど洞川の水よあゝろを磨れて見
送る瀬々の唐錦九曲坂ある石高路を數珠爪採てたからがよ稀量品を唱へ河ゝ徒行玉ふ處よ僕よ些
の包を持しめ椎名袖の胴服よ黒皮の行縢し山刀を佩たる人此方を見つゝ驚をかけ殊勝の御經いと
有がたく聞へべりぬ御身いづれの御山家よを何處よおもむき玉ふやと問はれて後を見あへりつ
我は遊長とて天盛の僧なれど今の天盛へ天盛ならずまして諸宗は多けれど凡僧野師の了簡のを多
く佛れ教よ似もつかず出家となりし身れ任よへ其を能く學び正さんと南都よ高野よ學問なす者よ
待ると答へ玉へば其容貌といひ道心といひ世に稀なる御山家かな我は和泉の國府ふ接ふ江川太郎
左衛門吉久といへる者なり明日は先祖の忌日なり枉て一夜の供養をうけ我が方よ宿り玉へと思よ
わりければ袖振合す多生の緣默止がたしとぞ宿まとよ吉久に伴れ上土門よ植ろへし松の緑も不
老不死揚り匡よ法衣の塵をうち振ひ威儀揚々と入給へば吉久も家の族よ意を得させ一間を淨くは
らはせつ敷てすゝむる花莚色も香もわる經卷はやゞて一乘れ實を結ぶ大因緣とぞ知られるる遊長
師へ供養追善の經終り種々の話ふ取交を自他ともよ泡沫夢幻の身を忘れ後世の營み疎略也と云あ
とよりして御經よ見へたる月の風日の風といふ歌をさへ語りいて給ふ茲よ一人居りて敷き野原よ

出て虎よ追れを逃惑ひ數十丈の斷岸より落入たり斯は偽へじと一株の草に取付き縋く其身は取とも
たれど下を見れば物凄き淵よ長十丈ばかりの鰐鮫落あば呑んと待つけたり上を窺ぐれば彼れ虎
はもし登らば咬んと睨まへたる有様なればいろゞせんと魂も身よろへず恐ろしく有るよいづ
くよりか二頭の鼠いでこかいるしくよ彼の命を取綱りたる草の根を喰切にぞ其人の心のうちいる
よ悲しりるらんと思ひやらせ玉へ我等衆生れ身の上全くるくのごとくよて人の上にいわらぬかし
前の世ふ造りし悪業へ虎と成て追來りあれよ了れて六道れ廣き原中にさまよひ唯今三悪道の深き
岸より落入らん處をいうある過去よ善根やありけん一株れ草の手よ觸りしをそれを命と取つきて漸
く人間と生れたり前の世を顧れは悪業の虎は噬喰反して白眼へ居り後の世を見渡せば無量地獄
の鰐鮫鯨を怒らして待悪たるを哀れおるるあ我々がいのちとすゞる草の根を月の風日の風といふ
ふさつの鼠へいる〳〵に出來り昨日よ正月今へ二月けふへ朔日あすへ二日と頓て限りある呼の息
を咬つくされあば後の世いあよ成ゆくらんされば佛法を知ずして此あたし世よむなしく月日を送
る人を智者といはんゝ賢人と譽んかよく〳〵思ひはゝり玉へと語り給ふよぞ主吉久をはじめ一家
の男女これをきゝ一座したりて其よ菩提の心を發しけるこれより年歴十五年弘長　壬　戌の夏伊豆
の伊東よ流罪の頃江川吉久は同豆州非山といふ地よ移り住て在ければ不圖あゝふ再會し本化の化
導よ預りて法弟となるべき因緣を茲よ結び給ひしも宿世奇特の相遇とぞ思へれけるそれより遊長
師は堺の津よいたり古郷の人よ値て御兩親の旅使をもきゝ道善御坊まで慈むくいまそ山をきゝ喜
びの眉を開き給ひ其力へ賜るべき齎あど認を彼此古郷の物語よ思いず日數を重ぬ給ひけるか慕あ
んとする年華に驚きふたゝび奈良へ立歸り東大寺より紹介を求め招提寺の柳檀林よ入給ひける當
寺は天下勝寶六年聖武帝　唐　の鑑眞和尚を我ゞ朝よ請待し御歸依後るらず紫宸殿の　測　よ大戒壇
を建て帝をはじめ大臣公卿下民よ至るまで受戒れ　輩　四萬餘人この招提寺は戒行律宗の本寺なり

統て三論倶舎法相成實華嚴律あれを南都の六宗といふ道長師い此諸宗の論釋を學ひられより顯師寺の經藏ょ入て一切經をひらき彼の宗々の流義を知一御經ょ照し合せてしはし心を潛た給ふこれ道長元年の頃ょしき年齢廿八才の時ありける茲ょ又同國平群郡法隆寺と云い班鳩の宮の蹟ょしてゆ聖德太子勝髮經御講說の遺跡なれば道長師も頻ょ其跡ゆしたはしく此寺に人て三論成實を講論しほどなく高野山ょ登らんと紀の路をさして旅立玉ひけり高野山ときあへしは紀州伊都郡に屈そる靈山ふして昔弘法大師唐土より日本ょ歸り玉ふ時ゆの唐の淡ょて船ょ乘り三古を手ょ捧て日本の方ょ向ひ此三古大日如來有縁ゆ地にとゝまれと空中ょ投給ひければ其三古刻なけれども高く擧ょ入日本の方へ飛去りなり船中の者あれを見て驚歎せざるはなし大同元年丙戌十月廿二日師朝し嵯峨天皇の御戒師となり給ひければ彼の唐ょて投たる三古いづくょ落止りしやと日本一州ょ勅命有てろの在處を尋ねしむるょ紀州伊都郡高野山ょありけるを奏聞す天子御感悅在まして弘仁七年弘法大師を以つて彼の山を開かしゆ金堂を建て丈六ゆ阿夙佛八尺五寸の四菩薩をたつ今の高野山金剛峰寺是なり道長師い紀の路より花坂ょ分ゝり矢立といへる處まて登り玉ふしばし休息つゝと、ゝより伸ひ此山ゆ僧一人加田より歸るょ道立嶮しき坂を登り玉ふょ路ゆ右りょ振石とて手をもて振たる如き岩角あり又押揭岩とて大磐石を押ゆけ下面ょ左りの手の跡凹ゆょ見ゆる彼是いろなる故ありやと尋玉ふょ路邊の僧うら咳嗽さてとよむあも弘法大師此山を開給ひしょ大師の慈母うれしく思し登山なし給ふを弘法大師おしとゝめまゐらせ女人結界ゆ山あれば協まじきよし喩給へば母公の宣やう我ゆ子の開きたる山に其母の登られぬ道理やあると強て登山し給ひければ一山俄ょ鳴動して火を降せられば母公の御身たちまちゆ燒焦れんとす大師愕てかたへの巖を押揭その陰ょ母公を隱し給へり母公御感の坂を咬ゐたりの岩をしたゝあょ振給へはその御手ゆ跡岩角ょつきぬ今の振石押揭石これあり感悲やるかさなて猶登り玉ふょ鏡石とて石面光々として鏡物の形をうつす石あり母公我ゆ姿ゆ此石に移るを見たまふに盡うち乱れ眼血ばしり恐鬼の形ょ似たり我ゆ身なゆらもおろろ走き事ょ思し召兎角女人の身ハ生身ゆ佛ょ値奉らずハ得脫かあひ難しと明ゆあれより天野ょ下り巖窟ょ籠り慈尊出世の曉を待て入定なし給ひし天野慈尊院彌勒堂あれありと嘯ぎ〳〵いと誇りがれ物語るを道長師は唯感々といらへ居ゝ心ゆ内ょ思ひやう淺猿弘法大師唐ょ渡り天竺ょ越嶮難修行の功積て御身ひとりハ佛果を得たれ母を救ひまゐらすと協はず現在この山ょ地獄の炎を降せ牙を咬石を振て怨恨末世ょ傳へ恥を後世ょ晒させ奉りし大罪無量億劫無間の底よその身を焦すとも此罪猶消難かるべし佛敎ょは父母の恩第一と定め儒典ょは五刑三千罪不孝より大なるハなしと見へたりたとひ其身天子の御戒師とあり下萬民ょ生如來と仰ゲるゝとも盡本意なき事ょ非らずやもし此事實あらば眞言ゆ宗門ハい三界の女人たすかるべき道あく一切衆生父母ょ孝行ゆ道絶ぬべしと心ょ祕て山吹のいハぬ色あぬ花坂より實をと結ばぬ無益語のむあし詞りょ路いかゆき五十八町總門もやゝ程近くなりょけるこれより密嚴の淨域ょ入頃をめぐらして其山嶽をうち詠め玉ふょ花坂不動坂いづれと五十有余町の嶮路を陟り上峰又廣き平地ょして四樹八山屹立として内に大日覺王の淨土を開き東西ハ龍の臥が如くょして流をろとき南北ハ虎ゆ蹲まるに似て坊舍ろの間ょ立連ねたり玉川の水源よりハ五邊三毒の水を流し御廟の橋ハ五障遮惡の淵瀨を渡さず扁柏黑松いや茂り夏尚寒き伽藍の淨淸又曉の枕ょは佛法僧の聲すみて無明の夢をやどろかす此島はろの形容鴿鳩ょ似てその色碧綠あり北啼聲佛法僧と曉が如し歌ょ

我が國は御法の道の弘ければ鳥も唱ふる佛法僧ゆな、後鳥羽院の御製と思ひ出られ侍ょ佛門の桂石鎭護國家の山とぞ思ハれける常山の起源なる眞言宗といふハ同じ佛法ゆうちよも釋尊の教法と大いょはかはり毘盧舍那法身大日如來盧空の阿加尼陀天法界宮ょいましを金剛薩埵の伝ホ口に眞言手ょ印契を結び意ょ觀門を開くべき此三密の秘法を傳へこれを大日經を名つけ給ひ又密敎と

定む釋迦如來い同じ佛あれとも應身下劣凡夫凡跡よしてろ此說きたる御經も又いやしくあれを顯教と名づく其相違をいはゞ釋尊い明無此凡夫よして大日如來の眼採よも及ばず又大日經は圓滿具足の密法として法華經の如きいその牛飼よもたらずといへり此宗旨は中天竺の善無畏三藏と云者將來きて唐土よ渡り玄宗皇帝の御師となりて眞言大日經を弘通す金剛智三藏不空三藏つゞひて天竺より來て其宗門をさつる此時よ當て漢土四百餘州眞言大いよ流布せり本朝あは空海和尚實龜五年を以て讃岐國多度郡よ生れ延曆廿三年五月十二日三十二歳よして勅命を蒙り唐よ渡り青龍寺の惠果和尚より眞言密法を傳來して日本よ歸り彼の傳敎の弘たる法華經は位を考ふれば顯密合ろの中よ大日經第一華嚴經第二法華經は第三よして大日寶經よ比れば法華の類に戲論とて幼稚もの と盛言よ似たりと嘆り高野山を開て眞言の一宗を弘む一天君の尊敬淺からず萬民雖あ仰ざらん弘仁九年の春天下の疫癘を擯除かんと祈り玉ひしかば夜中よ日輪出たり又朝廷よて即身成佛と云事を疑ひしあゞ手よ智拳の印を結んで南方よ向て現身あ佛となり光明を放ちければ天子は王の冠を傾け大臣百官地上ふれふし給びけりかくて承和二年三月廿一日金剛峯寺よして手よ毘盧の印契を結びて入定なま玉ひ々りそれより後八十七年を經て延喜廿一年十月弘法大師と諡名を受給ふあへる釋き五智の瓶水三密の法印ゆろ〳〵しく他家よ授くべきよあらざるを遵長師のありあく眞奥藏を研究せんと庵ふり埋む雪の中よ一歳を送り明れば遵長二年の春もむへ雪間の草の初もとり都の花より珍らしく心も春といさみ〳〵高野を下山なし給ひあれより道を河内よ求め當國石川郡太子村なる磯長の敬福寺よ聖德太子の御廟を拜玉ふ中央は太子の御母間人皇后を飲め東よ聖德皇太子西よい太子の御妃膳臣は大姫を安じこれを三骨一廟と稱し今よ御廟の丘よ恩木雜卿を生せず雨風よ騷ず崩れず樹木諸鳥類鬼を休ず此を御墓山三ッの奇異といひ傳ふ太子御入滅此后推古天皇より後宇多帝よいたる迄四十代の帝王代々あゝよ車輦をそゝめられ御廟參絶たりけるかゝる勢き跡あれは遵長師も茲ふ參詣し御廟の前よ座具を展敷敬禮拜し法運興隆は恩德を謝し賜ふよ日と夕落て山の端よ三日月かすむ黃昏時ゆくてをいそゞ事ういと此廟堂の入よ中て迫夜ありけるよ其曉天がた廟窟の燈明ほのかよ聖德太子衣冠正しく御服のうへよ錦闌九條の御袈裟をかゞ賜ひあり〳〵と其處よ立賜ふよゞ遵長師い讀さし賜ひし經卷を徐ろよ卷あさめうや〳〵しく御手を支當今未法の群類のため此法華經を弘たんとの宿願を遇々よ遂賜へば皇太子は點頭つゝ莞爾として滿面に歡びのいろをあらはしたまふよど思へば夜い明れ〳〵と明渡り妙香のかをり四邊よ馥郁と薰じつゝ皇太子は御影は見へずなり賜ひける遵長師いその御後をふしおかを感涙座具よしたゝりを御頭を擡げずたゝまへおしき唐衣日もさしのぼる御墓山猶御名殘のしたいしを拜體誦經よ時をうつしろは御廟堂を退出なし賜ひこれより山城國綴喜郡男嶋山が峰よ跡を垂賜ひし石清水八幡宮よ參詣し宇治より京都よ出て天王寺屋淨本々もとよ歸り南都よ高野の物語りのとる修行の難難を淨本夫妻へあつ感じかついたいりしばらく茲よ御身の勞を休め賜へといと懇みもてあすよて我が故卿の心地しておもいず日數をうさぬ賜ひけり

人を醉そるものい銘酒なり雖を醉するそのい呉蚣あり雖百足を啖へば醉て曉天を告ず鶏聲の花を嚙たる蜂は醉て人を刺ず湖荷を咬た猫い鼠を捉ず鳩よ桑葚蛇よ蒺藜いづれとこれを食へゞ醉といふ其道よ進ひ良能を失ふば異類とまた人間よあいることなし今日本國〆切衆生方便權敎の酒よ醉て法華眞實の正氣を失ふ其生死長夜に醉をさますべき力術をりあと遵長師は南都の六宗高野に眞言廣く諸宗に奧藏を覗ひ京都よ歸てしばし雄氣を養ひ在しける折天王寺屋木淨が年來したしかりし儒者あり博學の名高く月卿雲客を友とし仙洞の御所へさへ時々い昇りて經史百家に說を聞へ上るよしをきゝたまふ遵長師い一日ろのかたを訪たまふ東寺の僧とり北面雜所の住居に交り御近けれどもり近寄しからずいと物靜けき玄關に物言さんとおとづれつ五候油の小路なる淨

四十四

本ゞ緣ゝ者のよし言述て案内を請ひたまひ面會しつ且樵き味を樂ゝ先生ゝ比企氏よりゝ聞きゝ中と有けれゝ彼儒者不審ゝれやらず斯のたまへども兒の滝ほど見もいりもせぬ貴僧をばいかで知べき誠よしゝらずと答れば師は微笑て儒者のうへよりは半面の識とて袂の鏡よりゝいきみて其顏を半面見しさへ識人といふなるものをいあよして幼稚心のいいけあき吾さへ見覺へゝるものを君は齢より齢たかくて物々しく吾ゞ家を訪賜ひし房州小湊の配流人貴名ゞ品の善日にゝべるかしといゝれて先生ひたと呆れ幼稚ゝしさへ見覺たるを年經高くて忘れしい我あゞらゝをゝましうりきといひ歸て一別以來の應答にむかしを思ひ出しけり此儒者といふゝ鎌倉二代の將軍頼家公の其頃ゝゝ北企判官能員と世ゝ時ときし權貴ゝ家たるを北條時政が政子の方と心を合せ腹黑くも能員をゝ企ゝ判官能員とて世ゝ時ときし權貴ゝ家たるを北條時政が政子の方と心を合せ腹黑くも能員をゝれゝ即ゝ狩き迫ゝ名越の亭ゝてたまし討そのまゝ手勢を引具して北企が邸ゝ押寄ッゝ不意を仰たる殘忍蛇毒比企の一族のこりなく邪見の刃ゝ身を裂ゝ一門とゝゝ斷絶を北時判官能員がいとゝ季の男子ありけりそれさへ殺し捨べきをその頃比企ゝ親族に伯耆坊とて戒行堅固の沙門ゝり鎌倉の北山の内なる留菩提寺ゝ住しけるゞ此事をきゝつ身を捨ゝろの稚兒ゝ法衣の袖ゝ請うけそろゝ比玉の緒ゝ取とゝゝ其儘ゝ成がたしと房州ゝ流されしゝ此兒の二歳ゝ時なりけりあれより配所ゝ人と成其名の家を稚近ければ訪おとづれ罪なき配所の鰥雛をかたり互ひゝ心をあゞさゝ玉ひけるゝ其後ゝ比企氏と伯耆坊ゝともなれ京都に登り表ゝは東寺に入て出家となしぬと聞へ僧侶はオ學いと頼母しく經學文章抽あゝらねば過し流罪のつゝ者も代る月日の久しくて年々繁き諸國の成敗今ゝ毛を吹疵を求むる人をあらじと儒をもて家を興し大學三郎能本と名乘都ゝ人ゝ仰がれて何不足なき身なりけり遠長師はむゝしの好といひたま儒道ゝも窺みゝりければ折ころふけれと大學三郎ゝ厚く交り孟軻以來周公孔子の道とそる仁義五常の教のとゝすゝ時書論孟ゝ儒書を研究能本ゝ學びたまひしゞ一時能本歡息し師の才智ゝて儒者となり玉ば世上ゝ功商ゞ人倫ゝ益あらん惜設法

外無等比佛道ゝ身を隔し給ひしことよと歎あれければ遠長師ゝ禮を正し先生ろの儒を知て未其佛を知玉はず唐土宋の世ゝ觀文殿の大學士張商英といふ人ばその初め强逸博學のきこへありゝ大觀四年六月召に應じて參殿し始て徽宗皇帝ゝ御目見ありしゝ此頃久しく旱魃ゝありけるが此夜俄ゝ大雨降出天下を潤しければ徽宗帝御悅斜ならずあれ張商英が德の雨ありとゝ感嘆を染て商英の二字を大字ゝ書して賜ひきこれより位階丞相ゝ登り天下ゝ政事にあゝつらひ其頃無變ゝ儒者ゝしか或時大寺ゝを釋尊ゝ一代藏經たゞくつんで龐々しく莊嚴し燈明を點じ香を焚いと尊く師りおゝ張商英あれを見て慢りを含ゝ天竺邊土の夷狄等が書し無益ゝ書籍をかくまてゝ尊敬そるとゝいはれあし從來佛といふゝ虛無空淵の教ゝして其體非ずその體あき道を求んとて迷ふ人これ多し我れあれより取かゝり愚味ゝ邪說を蹴倒さんずと家ゝ歸り入しく飽りて無佛論といふ書をあゞ其妻向氏あるとき夫壻ゝ問君ゝ日夜何事を爲玉ふや張商英答てわれ無佛論を書て彼佛法を破らんとゝ其妻笑て無佛といいんに何の論かあらん先有佛論を書て佛道を爲と見あきらめ後ゝところ無佛論をよゞるべしとおりしかゞ帳商英默然として間なくあれより心ゝかけて一切の經論を讀漸く儒道佛道一致なる事を辨へ大いゝ佛教を扶たりときく狂ゝろをゝ些あれをいゝん斯天地の始終りを佛ゝ成住壞空の四劫とて無量萬々年限り知れぬ劫を說書の邵康節は一元十二萬年ゝて此大層ゝ滅すといふ佛は三世を教へ儒道ゝは一世を示そ其說をあろゝ大小あるゝ其道ゝ大小あるゆへあり蟲は蜉蝣といへる出いろの朝生れてその朝直に死す世ゝ明暮ある事を知らず又蟬は夏生じて夏終る世界ゝ非秋あるを知るゝ由あし周公孔子の忠孝仁義を教へて儒道といふを釋迦牟尼世尊ゝ地獄畜生人間等の十界を立て佛道を教るゝ唯夫一尺と一丈との長短の差別ゝて其教法をとより一あり天地の間ゝ二の道なく聖人ゝ二の教はあゝるべし我ゞ佛門に不殺生戒とて物の命を取ざるは儒道ゝ示す仁あるべし不淫堅戒とて邪なちぬ婦女を犯さぬ

い禮なり不忘戒とて人を欺き偽らざるい信と云べし不飲酒戒とて酒飲ことをいましめたるは本心を失なはざれと欲ふる智よわらずや君が仁義禮智信の五常も我ゞ殺盜淫忘酒の五戒と別なるとれと思ひ玉ふや此五常五戒を持て身を慎むは戒あり志しを善道よさだむるい定なり此二法を辨へたるい智恵なりあの戒定慧の三學い身を修め家を齊ふ直道の根本ありされば五戒三學を修行せる人家わ一人なれば其家十人よく治り百人あれを行へば千人和順あらん此教千萬人よ及さば百萬の人おのづから睦し爭ひ家よ息刑罰國よもくあければ國を治め天下を平かよするの道外よ求べからず法華經第六の卷よは世を治る語言一切みな我ゞ正法なりと佛い說たまへり先生の本業と立給へる備道いもと我ゞ佛法十界のうち唯人間一界の教よしてそれも佛の道ありとしらせ給いて在そよやと齒よ衣きせぬ物語よ大學三郎能本に袴の側よ手をさしいれ默然として始終をきゝてありけるがこれより志を佛乘よ運び備を敬へ佛を學び魚と水との交りを後年鎌倉よ再會し大士の化導を扶つゝ其身も刺髮して法弟とあり家さへ制じを寺となし北金ゞ谷妙本寺本巧院日學と號れしい世よも不測の前緣なりけるうくて遊長師はこれ北金氏の親しのりゝる冷泉家よたよりて我ゞ日の本の教ある歌島の道をきうばやとその綜を能本よ紹給ひければ其は易き事なりとを能本よ紹内せられて冷泉家を尋さまふ今の冷泉爲家卿といふは定家卿の御子よして代々歌道の宿家なりろのうへ安門實治二年勅命よを撰後撰集といへる歌書二十卷を撰ひて敕感よあづかり給ふ〇よりいよ〳〵其家ゝへやきて學びの門人い八百日也く漢其砂の數多し遊長師は播磨の杉原十郎〇字賀の昆布を取ろへつ學ばりの路の道 僕 夫よもたらしつゝ式禮正しくおとあひ給ひければ爲家卿い柳さびの立烏帽子よ縹色の水干を着し立出し面識しその志の淺からぬを祝し喜びつさて宜ふより我ゞ歌島の道といふい天地の成の隨意直ある人の心を種としを萬の言の葉をいひいでゝ尾上の松の蔭よ咽ひ谷の柏の風に囁くも直ろの綱へよ偽なる神代のけたへ賢きも初學初心の輩よ唯その道を語

るとを甘辛と嗜ひの噌をるのを其身よ益あし直なる道の味ひはをづあら書て知よい如し皇國の我が國の古き書類を讀ころよゝれとまづ古事紀神代の卷を取いて、授けるそれより遊長師い日よ〳〵あの許よ立入て古書どもを問明らた和歌よは奈良の都まで古書たゝしき萬葉集神代久しく傳へをしろのをよをはを初たとして秘事多き數々まで心當よ學びたまへけるよ爲家卿とろの俊才の器量を感おぼせしが又和歌を認たる筆を見そなはし此僧の才學といひ又その手蹟の妙なることと道風空海佐理行成卿これを本朝の名筆とつたへよび吾が家よも其筆跡は識し持りしろよ此僧の書法の絶妙なるあと彼此四人よ競るとをさ〳〵歩はあらぬかしと舌を卷て嘆きつあれより爲家卿い深く師を尊敬し文庫に秘たる歌書のいろ〳〵取出て其表題を師にうゝせ深く秘藏なし給ひ今よ其御家よ傳へけるとあんあの頃遊長師はしばらく暇を見合東寺よ遊び給ふ此寺は山城國紀伊郡よ屬し秘密傳法彌勒山敏王護國寺と號けて嵯峨天皇の建立なりといへり此寺の法華堂よ眞廣法師といふ僧ありて一度師よ相見てしきりよ其智德を敬ひ厚く交り尊敬大かたあらず有けるゞ此眞廣の紹介にを東寺仁和寺の學室よ入り眞言よ小野廣澤の二流ありるを大概これを學び玉ひけるとかや

眞廣法師い此よ因緣を結び後弘安四年辛巳の春迹を杖よ扶けられ遠く身延山に登りて本門の大戒をうけそれより法華經一千六百二十部を讀誦せり大士滅後は日朗上人よ法を聞常よ經を讀て本化の宗を修行す其の東寺の法華堂今よ我ゞ宗門の一寺と成て成就山法華寺とて靈跡を殘せり

一日遊長師東寺の法華堂においして眞廣法師の懇望よまりせ法華の開經無量義經を讀誦なし給ふよ眞廣い柳檜を焚らせ頭を低て其梵音をきゝそましたる折柳の小路ある淨本の尊來てその微妙の讀經よ會釋も遺れ竹樣よ躍り揚り共よ問法の緣を結びけるゞ御經終てさていふやう今日い用筋ゐ

りてこれより直ち天王寺に往かべる御師此度をもかねて其僧衆へ願置たれば定めて古き書類も取いたまて陰りらん障なくいあそびがてらに往たまへ御伴しまいらせんとあるに師も悦び五ひ御身の用の妨もらずば伴ひてよとうち連て淀川づたへ難波なる天王寺に詣き出ひけりあれは浄の國東生郡よりる古梵刹にして用明天皇二年聖德太子をづから澁河の館にうち向へせ五ふ時白膠木をもつて持國毘沙門廣目增長の四大天王を刻み祈敵退散の冥助を願り物部守屋を誅戮しを此寺を遣立し四天王寺と號を日本國佛法最初の靈場にして西の門に大鳥居をたて高二丈五尺額は小野道風の筆にして釋迦如來轉法輪處當極樂土東門中心の十六字を四行に書し道長卿は此を仰ぎ見ればの寺に入り敏達天皇六年百濟國より初て渡りし經論又聖德太子手づから書たまひし法華勝鬘維摩の三經の註釋をしめ前多此書籍を拜見し終り京都へかへりたまふ路のもくまて佐女牛の八幡宮に參詣し京都より北敕山に歸り横川淨光院にひろまて 尊 天盛の摩阿止觀を讀智者大師の己心中の法門を了解し天盛は龍王菩薩此後身傳教の天盛の再來なる此法門の次第今古獨歩の妙說あるを悟り玉ふ然るに此敕山は宗風亂れて諸流に別れ摂那流慈心流安祥流安然流あど互ひに其流を爭へども經中の毛の長短兎の角の有無もみていうに足ざる論なれば更に取肯たまはず唯傳教大師此正義を求たまふのこゝあれまて數年諸宗にわたり一切經の披見さへ既に三度に及び釋尊の正脈を御手に握り末法の要法御心に居たまひ恰も須彌山の金輪際より湧出たるが如く百萬の外道もうがらべらず無量の魔軍も犯し難し仰も一代聖經に法華經のあるは天に日あり國に王あり家に柱あり人に魂あるが如し如來出世の本懷は唯法華一經にとどまれり又此法華經に二の義あり一には迹門二には本門あり其迹門法華とは佛樂王樂上觀音等迹化の菩薩を召て正像二千年の弘通を許し又本門は法華を以上行等本化の大菩薩に囑り末法五濁の今を救はせたまふ經文明白あり彼の迹化は藥王樂上等の既に天盛傳教等の生れて法華迹門を弘めて和漢の兩朝に弘通せり今末法の

入ぬれば其天台傳教の迹門の經法もら猶去年の暦に似たり御經には後五百歳中に本門の法華經廣宣流布すべしと說給ひ天台大師とあぬてこれを知しめて後の五百歳遠々妙法に潤さんと宣ひ傳教大師も亦華法眞實の教は忘ず後五百歳に流布すべしと正しく御筆を染て書殘し給ひもされば今わろの末法第五の五百歳彼の神力品の附屬を受給ひし上行菩薩出現し給ふべき時節到來せり我身不肖なれども時を計り機を考へ御經文に任せ上行菩薩に先達て此大法を弘むべしと心決して盤石の如し昨日に今日にうち打ゝき朝疾起て沐浴し閑結あはせ御經十遍讀誦ましまそれうちにひとも妙なる異相の御神杉の折戸の際に坐し御經聞なし給ふに日に〳〵其影向此神像にうるにそれを不審く思召いま二十二品屬累品をよをさしつ御手を合せ南無と唱へて拜をなし毎日にいまを其方々はそも誰やの人に在ずとを尋給へば彼の異人恭しく禮をなし我等は法華守護の三十番神なりこの日本を本土として跡を垂たる神々の北むもし靈鷲山の佛勅をうしまみ當具來行と聞して菩薩は末法に御經守護の爲にあそこゝに影現はべりつゝ聖人を守りまゐらするなりと右の御手を揚給へば不測やその指尖より縷々として五色の雲を起し霞にわらす露に似すそが中に熱田明神廣田の神々を始として吉備明神にいたるまで整々堂々として天津空なる星の如く居並て異口同音に聖人行世間能滅衆生闇と讃歎なしたまひける師い寥然として聞み給ふのを 四 ある料紙硯をかいとり打三十番神の御名を記しどゝ此猶法樂の心しを殘りの御經題語あし惡の八にいたるあろ題を作りゝ神々を退き給へば萬字にめぐる多摩羅樹の香の煙に薫るにみ一宮いさらに寂寥たりこゝに此いて其影現此神像を拜見のまゝ靈工を加うて給うゝしたまひられどば輕忽まく世に傳達あかりけり此大士自筆此三十番神の神號は今駿州沼津妙淵寺に傳來し又神像の番神は甲州休息立正寺此實藏に現在せり嚴や權衡をもつて物の輕重を定む人これを請ふべきや墨繩をうつて其曲直をたゝす世にあれを挑者ならんや 唐に天盛我が朝に傳教此兩大師ひとたび出世ありしより經論の輕

圓宗守護
の三十番
神叡山ゑ
影向

盛衰宗の曲直たちまちよあらはれ古住今來誰ゞ異議を述る者はらんされば遠長師い十年余り此
巻軸をあれ敬山よ送り給ひ今年建長四年寅の冬傳教天師の御廟に執恩の香花をさゝけ山王權現お
正法守護の神德を謝し奉り數年三塔よ骨肉の交りをあしたる學友よ殘りあく暇を告給ふよ華海師
い暇乞名殘を惜ミ素絹よ縫べき料なりとて加賀絹一匹よ別離の涙をそゝぎ馬のはなむけよ成給
ひけるこれより遠長師い京都よ出て年頃日來淺からざりし淨本ゞもとお音信師國の事を告たまひ
しよ夫婦い驚き余日もあらぬ冬空の雪催なすきのふけふ御出家の御身よいづれも假の宿なるを
何いろぎ給ふ事のいと其誠實よどゝ知られ損分かたき底の神今年いこゝに新玉の春をむかへて御
寒くさゆる日影ようち立たまふ淨本夫婦いとい名かね美濃上品の袷衣綿の朝ずよ足袋手市城服の
末廣取そろへ未消殘る雪路よ情も厚き溫帽靴おいろづくして餞別を受おさめつゝ暇を告心ひろぐ
い法の爲世お鎖たる鐵石心本國安房よ立歸り身命を三寶よ奉り此法華經を弘通せんと今日九重よ
さく花の帝都をあとよ見なしつゝ霞とゝもよ打立て晋妻をさして下だり賜ひけるあゝま伊勢天照
皇太神ときこへしい日本開闢天照しまず御神の宗廟よして天皇は始め神武天皇より五百三十余年
の間い禁庭の内太子の御座近く祭め祀りさまひしかど十代崇神天皇の六年神と同座あるをおそれ
み賜ひ始て御廟を和州笠縫の里よいとあみ内裏よいませし神体をこゝよ移し祀り皇女豊鍬入姫
尊をもりて神お事したたまふ後大和姫尊おれよりい神廟お事ぶろはより神勅お任せて綱こ遍
し歩めたるあとい四次垂仁天皇二十六年勢州渡會郡五十鈴川は水源よ鎮座なるべきよし神託よ依
て神殿を造營と今の伊勢の守廟これあり遠長師い道を伊勢よとゞめ間の山淨明寺といふい天慈禁
ふで此時の住僧い敬山にての知已ありければこゝふやどりて旅は慰は解神廟よ參し賜ふよ神勅
山源喝子鼎よびづれて吹神風ものどかあるみをそろ川は水清み移る八千代の若翠杉のむら立緑ゞ
と神さびいます廣前よぬかづきて神拜終り御經取出いとそ即よ讀誦し法施よ時をうつし賜ふ四遍

しづけき神殿の扉を開て鈴の音いとゞもかすけく響ゞとひきつゝ榊よかけし神錦より颯と飛て
輝く光明樹々の枝葉も神垣も同じ色ある紫磨金色内外へだてぬ八百萬神も納受と見へよけり即い
此奇瑞をかしこゝけ神前近くもゝよより傳きく天照皇太神い本地久成の釋尊よて迹を東海秋津洲
よ垂給ひ衆生の利益百萬餘劫正像三千は其間は法華迹門をもつて法樂として威光精力を增たまひ
今末法第五は濁世よ當り諸經は利益盡滅たりさあれば皇太神も無明濁惡の世よ堪たまはず此迹土
を棄て本覺の妙土よ歸り給ふらん此事御經文よ於て遠長疾よりあれを知れり我數ならぬ身あれど
と佛勅よまうせ法華本門を此神州よ弘通して末法當來の間をてらさんとそ神慮いかにとゝりけれ
ば大地六變よ震動せりあれ此御經末法よ流布をべき地動瑞とぞ知られけるあれより數時淨明寺よ
とゝまりて日に〳〵神廟よ詣で法樂の讀經いと尊く聞にける時よ又妙見大菩薩の示現も有て今よ
其地よ妙見町の名を殘とぞ皆これ正法の不思議とぞ思はれける
問の山淨明寺に大士あゝよ參籠は時手づから彫刻し玉ひしとて一遍首座の本尊その下よ遠長六
年甲寅四月十六日日蓮敬白と十五字を石面よ彫附たり案するよ宗旨建立の翌年鎌倉松葉ゞ谷よ
在して天照太神法樂の爲奇瑞認給ひしを後の人石よ彫てこゝよ遺しものとぞ思いる諸傳の說又
冥應論等ろの理當らず
神風や伊勢の社の感應奇瑞心おかけし法連綱日も稍永き春霞翼はやたてもく湖水い古郷いろぐ旅
の友日數かさねて房國の彌生の空も十歳經過りて見ればいとけなき稚遊びよ我植し門の柳とやゝ
老いて殘るを宿の目當よ遠長唯今歸國せりときゝて次郎い歡び門母梅菊は取分て親か如く走り出
草鞋とりも洗足すゝめられかれと旅の疲れをいたはりて積る話は四方山よ今を春部と前出草葉の
の數も及びあき其喜びい知られゝり父は次郎は心づけ何時〳〵までもこは宿はとゝいたまはもう思
べとと道者御坊もさいり頃より遠長の安否は聞えいべらすやと厭を幾度か所化僧や童兒をおこし

で問れ給ひきいろき御師は見えねば厚き情を報てよといそかせば遵長師も意をえてやがて清澄よ
登給ひ諸佛坊よおとなひ給ひたるよ師の道善は雀師し席にも居らず喜しみを年月ながき學問よそ
の憔悴もをねざるいとて喜でうち笑ひ又修行よも程のわれ老たる我に久しく物を思ハせたるい
腹たたしとて阿もしつ尚時しらぬ袖の露しばしハれまはなかりけり遵長師は怒怨よつゝしんで在
すれを事を委細よ述たまはずとしろの話の佛法の事よ移らんとそれば色を柔ゆ詞を輕くも敵山の
墨は高かりき高野山は寒ゆりきと他れ話に紛らして更よ佛法れ事よわたり給ハず師の御坊も亦慈
愛深くてされを修行の事を問給はず相互に心懇む物語よ時を移し給ける又同察の法兄弟圓密淨
顯義淨等始としておさなき雛僧兒達までゆはる〳〵無事を祝しぬ又師れ坊は人を馳て次郎夫婦よ
悅をのべ給へば次郎重忠も使とゝもよ山に登り道善御坊に式禮し淺からぬ慈恩を謝しはべるよ道
善い手れ經足の踏をしらず庫裏の司を召喚て遵長はじめ其ゆ父も亦院内の僧どもへも些の盤膳よ
あれかれと指揮あるよ咽て折敷の木椀よ豆腐れ羹黒煮の蕨そへ持出る弦鍋い備後の酒の味よ似
ぬ其片白は許しても肉いゆるさぬ醋の和布雁煮の椎茸とりすゝめ過飲一座の眼いしく飯後の菓
子の麦餅に搗栗をさへ添さしつ最十分のもてなしに春の日影もたそがれされば貫名次郎は道善よ
厚き遊作の習ひをのべ又遵長師を見かへりて明は暇を賃ふて來ませやといひ〻して足下晴き夕黒
を送る奴僕の松火よさき照させて高低と麓の方よ還けり遵長師は聖の坊御坊よ育て山を下り小湊
よいたり給ひしよ慈父重忠機嫌よ師を側近く招きよせ昨師の御坊の我よひろかよ宜給やう此山
よ信多く我法第おまた有ぬれど我山を讓べきい此遵長よ限るかし我も六十を超たれば程ゆく寺を
彼よもつり心安ゆる身とならば我身の僥倖御身達と老れ特怙よおらずやと語さまふを聞よ付けと
れまで長き旅住居一處不住の癖つきて又鎌倉よ往もやする京よ上やしぬらんと御師も我も心よゆ
ゝり侍ゆしこれより心おちゐけを彼消滅れ主となり人を仰かは其身の立身登庸れみか我々夫婦も

世の人よ當見持たりと謂まれ此世後の世安ゆるべしさい思さそやとおりなるよそ遵長師は黙頭し
ばし思案よ沈み玉ひけるが武藏鎧よあらねどもさすがよ懸ておもふよも言て果べき事あらねば思
ひ切て宣やうわれあの歳月釋尊の御經を幾度か押み奉りしよ當時日本よ弘まりし念佛眞言禪林の
諸宗の祖師よ誤多しろの誤を傳へもて其とも知らぬ八宗九宗堂塔沙門のわりさまは佛法繁昌と
見ゆれども正よりひなき脫虛の殼ことよ佛の入滅より正像二千の時くれそ今い末法第五の闇其を
照すべき御經は法華經よ限るなる佛の敎を身よ受て妙法の蓮華を一天よ咲せんず大願をでよ決定
せりたとひ八宗九宗よあたまるとも其をばさらよ念とせず强盛よ說のべて世を救ふあろ末法の
本因妙の立行ぞと御經にい見えはべりぬと詞しづかよ語りたまへば母梅菊は法衣の袖よ取縋厥を
拭しゝとはいはねども道善御坊の深き情慈父の今の詞とあれあれを思合せて餘の事よ心移して
玉はるあと女の胸の山の井の淺きとのゝら濁いて夫壻次郎を勸つゝともにその弘通の志を陣玉
ふわさましゝとも遵長師い悲しく手を支ハ元より出家と成玉ひしい衣食よ富で位高く榮耀を求
むる爲よはあらじ父母の御手を離て廿一年千辛萬苦も法の爲世の爲よせし學問修行ろの効積て御
經の大小權實顯密の諸宗の義理を直下よ見なし身をも惜まず末法の衆生を救ひ得させんと身よも
不愿大願も佛の敎是非なしと心定たてあるもれを今父母の障たまふいこれ唯事とと思ハれずむる
し唐の天竺大師法華圓妙の觀念を凝して在ければ父母左右の膝よより涙ながらよ其行法を妨ゆ玉
ひし事ありこれを御經よい惡鬼入其身と說玉ひ遵長いとしと思召御國親の御心よ惡鬼夜叉のつけ
入ゆ慈悲の詞の劍をあくし今正法を妨なそと發ゆるぞ熟思しかへられよ受がたき人界よ生を
うけ値がさき佛敎に遇來りもし今生を默止あばいりの世よか菩提を得てん世々生々無益よ棄たる
身の骨は積ば山とも成ぬべし其中よ佛法れ御爲よ棄さる骨い指一本たよわりとも變えず幾生が間
恩愛別離よそゝぎさる涙は大海の水より多ゆらんもし其うちよ佛法れ御爲よ流し涙一滴もわるる

らばうとる凡夫と生ハせじ今度優曇華の時を得て身を傷ひ命を棄て佛法を修行し御冊綸旨を
をたもけ一切衆生を救ハんこそ出家となりし面目あらんと稚幼ときより何ひとつ兎の毛ほど尖の露
ほども親よろむかぬ蓮長が本懷大事を身に受て篤く教導なし玉ひしおぞ慈父次郎も稍顔面のいろ
解て善らぬ事を爲兒てもそれを定まる因緣あるをまして廣る大千世界人を渡さぬ者は法の御船
と身をなしと多くの人を救べき平等慈悲の心をばいかでといめん止あと要梅菊をも言喩し給ふよ
ぞ蓮長師は兩親をふし拜をろの御詞あそ廣宣流布の大願を滿足すべき初たなりと御歡喜れ色見へ
て清澄よ嶺山おし給ひけり今年は春も稍暮て卯沸木花さく冥山の蔭る樹間の清澄よあゝろ澄して
思すやう今年正しく如來は滅後二千五百一年に相當る天は一を以て清く地は一を得て準く玉公い
一を延て天下を治たまふ況我が大覺世尊一佛乘を以て一大事因緣と說一閻浮提は一切衆生の爲に
一成道を示しなまふ一の妙誠よもつて塔中別付に契當せり此時を過あすべからずと卯月末の二日
より一室に籠り香を焚て大禪定に入給ひ時お御齡三十二歲蓮長五年四月廿八日東天の空はがらあ
に旭日東天にかゝやき登り給ふ時安祥に三昧より起て念珠を御掌に懸ながら旭日に向ひ高聲に南
無妙法蓮華經と十遍ばかり唱へさせ玉ひけり其山々の梢吹夜半の嵐の音絶て今朝い高嶺に萬代を
唯一聲の松に音あれ今三千二百一年の昔し大聖世尊より眞行菩薩に附屬わけし一呼百諾の金言來
法相應本因下種の題目とはいふなり發くも此本化大慈の日輪今東海にを登り平等大慧の光明大
千界を照し靈未來際の闇を除たまふ始よりこと誠に法運開闢の時等とを思われける此日兼て人を驚
て觸さりければ午の刻頃より麓れ男女檀越の人々別て當郡は地頭東條左衛門景信も御使御下僕
召連忍びやうに登山を南面の本堂に雖を御立ぬ參詣い今日しを當山の蓮長坊敬年京學の功積て歸
來と此山に始を法を說なればいかある尊き事ありや梯學ひの法門を聞ましたのをあてましく波羅
蜜梨多耶の法言と南無阿陀々の念佛よしばしは唱を止ざりけり蓮長師は山堂の太鼓をうたせ徐々

と高座にのぼり燒香散華に心を澄せ四弘誓願を唱へ法華經の紐を解第六の卷を讀ひげたまひ顏
色を和氣然音しづかに宣やう我年來一切經論に亘廣く諸宗を學びたり八宗十宗見ざる事なく聞
ざる事多し又次の五百年をば禪定に時とて坐禪工夫を凝して得道とる者多しあれまでを正法千年と
いふ又次の五百年を讀誦の時とて能御經を讀修行して得益を蒙る又次の五百年い造塔の時とて堂
塔伽藍を造りもて利益を得べき時節ありあれを像法に法年といふ此二千年過終て後五百年を白法
隱沒の時と名づゝ如來一代に聖經利益一切に靈果て一切衆生成佛の道たえたりあれ末法萬年の
始あり其うへ正像二千年の間い本已有善とて佛に成べき種を兼て釋尊より植置れたる衆生なり今
末法に入て二百年當世の衆生い本未有善とて本より耕さず耘らず種を植ざる赤凡夫なり抑々佛の
種といふい妙法蓮華經の五字なり此事經文に明白なるぞよ然るを邪土宗の法然は少乘下劣の念佛
を弘むるとて擇擇集といふ書を綴て其法華經を棄よ閉よと爲り禪宗い敬外別傳とて法華經を蔑ど
り眞言い天に二の日なく國に二人の王なきものを大日如來を本佛と立て釋尊を落し法華い大日に
屈取に足らずと謗り律宗い二百五十戒三百戒を算へ持て大乘法華の經王に隨ずかゝる諸宗の
邪流をば法華經第二譬喩品に佛說て宜はく佛の種を斷す者なり其人命終つて無間地獄に落て無量
劫にもうのぶ時あるべしと見へたる子耳あり眼あらんものいあれを見聞て邪正を辨へよ念佛は
無間に落る惡法禪宗は天魔の眷屬眞言い國を亡す邪法律宗は國賊なる事敢て私の詞にあらず皆即
經文に見定たり諸宗無得道地獄の根原法華經一の利益さらに疑なし時知鳥の不如師今は蓮
井に登高し山田の早苗植殺れ實のり秋に後悔すなる時は今法華經流布の時我いあれ如來の使なる
はと弓手に御經たかく捧げ妻手に高座を折を說示たまふにぞ一會俄にあしましくあな勿躁あし謂
陀を謗りおのが宗旨に眞言まで謗るおきあせて言罵る狂僧にあたら耳を穢したりと口々に惡口し罵

怒り又は笑ひ球數を輪組てさす職を屈さる腰より組漬て城壁來よと牛は牛馬は馬遮ゆく群が堂と
聞立て歸りゆくされ木化の弘通末法下種の始あり就中圓智坊とて此山より年を拾ひし老僧和藹啞々
る聲怒らし我を法華經を信じもて讀誦する事五十年又三年此方は一字三禮より書寫をもしたれ何を
痴迷てさばありよ法華經を信じたりとて諸宗を罵口いべるぞやたれのある其狂者の遮長卿疾挽出
せといきほきて老のあひなき夢を攘り頭より殘る髓を咬ていとかまましく叫喚けり地頭の左衛門尉
信は諸佛坊より寒と入て道善御坊より坊の姿を見そなはしよるか他此事は角とあれ御坊の事といひ
此地頭狀信より緩怠無禮の遮長奴輩子の高座を引をろし切を捨るは易けれど無垢清淨の此山の靈地
を穢すをおろれ見て其場は免し置たれどるゝ不法の痴漢を其まゝ置ば地頭の不念寺門の恥辱我
請受て遮戻らん時しだまへと有ければ道善い恐懼驚公此怒も道理なら狂氣の遮長をいかはせん
其儘こは坊より預たまひぬ能言樂して正氣よかへらば今日の麁忽い我より詫んとひたすらより宥られ
たる鬼輩さしその地頭も怪あたあく頭ふくらして立出ぬ道善坊はひさと暴れ遮長卿を坊より招き性
根は弱きその耳より老の廻らぬ舌をもていふも無益此事ながら十二の夏より手より育て見慣多き法弟
たりと未頼母しき年月も劫て後のあだとなり此寺をさへ棄べき心猶も木は泡消も入たき我が心寛
慢左衛門尉信が刀の鋒よりあれかしと此寒秋を聞ひはせじ今日此心をひるがへし改め雖きとならば
此山より匿がたしいづくへありとをみをかくし願ふは東條景信が眼より當らぬやう心をつけよ此數
調は身よりして先非後悔せしうへは疾我坊より去へりとよと幼稚輩を慈すが如く宥めもしつ叱もし
ぞ夕日さし入遮戸迫るよしあき鄰の愚を後より見なえて往空より縣林をもとめて立騒ぐ雀色時鼓鳴の
下路さしを除五へば鐘とれもあぬ二人遮後を慕ふて退來にぞ近くあるまゝ斜見ればあれ別人あら
ず法兄の淨顯義淨の二人ぞありけるとともに聞よりち向今庫裏のしもべの聞をきくみ地頭の怒御
輩ず山を下らば持伏て御て嬉んと平遠の此堂より御とかきく此遮をくだり王いとと冠しさすれば

小湯の輩のひへよは遮住ゲたし我々ゲよき隠處を思つきたり此方へ來り玉ひぬと後と前とに淨顯
義淨卿をいたいりて組徑のゐはしき間道うちめぐりその夜の闇よききれけゝ清澄西條の郷華房の
遮華寺といふ眞言密寺より身をかくし其離をのがれたきふ不測や此經を末法より弘通せは刀杖をもそ
惡人より追れ又常住の寺を攻出されんと御經より說れたる刀杖遠離の法華い今日あてより現前たりさい
あれ又諸天善神晝夜より守護あるべきよし五の卷の御經より遊ゝず今智危き卿難を聞人より救れたる
も此將奇特の經力なり

華房は遮華寺今より眞言宗より現在を又淨顯義淨の二人い後年大士の化道より受戒はしたれども其
頃大山の住職にて鄕位輕うらざるをもつて名利よつながれて其宗門を出ず然れども內心深く其
宗義を信じ淨顯は日耳義淨は日在と呼弘安元年大士年を樂て本尊を寫しあれを授與ありしあと
組書より見はたり

かくて華房遮華寺の住僧背遮坊の方に在しけるゲ此華房の里より近頃阿彌陀堂を建立を遊鄙の地あ
れば開堂供養を導師より立べき人なし幸ひ遮長御坊は南都高野より學びたる希代の學者なるよし言傳
ふ此堂の供養をつとめ村の男女より念佛を勸め賜はれと榜も匂ふ新造の御堂せましと押合り師の說
法を待處より香樂の裝束振揚げゝ講席よをゝめ御經開て宣やう釋尊一代の說法大より分て二とあを華
嚴阿含方等般若の十餘年の經々い權經とて時を待間の權の方便又後八年の法華經あそ如來出世の
一大事これを眞實經と名付あり其は私の義よあらず四十二年の說法終りさて佛の宣やうあれま
す種々より說法せまい皆方便よして未だ眞實をあらはさずとさしきつて斷り玉ひける御經はあれなりけ
りと無量義經說法品を取いでゝ未顯眞實とある其文をさし示し其上彌陀ハ四方十高億土他方佛
より在すなる此土有緣の釋迦世尊法華經第二の卷より今此三界い皆我が有なり其中より衆生は悉く我子
ありとあるものを我が觀を捨て他人を勸むを道といふべきかされはあそ念佛等の御組いあさまし

くも四十二年のうち方等部の經あれば名有て實なき極樂往生願むかひなき阿彌陀佛それ理と謗すして念佛閑祖ハ法然御坊畑れやうなる阿彌陀を捉へ本佛釋迦をふり棄よと人を惑を地獄に墮樂たとへば家ヨ飼れし獅子の下男奴僕ヨ尾を搖て主人を見てハ初ゑ吼る賤きヨ押尊を恐む狗の眞似する諸宗に元祖この事を天盛大師ハ狗作務ヨ押たりと釋し賜ひしぞと說かるゝを群衆の中より傑あけて佛を誹る狂氣の共賢僧を引出せ打ヨ擲と伝鐘の撞木を杖ヨ立駕ぐ遮長師ハ斯ころわらんと高座を退き遮華寺へ立戻りたまへども今は此寺へも入寺らずさらばあれより鎌倉ヨ立越て彼れ地ヨ法を弘めんと心決して小湊ヨいたりを告んと書信賜ふヨ前日の不興ヨい似もりかす次郎夫婦ハ門口まで出迎上座ヨ押居へ鎌倉に弘通あるべき其志をも聞終りさて宣ふやう前れ日細々と示されし教訓ヨ我を折て能々思めぐらせば語るは今が初者樂とし若き時我々夫婦ハ夜れ夜ヨ云々の不測の事を見そしより御身を懷妊あしつるを思へば遠き夢語それヨつれても今日此頃諸宗の祖師も及びなき道ヨ心をかけ橋のゝけて弘むる御經なるを老前近き身り忘れ難波れ浦のよしわしと我が子と思ふ煩惱心今生後生れ罪ふかしと母もろともヨ觀念しろふより有無の乱題心ヨ制て菩提ヨ入御身ヨ弘むる妙法の妙の一字は未來ヨて我が子の受し紀念ぞと此を頂ヨいただきて遮華ヨ捧日輪の夢れ奇瑞の二を取我ハ妙日北母ハ妙遮と法名を定たんと持佛の前ヨ輪ひしぞ御身が鎌倉ヨおそむきて後五百歲の御代れ春法遮たゞたく開く日を指折算ゑへて待ずかしと涙ながらヨ宣ふヨぞ師も諸とともヨ露時雨うれし涙ヨ袖ぬれて今日御兩親れ得脫ハ衆生教化の始なり又御夢れ吉瑞とて御名を妙日妙遮と唱うへうらい慈父れ日の字と慈母の遮の字と此二字をもて我が名とし今日より日遮と改名せん 明 あること日ヨ知ものわらんや清きヨと遮花ヨ勝もはやゝ知るされ此二字の取を直さず父母なりあれより鎌倉ヨ立越て尊無過上の立行を開き佛勅れ如く此法經三千界ヨ流布するならば我が力用ヨあらずして其ハ父母の功德ありと三德一身三人の親子は淨き

潮井筒盧栢れ香をこめてゆふ汲初る法れ水日遮大士ハ懷中より御經を取出て今身より佛身ヨ至まて能持南無妙法遮華經と慈父妙日慈母妙遮の御額ヨ御經おしゐて授たまふあれ我ヨ宗門ヨおいて本門受戒の始なり父母御容ヨたへ給はず昨日は我ゆ子今日よりハ未來永劫惡業を救ひ給ハる大遮師布施れ品々ろれあれ取をと揃て供養しつ門外ヨ見送る老夫婦あれまで遮し愛別の身を知雨ヨふりかへて今ハ嬉しき歡喜の涙心直ある一筋の門出の畦を高聲ヨ御題目を唱へ〳〵鎌倉さして蹤足なし給ひゆりさてと日遮大士ハ五月の中旬船の便を求つゝ相模の國へ渡海せんと名古の海邊ヨ惜き給ひしふ此程梅雨を吹送るその北風ヨ涙苦く往來の船も道絶て因果給ふ所ヨ平郡泉澤と云里ふ樣れ頭太郎といへる人有けりと伊勢の國の山繪ゐる人あるが久しく此地ヨ住てありしが不圖大士ヨ相見し一樹の蔭の旅の宿その弟次郎三郎ともヨ大士を敬つ其化導を蒙るヨ思いず日數を重てし大士は此頃渡海なす靜の日和を待ゐびて後の山ヨ登上り海上はるかヨみはたし八大龍王護念の爲要用御經ヨみ揚玉ひしヨ龍神納受やましノ〳〵けんこれより登晴風穩ヨありヨける此地の里人ろれ奇特を言傳へ地名を南無妙法谷と稱す今は昔して南無谷とよびあせり泉澤樣の大夫兄弟ろれ此母の爲ヨ法華堂をいとあむ弘安二年日念聖人をりあいして開堂して寺となし名付を成就山妙福寺とゐふ妙福ハ其母の法名ヨして大士自筆れ本尊を授與あと玉へり斯いこれより二十六年の後の事なり其續經あり古蹟い法華塚とて今ヨ現存せり

南無谷妙福寺の開基日念聖人は松本坊と號しもか天台博學の僧ゐり宿緣有て風間の日頂聖人ヨ値て改宗し又大士を拜して別頂の秘法を受命ヨ依て此寺を草創し大士を開山と仰ぎ其身ハ二世ヨ

月又日頂聖人の舊恩を忘れず寺をば眼間の來寺とせり

偖も日遮大士ハ風あき海平ヨきて船出をいさむ港口こゝろ吹南風ヨ風帆片帆取表相ヨ駛うはし潮路やそらヨ相模なる三浦部深田れ浦米が濱ヨ若船し給ひける此浦れ濱ハ遠

くを船を厚よれ者がたじ砂よさへける舷よ大士れ法衣の裾を捲持已よ下立たまふを見て流藻ふ海人が走より我渡しまゐらせん御裾ぬらし玉ふあとて大師を背よ負奉り岸山岸の岩根まで打波の荒磯を渡じまゐらせしよ大師その志を喜つ見かへりたまふよ北男の頭よ血し月の流るゝを驚きていかよ爲ぞやと問給へば蟹螺の殼よ踏りけて其角よ疑を激かべ者はと聽ければ火上舞みたまひ持る鏡をかゝらざれば越好其鏡の御經取出現の日影の湖照 衆をしのゞ瀑吒岩の狭間よ立よりてしばし御經讀給ふ西をさしてぞ立去り給ひる不測やこれより此磯よ生る祭現の何折て今の世までも米の隅角あし蟹螺の奇特をば此地を等を知ぬべし彼年こゝに寺を造るの靈跡をさし示す狭山開本寺とぞ開へける大師はこれより山路よあゞり忍無の里より守殿明神を通り多吉江川を渡りたまふこゝい三位維盛の御子六代御前の割れ給ひし盛よを流るゝ川を最期川とよび傳へ其御墓も苔蒸ゲくれて見へ渡り誠よ一朝の花と時はきし平家一門のあれの果いと哀れよ思し出御題目を唱へつゝ掬よ暗き水下間ゆくて峰高き名越坂洞あを山の切地し水無月ちかき此頃の炎き日影みたへたまれ冷清る水落よ一掬の水もあなと求給ひしよ岩此間よとく〜と湧して清水の湧出たり大士喜で御手よ結び掬取甘露とおしいたゞき咽をうるはしたまひける其味甘くして風清冷に掬ひ稱ある水ありとて其頃鎌倉五名水の第一と稱ぬ今は名越の道側よ殘りいかなる旱魃よも涸ことなく日蓮水と稱す大士鎌倉よ入て世の疫相を見聞なしたまふよ思へ以此地よ避難せしも はや十二年の一昔去る寛元二年執權北條經時鎌倉四代目將軍頼經公を京都よ追上せその御子六歳よあらせ玉ふ頼嗣を將軍をなし事りり此幼君の御姪を名をし北條一家我儘の振舞多かりければ諸將軍頼經公京都よ在てあれを惡き北條を討亡すべき御謀叛を企て給ひる此事いやく顯露よ及ひければ今の將軍頼嗣公漸く御齢十四歳あるを誘叛人の子なりとて深く惡奉り相模守時頼陸奥守重時兩人より京都よ奏聞を頼嗣公を惡多秘謀叛天皇第一の皇子依聚親王とぞ御年十一歳なるを

國乘よ迎へ征夷大將軍よ任じさらよ世の中を事ゆらたまりて見ゆよる日蓮大士い鎌倉大町の南名越北東の山際よいさゝがある幽地ありしをこゝよ土を均し地を坦た柳木の柱ふしいかく仮屋たまて樣どし屋花刈吹飛雨も七堂伽藍よいやまさる久遠本果の古佛場大師はこゝよ日を送り經文闘闘の外さらよ他事あく見ゆよける大町米町村木屋敷町名越その邊の人うはさして彼處よ御經よみすます道徳不思議の情わりとて尊き事よ聞つたへけるとなん大師は鎌倉府内の諸宗門北條一門時依の僧天下の育權僧の妻まで心をとゞめ猥の言を因したまいず身を如法堅固よまもりつゝ雄氣を發ひ在ずうち社司大伴ふ紹介を求め鶴か岡の經藏に入玉ふこれい去る延暦元年十月十九日實觀將軍永福寺ふおゐて供養ゐ參し宋本開元代目錄五千四十八卷經の藏あり此等の事よ秘事てきのよの靈よ假かへる大師の祈の村消よ履雪しづかよ三十ゐまりの氣高き法闘容貌柔和よ小顔を折大士を三禮し奉り我は飯山よ修學あす成辨といふ歩熱代倍よいべるが久しく彼の山よ在學すあれまて年頃學びたる天臺傳教兩大師の學類をもつて三堂の學者よ論談するよ法門さらよ相合ぞ尚弘く其義理を等ぬしよ慈覺大師い傳教の法弟よ而りなどら還て其法流を汲したる法敵なりと見定てろれ不審を學頃よ尊しかば其元い蓮長ど弟子にいあらぬやと問れて其い辨へず其蓮長といいあなる人ぞと答しあばあれは近き頃房州より來て此山に學問せしが慈覺大師を傳敵法敵と屬るゆえ尖い傳教を知て宗た慈覺を知ぬならと苦論しても心闘ずうれまゝ山を退きは御坊の門るゝ盛師蓮長よ問たるいと問も嫌してその人い何國よありしやと答しよ無動寺の塔海といへる僧ろの庵よありて蓮長あそ國よるへり近き頃は名を日蓮ど敬たて鎌倉よ見えたれど風の餌よさへけるささし示されを嬉しくもゝ師よ値ば我が胸の月よ曇なを雲霧も晴ずやいとて山を下り背羽の瀬のあとをきくに其名ばかりを知遠よて嬉くあゝよ嬉ぬ得しと其偈心の尊びはいはぬど色よ見ゆる大士いろの論經開終り不測よる同道ふむ蓮師の 御 わたす敬

のなからずやと此より御國に在て日々に疫癘の條々を書もて大士に問奉り大師喜ておれを解釋し食を忘れて教化なし玉ふに成辨は坐に感涙拭ひあへず幾日もわらで本化の宗流を聽得て晴し心のうれしさに本門の大戒を受て改めて法弟となり玉ふ大師を此鎌倉に入てかゝる學匠に法弟を得玉ひし事實に百萬の加勢を得たる心地して其の名を祐昭と云よし問召其昭の字に我が一字をろへて日昭とぞ名れけるあれより水に魚に朝夕の炊さへまめやかに立辨て大士に亦へ給ひける一日大士御經年逝に日昭を召れ我國年よりの志願茲に滿足し上行所傳の妙法を四海に弘むなる若此御經を經の如く弘るならば三類の强敵とて當時に名僧智識第一に怒を發し上に國王を誘へ上も亦其邪正ろの義理を正さず度〳〵島へも流しあるひい頸に及ぶべしと今讀さしたる五の器物特品二十行の偈の文に見はたり御身我が弟子ながらも我よりひとつ齢たかし今日本國中に充滿たる念佛禪律禪此諸宗あの諸經中玉に法華經の勅命に背き方便下劣の分際を忘れ決定に利益を奪はんとす況是より忠勤を抽んで征伐に取かゝり北條門の諸宗を退治し一天四海みな妙法の民とあさんとも然いわれども敵い多勢我い唯一人なり身命を期とそるとも鋼子をもつて磐石をうち碎るより猶危し若我討死をもあるならば來法華年の群類を離かたすくる者あらん御身々ふより心を決し日蓮大敵と合戰を挑みいかゝ成ゆく事わりとを必ずこれをを願見ず信心有緣へ味力を問めりいで旗を揚られよ共に討死をるも忠又惜からぬ身を存命て再び家を興すこと却て拔群の大忠なるぞ努々退れ給ふなといと丁寧に宣へば日昭聞を涙に咽び數なら身も法の爲難事を忍び御道祟に戻らじ御心安られしぬりられば大士は滿足の色を顯し給ひ日昭師も同音に勸持品をぞ讀上給ひける此六老僧の第一位大成辨阿闍梨日昭上人とて大士常に辨殿と喚玉ひしい此御坊にぞおはしける　抑此日昭聖人と云い下總國葛飾郡平賀の郷に平賀祐昭と云者の子也其は福有よして田園に富郡郷に尊敬せられ輕からぬ郷民也兄弟三人に女姉は印東次部左衛門有國に嫁を又一人の舍弟あり日昭師は

承久三年をもつて生る生質篤實にしてをさなきより禮儀正しく進退度にかゝふ孫に書籍を讀事を好で僧に交り寺に遊ぶあとを樂とす十二才の頃より靜あなるを愛し人に應對するを喜ばず父祐昭才智の人なを夙く其宿緣を察して十六才の時山家せしむ後年敵山に於を奇遇の因緣を挽鎌倉に下つて日蓮大士に上足となり末代法華弘通の後殿と定られ大士鎌倉府内を追出されし事二十餘度また伊豆に三年佐渡に四年の流罪に處し又龍口死罪の大難あゝる大士の急難に兼ての約束日昭師い些もあれを念とせず師依の人々隨身の徒弟等四散に落行べき味方の殘兵を固た濱士の邊に かくれ住大法將日蓮〳〵法運遠に開ぐべき時節をいあり給ひしはこれも亦六萬に副將軍本化薩埵の再身とあり思われけれ

日昭聖人鎌倉極樂か谷に來て大士の法弟となりしい三十三の時にして大士より齡ひとり立給ふ年華といひ道學といひ智德圓滿の法弟もゐ後陣の任を命じ給ひしも又宜なり我が宗運既に開け大士入滅の後い鎌倉の濱土に歸り即恩報謝の爲心と喪に籠り讀經禮讃十三年に及ぶあゝわ比敵山に登海老屈して九十一才日蓮大士宗門を弘た玉ひしより成辨も亦ろの弟子とあり即匠に跡を繼て在すときゝ昔なつゝしく正安二年に春齋頃を鎌倉に贈り本門の大戒を受ざるを悔たまふ文跡を見て日昭聖人と此時七十九才あしゝたに空懸しくや思しけん二人に弟子に扶けられ遥々京都に登玉ひれい尊海師におとひうゝおき今生の對面を喜びむあし日蓮聖人いまだ遠長といひし頃鎌倉に旅の舍に初て知己とあり我と昔しは男山盛ある身に張りよく聖人を此北敵山に遠來りしも今指折算れば六十餘年の昔なりと老の瞼に涙をうかめ在し世に物語にとりまぎて本化別頭の法門を談じ受戒受て鎌倉へ歸けり日昭聖人五十餘年の間法を護て在したる山非の濱土に塾居の草庵あの伊越後信濃南國の太守風間信濃守信昭大檀那と成て一寺を造立し弘演山妙法華寺と名づけ法弟日祐をもつて住持とそ時に元亨三年三月廿六日々昭聖人世壽百三才よして示寂

なし王ふ大士入滅より四十三年の後あり此濱土此鎌地も程あるを正慶建武の乱より戦場となり妙法華寺も兵火の為に焼失あいれ日祐聖人い寶物をもづかに標よりけて池上に逃去漸く豆州宝金村に東金山妙本寺を建ていさゝか古蹟をとゞむ其後法孫十三代日包聖人文禄年中同國田方郡賀殿村に鎌倉濱土妙法華寺の號をもつて一寺を建立す元和年中第十六代日亮聖人新に今の伊豆玉澤を開基し昔の寺號に倣て妙法華寺と稱し山號い經王山と改む第二十一代一乗院日發聖人といふは俗姓蔭山氏にして紀伊水府南鄙の沙毋堂發珠院殿阿闍の方に姪あり此ゆゑをもて當山とはなれり寶に美觀を盡し諸堂魏々として一方の大本山とはなれり寶に也や開山日昭天聖人の昔し山井の演土に竹を編流よる藻汐草をうき寄た家根と寶つゝ雨露を凌ぎ辛びてし五十年間離辛苦に殘法の功德後年こゝに顯れなりと別を尊く思はれけり

愚者い愚を知らずしらざるゆゑにこれを愚といふ賢明は本化に肉身日蓮大士去る建長五年との鎌倉に來り今年甲寅に四月廿八日名越松葉が谷の御草庵に天照太神三十番神を勸請し奉り御筆を取て南無妙法蓮華經の七字を大文字に劃認有てこれを法樂に捧給ひ名越の往還開近ある處に高座を儲設法利生に花を雨せ賜ふに去年よりこゝかしこに辻の間にたる邪なれば米町辻堂の邊より遠近に語傳て宣繼で聽聞をる者いと多し高祖大士い一代の御經に機教あり對敵あり方便あり眞實あり又正法あり邪法あり邪法あるゆゑを譬喩し日出ぬれば星かくれ末法の今に至ては法華經の外諸經に利益いちらぬよし懇懇に示給ふけど幼稚に乳房を戴ふる赤の如し一日いかにしく太刀を佩たるひとりい武士八目を憚る鋼笠深く御花冠の外衣に佇立始終聽聞し居たりけるが說法果て笠脱樂聖人おいさまか不審あり如來元來偽あるいつへりあきゆゑ佛といふ佛念眞言禪律の經々を方便無得道と說給ふいそれ所詮なきに似たりとありければ大士笑を含玉ひされば塔を建んには先ろの足代を組あれを方便といふ大塔企と成就せば足代を取棄るあり有れを眞實といふ大聖世尊法華

經の大寶塔を建立んせ為に四十餘年の間禪念佛の諸經の足代を說たまふ今これを切棄るを正直捨方便と御經に見えたるいと說示ま玉へば彼の武士しばし默然としをわりけるが立て三禮し來り此程出勤れりべるさに度々聖人の御演說をきゝまゐらせど何あくゆ德の慕はしく今日しも見參に入るうれしやと我い北條の一門江馬遠江守の近臣わて四條金吾賴基といぬ者なるか近き頃建長寺に道隆禪師に參禪し專に坐禪工夫を凝しはべるうち聖人の說法に心傾きふかく隨喜し來るにこそと疑ひわる條々を問まゐらせ逐々ろの理に感伏し忽ち邪を捨て正法に歸したりけりあれぞ江馬殿に家臣にて所内に名高く武勇の勝れたるのゑあらず文學ことに長たるく醫師の術にさへ通し篤實の聞へある雄士なるかあれより深く大師を尊信し動仕の暇には日夜御側に在て法をきゝ妻と亦もに歸依し來り朝夕に食物たり其折々の衣服まで心にあけを供養し來りける頃しも水無月盛の暑をいとひつゝ夕日傾く酉時に遠大師い筑紫流樞より若宮小路わかゝり名越の方に歸らんと思したる途中俄に白雨ふりいでたるにかざす法衣に袖笠も凌きりぬたる礫雨いかゝにせんと見たまふ處に樹の蔭を高く眺撮年猶わかき侍れろれなる御僧に此傘に入玉へとさし招くに有いと嬉しく御尋しで其人に伴ばれたまふ他生の緣の傘やとり我は名越へ歸らる侍身い何地へ往玉ふやと問れて我も名越の者ありと答玉へばそはよき同伴ありさらばは侍僧彼の地に日蓮といへる法師を知たまふや大師答て我は其日蓮に侍るといへば彼は侍うち驚きさいつ頃より人の語をきゝはべるに天下の侍歸依淺からざる禪宗を天魔は奪ふよし出家に似ぬ雜言を我いはゞと世間の取沙汰實にさる事といはるゝやと遠く聞れべうちうあづき出家の身い元來佛の使なり世を畏れ人に媚ぞこれをいはずば道立ず抑も禪の宗流い教外別傳と學び不立文字と示すなりかゝる宗旨を侍經に我入滅の後は大慈大悲をとつて文字と成を乘生を利益せんもし佛教に依らずして成佛得脫すといふ者ならば天魔の眷屬なりと說おりせ給ふ禪もその魔族外道なるゆゑ侍經分明より天魔を天魔とさ

していふ我が恐言と思ひたまふべいかはるやと雖じあへざれ半句も出ず我は進士太郎善春とて北條家の近臣なり朋輩四條頼基が聖人北門して勧れども受がいず今日はた不測の合戦よ脚る扶の法の緣聖おらためて教を受んと目禮し心と雨もやゝ晴し辻い正邪の別路いとまを告て歸りけり進士善春はこれより大師を信ずる心厚明暮些の暇よも御起室を訪まおちせおゝよ往日ぞ多りける夏去秋を呉竹を軒端を拂ふ昔さへて燈繁ぬそき有明がた大師は奇異なる夢を見ろなれしけり山も崩るるばかりの大雷の鳴いためき此庵室の茅の庇をうけぬきて其所よ墮たりと見るうちよ忽ち大氣朗かよなりけりと側の人おそれ御夢を語給ふ折うら下總國猿島郡能手の人印東郎次左衛門有國聖人よまをにまおらせたきよし育人とにぞ日昭師案内して席よ居らしむ有國恭しく初づきて我度々此地よ來り聖人の說法を聞事り其深妙の法華夜よ忘れがたく國よ歸て妻よも語らひ一人の男子吉祥といふ麿を徒弟よ附んと遥々此兒が携來ぬ此兒は法弟日昭の姉なれば伯父甥といひ法兄弟宿世奇特の因緣とおぼし願ひよ任玉ひぬとありければ日蓮大士悅たまひ雷の墮さりと夢見しその席よ處とりいらず吉祥麿ゞ座したるも正しく此兒の徒弟となるべき瑞相あらんと其儀御側はさ老僧せたまひ天朗ありし夢に因みて日朗と名付給ふ此明齡十歲よありなるが常よ大師の御膝近く事へ來り給仕のいとま手跡學問を勵むこと一方ならず見えよなり

日朗聖人い寛元三年乙巳四月八日の誕生よして幼少の時より外柔和よして内よ勇猛の氣を含まかりろめよも他の童と交り遊ばず稚なくして猶年高たるハの如くありけり大師御一生の間よく事へて孝行第一と喚れ玉ひ大國阿闍梨といひ又筑後公と稱す大師滅後三十九年元應元年庚申の正月廿一日よ示寂す御遺命お依て松葉の谷よ茶毘一阿猿島の山の頂お葬る塚れ上の松を墮涙の松といふ此地い文應元年宗祖松葉ゞ谷よ煉討よ逢玉ひし時御身致かまたと嚴窟あり越中阿闍梨朗慶聖人ごゝよ寺を建て猿島山法性寺といふ日朗聖人よ九人の弟子ありて世にあれを九老僧と

で日像日輪日善日傳日範日印日澄日行朗慶の九人をいふ其うち朗慶師は淺原義宗の末子ありて日蓮よ下總國葛飾郡八幡ょ鄉若宮の里よ富木播磨守繼胤といふ諸侯ありけり濟和天皇十代の後胤よして本國い因州富木の城主たりしゞ今は此下總國若宮お住居し上總下總兩國よ知行を領し世ゞ聞ければ繁ゞる宿世の緣富木胤繼も折を得て鎌倉殿よ訴訟貫名が無實の罪を首解て本領安堵させんとのと久しく心よ掛られたれど天下よ非分の訴のみ多く政所の混雜に直出そべき潮となくろのまゝ月日を經うちよ貫名れ一子善日麿ゞ出家と成しを喜びたまひ我もと佛法師依あれば何卒あれを能出家よ生立し大道利生の聖人とをなさば彼の家を再興より百倍ならんと鎌倉の游學敢山の修行二十年の食料衣服贈る等ある同親は世よ棄られし羽拔鳥我ゞ子を裏翅もなく富木れ家より何くれと皆あれを憑まれしい龍よ水を施し火よ風を添るゞ如しかゝる大導師を養立し富木の大功實よ佛門の柱石とも謂つべしあくて日蓮大師はいふ〳〵鎌倉に佞法の志をさめ妙法の幟を一天よひるかへさんと思そのからあゝる重恩の富木殿よ一度此法門を傳へずば順彌八萬の頂より高かる恩を知らぬよ似たりと今年新月初旬あた武藏にかゝり下總國若宮の館よおもむきあくと案内を請ゞる生憎よ殿い今朝鎌倉よ勤の首途して船よりかしこよ赴き玉ひぬときゝて大師い本意あくは思せども時今已牌の螺角よいすこしはやあり便船もとたて御後慕ひ御船に追付奉らんとそあ〳〵お暇を告二子れ濱よ立出て船場はるかよ見やりたまへば高樓造の浮座船よい紅白吹貫の船印水色よ結樅れ紋の幕打廻し水手楫取は一樣の出立よ陣笠し樹拍子取て唄運船出後し地風よ冲合遠く漕出るを日蓮大師は檜の笠をさし揚て富木殿の浮船しばしと呼たまへば富木殿耳を聳て幕の人見よりかいまを玉ふおまゞふ方あき進長師あり〳〵れば彼れ僧これへと聲れした直よ小船よ迎來て目通ちかく招入たまふよ日蓮大師兩手を支へ膝で絶て久しき挨拶の詞眞中よ富木胤繼大師をはつさと

白眼ていくよ其方天魔破旬代其身よ入去年右衛門安房よかへり諸宗を堀り捨なすよしい諸よりれと閻定ぬ悔てかへら此事あげらとの年月衣食を贈り性根共恐き雖心を發ひ身立しの卵隠いつか汝を招寄百隠さんと思ひしも繁き公務にいとまなく今日のいまゝで過したり我日前お諸宗を罵り悪言なさば一殺多生の慈悲あれば細類れて乗んずといきき玉へば大師些か憶し玉はず富木殿しばし待たまへ法門ひとり語告さん本より殿の信仰深き北條山慈覚大師の邪流の法門紀の眼よ卑劣の秘を孕たるやうよ決耀と眞言とを習合せて法華經を穢し其上此法門佛の慈よ協ふやいかゝと佛前に七日共聞斷絶を願したる五日目の夜寅の時日輪を的として放鏑共弦音なかく鳴ひゞき白矢手を射て落じさうと夢ふ見てさてへ我が決佛慈よ的中したりと喜てろの宗流を弘めじ卿これぞ邪法の眼目なり釋尊の御名をば日輪とよぶろれも為ゐごを祖敬多聞は日共落ると夢よ見て佛の御入滅近けれと知又唐土よ經といへる國王は日を的として箭を放ちて其國を亡したり又我朝の日本とて日の御神を主とずあれを射ぬを高夢を思ひたる慈覚大師いよも正無よは孔子を定て悪魔の人たるならんと眞言と法華とは七段の相違る事を聞よ答へ語るよ聞じ眞言亡國の法理を説給ふよ富木殿は强りし拳れ張りるみ宿因 恒す後御懺悔太師よ深く愧忍を記たちまち眞言の珠數を切り今身よ佛身よいたるまで能持べき妙法の船の船のいと早く武州久真岐郡六浦共浦よ着船を五ひよ耳目を期じて立別れ給ひけるは日蓮大師は是より一心決定し名越の庵室を根城と定め日昭聖人いまた後嗣の任を身よひき受大師の御手を扶法前相越を教化して專制頭の法門を弘通おし給ひければ太法將軍宗い天魔の邪法眞言は國を亡す大悪法律い國賊の賊なりと聖は給ひ東法潛今の衆生の爲よは南無妙法蓮華經の外たゞかるべき正法なしと御經よ鑑かへし綴るへ也說示したまへば流るゝ水を蓋が如く眠る獅子を揺がおとゞく立つ人ふ僧俗男女無山の如く眼を怒らし牙を咬鳴白蓮眞

をそるもの狂氣の狂ひたる痴者ありと笑ふもの狂ひ阿彌陀如來の現罰いかゝるものとて石瓦礫古履雨ふられ御身よ當るを事ともせず諸宗無智道隨地獄と高聲よ喚はり給へい一人の老人ありまたの群集押わけて人の驚ぐを寄たりゝ御身は出家よあり打るゝが修行ならんやいと見者と悪ぶりよ眞言は赤き旗を建王城をたぐる事七年法道三國い面石瓦を擲うたれあゞら法華經を廣繁ひ又龍樹菩薩は赤き旗を建王城をたぐる事七年法道三國い面よ火印を當られあから佛法を弘む今末法の一切衆生五濁乱離よ心濁海を山と見西を東と心得る天地轉倒の濁悪世正法を廣る者怨嫉なくて協ふべきやと眞隠せば首を抱を後込を又一人の奇侍御出家よ物百さん儒道佛道とも法義あり往還よ佇立て其大法を説ことい非禮の振舞心得がたしと立ゝるを人間は座して食するゞ體あれども亂軍急場の兵粮は立て食そるゝ亦禮あるを知玉はゞやと返し難して打釘よまた立替てされば佛念卿の諸宗門浄土に立法なるをそれ好惡をいふ事は片腹痛しといひ語るを王侯貴人い皆在家の俗衆なり在俗何ぞ法の邪正を知召さん在家の衆よ佛法の邪圓邪正を教てろれを導くが出家の本業なる孝よと遂々よ說聞せ給へども道理を曲る邪智愚昧皆口々に罵りて果い崩るゝ人此出貴皆時に法戒はて、御題目高らあよ唱へつゝ御屋敷に立戻り給ふゝ日々の辻說法よ諸宗悪口の底を揚僧俗誹謗のひゞきを傳へ鎌倉殿昵近諸士の面々も此をきゝ是を見れどもいうよとやせんもへなく鎌倉一國の取沙汰區々なるよ建長寺此道隆禪師光明寺の良忠上人極樂寺の良觀大佛殿の別當隆觀その除多資寺長樂寺等をなおの頃道學の學たるく萬人の師依深き名僧なるが松葉が谷の日蓮ぞゝいふ痴迷僧が面白く諸宗を誘り往返とぞあれも一時の流行ならんと口よは嘲弄し笑へども心のうちよは胸焦れ腸熱し怨の劍を殺けるこれぞ宋法三類の强敵の一種にして僧聖僧上慢とて後年遂よ法難の大怨敵とぞなりよける其辻說法の古蹟小町の路傍よ日蓮聖人腰掛石とて今にろめ御い殘りけり今年乙卯も旋暮を庶元元年丙辰二月廿九

日の事なりけるか既に大雨大風吹荒て關東洪水おなじ六月十四日の朝天鵜が岡八幡宮の社殿鳴動して鎌倉中より鳴ひゞく其日の巳の刻おろ空より白鷺ほどのもの飛めぐり忽ち碎て火の車の形をなし大さ五尺ばかりなる絃を裂ぐ如き響して一道の跡を東西北方より飛去りけり白雲の飛星の前代未聞の吉凶多く四年このかた五穀實らず無便不順なりしかく寒中よしあたり傳へもそべて去る寅年より諸國より凶穀多く四年このかた五穀實らず無便不順なりして寒中桃櫻の花さき紫中却て雪霜をぬらせ田畑次第に痩損じかくてい人命いかゞ繋ぐらんと末恐しき世の有樣なりけり執權北條時頼も十一月飾をおろし禪門に入學て坊道崇入道と稱しろの子正嘉慶七歳なりけるを將軍の御前に於て元服せしめ宗時と名乘一族重時の次男武藏守長時をもつて補佐となし大事い皆時頼入道決斷せられける此頃青砥左衛門藤綱といふ奉行あり此人は始め眞言宗に僧なりしが佛法い偽り多きとて廿一歳の時還俗して廿八歳より鎌倉殿に奉公し天下の政道あづかる常に細布の直垂に布の大口を着て問註所に出勤し朝夕の膳菜い乾たる魚と燒塩の外とゝのへず其廉直世に知盛なり上にい最明寺時頼ありて下には此青砥ありて四海の成敗上下の仕置道に當らずといふ事なしあのうへ世に疫災あくば世間に物いおもいじと萬人ひとしく上下の耳目をぞ斷ける時に日蓮大師い日々十字の辻に立て而強毒子に鼓をうち諸宗權門を攻伐王ふに珠數を切て降參せるもありいよ〳〵怒て怨むもあり妻の情じて夫に退れ子の師依じて親に怒らるゝも亦そくなからず折伏弘通のろの中に房州天津の領主工藤左近之丞吉隆御所勤番のいとま化導を受て檀越となるこゝに又池上右衛門太夫宗仲といふ士あり代々作事の奉行をもて將軍家に仕へ武州荏原郡千束の郷を領地に賜り池上に住居し天下に靈縄をもつて職とする者れ風命をあの池上に受ざるはなしこゝをもつて田園もたかに家富さかへ森秋師度鎌倉に出勤のいとま建長寺福雨山に入て禪學を修行しけるゞちかどろ名越に諸宗を惡口する僧あるよしかゝる者に近寄ぬころよけれとて途中にて大師の說法を見れば耳を塞て行過ける然るに此池上宗仲義を四條金吾頼基は親

しき友あり〻れば頼基種々に教導して名越に伴あひしが宗仲一度大師に目見えより涙ながらに前非を悔て受戒せり其弟兵衛志もとゝに檀越となる又池上の緣家に荏原左衛門義宗といふ人ありけり八幡太郎義家の曾孫にして武州江原を領して中延に住居し世に武名の聞ありて江原殿と稱す近き頃大師に師檀の契を結びけるか此家に先祖甲斐守頼信以來頼義義家三代軍中守護に八幡の神像あり一夜霊夢の神勅に依て大師に熱眼を願ふ後年に及び義宗の子鶴次郎といひしを日朗聖人の法弟となし九老僧のうち朗慶聖人あれあり此師中延に一寺を建立し祠を立て八幡宮を安置ま八幡山妙法道寺と號す今に中延に八幡宮とて諸人渇仰せりあゝに鎌倉炭賀川の邊に住居しき者ありて夙く父母に死別れ世に力なき孤獨に堪とき十六にありけるが宿世に植し種ありや深く大師を師依し奉り隱れ子なればかひなくてせめて世を早うせし兩親の菩提のため御庵室に炊ぎせばやと思ひければ其意にまかせ名を鶴王と呼いと眞實に事ゆゑ此時よいたり師依の檀越池上江原高木四條我も〳〵と供養を捧げ松葉ゞ谷の御庵室には朝夕の煙暖〻く法弟隨身に難も何一不足なく道心の中に衣食ありとかゝる事やいふ成べし又甲州巨摩郡波木井に住居ある南部六郎實長といふ人あり新羅義光六代に血統にして當國飯野御牧波木井三ゞ郷の領主たり性質篤實にして思慮明かに深く佛法を信ず初めて大師に相見舊來の機宗を棄て本門の大戒を受信力あとに勝れて一宗に卿き後年其の領内の身延山を大師に寄附したり末法萬年妙經流布の基を開きたまひし大檀那にぞ在しゝる

世法いもと佛法佛法本より世法なり天晴ぬれば地明かに法華を識る者世法にからん法華の信者深く此理を察すべしされば建長康元もきのふと暮今年正嘉元年丁巳に春にいたり四季に氣候不順にて四月の月蝕五月の日蝕ともに恒ならず同十八日海の潮泥にしたるこはいかにと思ふうちにろの夜子の刻大地震ろのうへ三月より此方雨一滴もふらず田畠潤乾て野に一株の草あ

くして六月加賀法印雨請七月鶴ヶ岡の僧正も雨請ありけれども一切に驗なく大地焼焦れて人間さへ命のがぐべしとも思れずありけるに八月朔日より地震ゆりはじめ同二十三日夜の戌時震のありさま地底しばらく鳴動するよと見へしか大地を揺揚たる事大凡二丈ばかり大名小名堂塔伽藍此差別なく其外町家農民の住居海邊の磯舎よいたるまで瞬間に微塵となり人畜ともに大半これが爲に命を喪ひたまふ〳〵免れたる人も傷つかざるは稀なりけり其山岳の鳴とよむこと雷のごとく大地は三尺五尺ひゝ破れて泥水を吹出し又青き火焔十丈二十丈所々あり長空に立登りしより百日ばかりの間震動止ず又十月十三日一天俄に五色の雲を撹乱す又いなる愛目をや見るらんと思ふうち鉾の如き電光八方に散乱し人の眼を貫ぬくばかりしばしゝて大雷鳴いためき禍雁陸子をうち外も又同十五日よも大雷地震おりかさなり打つゞく凶變は東鑑に載て詳らかなりこゝにいそ此大暑を述るのみかゝれば鎌倉をいじめた關東二十八ケ國農民は鋤鍬を取らず漁者い網を曳よしなき米穀諸色賣買の道絶果てよし天災を免れたるも飢死者ぞ多かりける日蓮大師は此ありさまを見そあはしてあきたゝび歎息ま近年の凶變別て今年の有様い時運よもあらず天災よもあらず全く法華經流布の時節なるを念佛眞言の諸宗門ろの大法の妨なすを天怒り地罰し玉ふよ疑あらじ此事を房州清澄南都の僧師寺下總土橋東漸寺鎌倉鶴ヶ岡と四度まで一切經藏に入てあれを考へ當たり今一度藏經を開て證據とあるべき諸經の要文を撰ばんと正嘉二年正月六日鎌倉を立て駿州岩本實相寺の經藏に趣きたまふ日朗師い御側さらず袱包を背に負て大師に從ひ奉りけり七日の夕月山の端よりくれ沼津の海邊に行暮てやどるべき方もなく俳ひあやしき茅葺の辻堂のありければこゝに一夜を明しつゝ今宵い七草の嘉辰なればとて香を焼て御經讀誦在しけるおぞ軒端に近き海原より龍燈しば〳〵往來して夜と亦還を畫の如しこれ正しく八大龍王護念の供養とぞ知られける此堂はもと當地此齊藤彌三郎利安先代妙覺禪門の爲に營む處なるが此龍燈の奇瑞を感じ明の朝山本重安と

其に來て大師に朝飯を奉りあ此日は強てとゝ止め參らせ一宗のこりなく受戒して御題目を唱へつれ大ひに佛事をいとなみけり

後年中老僧但馬房日賀山本重安が宅地を寺とし龍王山妙海寺と號しまた齋藤利安も家を轉じて滿松山妙覺寺といふ兩寺ともに今に毎年正月八日法會を修してむかしの武法をのあすとぞ

駿州富士郡岩本實相寺といぬい比叡山横川に屬する天台の寺院なり當山の一切經は智顗大士唐土より二部を持來り一部三井寺に納めたゝい治承の兵乱に焼失し一部此山に傳來を高祖大師あの經藏に入り玉ひしに當院の學頭智海法印はじめて高祖に値まゐらせたるに世に聞そるとは其人妹天地雲泥の相違ゐして道德よりく智解ひろし智海は恐れうやまひよき折柄ありとて磨訶止觀の講釋を願ふこれに依て藏經を讀玉ふいとま時々止觀の講論なし給ふに聽聞するとの甚だ多くして師依の心を發そもとの亦そくなからず就中當山に伯耆坊といふ所化ありて齢十四歳にい美濃國司橘善根が裔孫大井庄司此子として甲州巨摩郡飯澤の人なり母い駿州山井氏河合人道の娘ありこの母腹に白き道華を生すると夢見て懐妊し寛元四年丙午の五月八日に出生し頃此頃に黒子七ありて七曜破軍の星に似たり八歳の時兩親携て岩本實相寺に登り播磨二位阿闍梨律師の從弟となし此兒は我が一宗の豪傑にならんとて三井寺に上せ此頃母の身まゐりたるに依て其邊指よとて歸り來て當山に居高祖大師此容貌を拜し頻に隨喜の心を起せり學頭智海はやく其意を察しひそかに我が寮にまねきさて言やう我ふかく日蓮上人の大德を慕ひ願くは其弟子とありて慶をも採んと思へどもいろよせん三井寺より當山の學頭に附られし我が身の上は爲すべなし御身はいまだ若輩なれども末たのもしき器量なり熟世上を考ふるに諸宗の佛法皆末枯たり今出家の本懐を遂んとおもい聖人の法弟となりて一佛乘を學び玉へと懇に勧めけるゝ伯耆坊よろこびの泪せきあへず在しけるゝ此春の末高祖此慈父次郎重忠逝去ありしよし房州より皆來り大師あれを聞て哀感にたへず

髮をあゆて哭慟なし玉ひ三五日の程に飲食もなし玉いず嘆きは春もやゝ暮て泪をろゝぐ竹の枝力
おき身を扶々られやゝて鎌倉より飯り給ふあゝは彼れ伯耆坊に智海法印の計らひよてひそかは實相
寺をのがれ出漸く招提にて大師は追つき奉りその志願をれゝて歎きけるはぞあれを不便は思召と
もは鎌倉は携かへり名を日興と召れまた其母の夢れ綸をきこしめし後年百遍阿闍梨と稱し六老
僧と第三に列り玉ひけり

日興聖人大師入滅の後その遺命は任せ五老僧とゝもは身延山は籠り常在院を建てあゝは魂を終
り其後輪番は此山を守護なは給ひける茲は大檀那波木井六郎實長ある時身延久遠寺は詣で大師
の滅後はづりは七年樂盤食礎石苔は埋む實長歎息して六老僧は談じ玉ふやう此山を輪番は守護
すると高祖の遺命なればこれを改めがたきといへども法の爲山の爲甚だよろしき處はあらずそ
の故は當山は主職なし當番の主はこゝは居事旅の舍は居るが如き疎ずるとはいわらぬぞも各我
は寺の修復は心取れ本化栖神の靈場を年を追て衰ふる事ありしもやせん早く住持を定て萬年の
榮へを計るいいりあとはりれば各詞を揃へ法は出家は依を久住し寺は檀那は因て榮ふ波木井
殿は寺の永續を專一はする任なれば其義貴意は信すべしとありけるは日興聖人ひとりあれを承
諾たまはず法子檀越の身として師の遺狀は背く法やはある寺の盛衰は在家の御身等が預る處は而
らずと答へ玉ふ波木井殿甚だ不興の色を顯はし一座の老僧皆然りとす貴師獨非禮の言を述給ふ
はいいれはし今日より御身と交を絶んとはうければ日興聖人は法衣の袖を拂て立玉ふれより
時の當番日向聖人をもつて身延山は住職となしけるは又日興聖人はいよ〳〵波木井殿と中絶た
れば富木北企地上も自然貴僧を通ぜず大檀那四人かくの如きもは日昭日朗日向日頂日持の五人
もまは疎緣はありもき日興聖人は唯一人背くまじくおぼせども自然と身延一山は敵の城郭のや
うはなりゆきけるはぞ十月の初はつあた鰍澤は在して一通の書を認め下野坊日忍を使として波

木井殿はつあはし和談の心ありれども實長一言の返事はさへ及ばれずはゝは於て日興上人を
憤りは舍を房州北野郡保田村は後を隱し門を杜て讀經はし給ふと久し今の中谷山妙本寺ろは
古蹟なり上野殿の法の因ふかゝりければ後年日興聖人を迎へて大石寺を建立し又北山は本門寺
を建正慶元年壬申の二月七日日興聖人示寂す時は八十八歳ありり此傳はよく心をはめて見
るべき日興聖人は勝劣一派を立んとて身延は背きたるはあらず身延山と中不和はなりもきはゆ
ゑはのずから一派の流義も發れり誠は師檀の中間はいさゝか是非を靜てより平等一味の海は
別派は波を起したる事悲むべし願くは其末流を汲ん若又彼慢偏執の風を收め相互ひは平等大慈の
本源は根づりば眞如は法水從來靜ふ處なるらん若又彼と此とは黑白の相違ある別流なりと慕ら
ば高祖大師りぬて六老僧と稱して末頭しく御覽ありしは御目逸ひは日興聖人五老僧とゝもは二
十年來高祖の御側は在て法門を聞玉ひしは盧耳か塔中別付上行所傳の法理は何ぞ二三の別流あ
らん廣く考へ深く察して一を一と信じ不二離訶衍の佛海は歸入し現當の大願を滿足せん事佛門
の肝心はらんかし

さても高祖大師は旅裝をとゝのへ玉ひ日朗師を將て房州小湊におもむき慈母を慰め切嶺の青葉
摘とりてろゝぐ泪を手向卿御經讀誦いと恐に百ゝ日は佛事はてゝ鎌倉はかへり玉ひけりいづくも
打つゝく變災は人の心も驚りいて年々五穀登らずして淺ましき事のみ多るは今年八月朔日颶風
洪水は年命は死するもの數をしらずおなじ其廿八日の夜は災厄といふ惡星いでゝ一天の星も
は光を奪はれしかのをならず狂星長さ四丈ばりあるゝ乾より巽の方へ飛わたるろのひゝき山岳
は鳴響くはれより諸國大飢饉ろはうへ疫病流行し萬民なゝきの中は今年もくれて明れば正元元年
の春歳ゐらたまれど慶き祝ふ歟とあゝ國中民は食盡てそのうへ疫病いよ〳〵はゝしくいさゝあるも
手脚の協ふ者は病頻ちひあがらも籠を提鍬を腰はして野山をさまよひあるも木の皮草の根をせゝ

りそれを咬あゞら倒れ死するも多かりきまさ歩行叶はず家ゝ居者い飢ゝ苦み病ゝ惱ゝ泣呻吟親子兄弟夫婦の間ゝいさゝあの喰物を得れば互ひゆゆづりあひ其大切と思ひ最愛と思ふ人ゝまずすゝたて喫しむるゆゑゝ情ふかく實ある者い其家ゝうちゝも人よりいやく命を喪ひ多る荒原義宗名越の御裏室ゝ來り高祖大士に物語やうけふしも村岡の邊りゝ通行あゝり咽喉の乾きたるまゝ水を一杓貰はゝやと或る農家に立入たるゝ主翁とおぼしき五十ばりの男壁ゝ倚かゝりいと惱ましげに見へければ流行ゝ病ゝ苦しみいべるやと問ば頭をうち掉て九旬あれかた食料ゝきいて煤ゝ蘭ゝ喫つくし壁土をさへ口ゝ含み玉い食たへ廿日あまり妻いその趾ゝ下ゝ死てあり土間の曲竈の下には弟の死骸もありろゝ亡骸をさへ取歛むべきをべなしと泪を拭ふ袂さへ手を揚かねし蟲ゝ氣息納戸のかたをさし覗けば同やらん古葛籠のうちゝ搔むしる物音するゝぞあれい何ぞと尊ればされば とゝ五才と七歳とある男子二人ありゝ妻は夫をいたはるとを已れい食すふたりゝ兒等にのみあたへつゝそれゆゑ早く死したりき五七日あのかたい二人の兒童も聲泣嗄し慈母い何處ゝおいしたるぞ爺さま早く物食して玉ひぬと此世からある餓鬼道の飢ゝくるしきたへかねてや兄弟たがひゝ掴合頰先手脚ゝ嚙つきて血しいゝ染るありさまゝ眼の當られぬ振舞を今い見兼て兄の方を櫃ゝ入弟を古葛籠ゝ入見給ふ如く繩もてからけをきたるは千代とも祈る我が子さへ早く死ねかしと願ふのみと涕をゝゝりて物がたるを聞きあいれさやるのたなく腰ゝつけたる一袋の乾飯をとりいだし彼の主翁ゝ向たへたるゝ主翁いこれを押戴御志は嬉しけれどとても生あがらふべき親子が命あらぬを今あまじひに食物を得て一時なりとも生延あば又一時の憂目や見ん酔し玉とさし戻しぬさて恐ろしき事あなと歸る途中の噂ゝもいつぞやより京都ゝ人を喫あといじまりて新ゝ罪りし墓を獲又往倒れたる人の肉を喫ふよし此頃鎌倉ゝも移り來て昨夕巨穀坂の墓所ゝて死人を喫ひ居たる者ありと取々人の語りにべるとありければ日遵大士も其ゝ哀れを備して御法衣の袖を絞り玉ひきれ

ば末法法華經の弘まらせ玉ぬべき時節あるを諸宗の邪義ゝ障られと正法の立ざるを天怒り地罰し玉ふなりいでや此事訣を鎌倉殿に訴上ん上一人此事を辨へ玉ふ程あらば下萬民の幸ならんと一番れ書をつゝり玉ひ正法を立て國を安くする義を取てこれを立正安國論とぞつけられ兼て前年京都ゝて圖らず面會ありし比企大學三郎能本の近き頃鎌倉ゝ召くだされ備道ゝ天文を兼て御所に呢近し大士とは師檀の契爰にらざりければ幸彼の安國論を大學三郎に見せて文章の違續文字の誤過をしべら玉ひ一り例せば天台に徐陵あり妙樂ゝ梁肅あり傳教ゝ眞綱ありて其時の賢傑の備者佛法を扶翼たり今高祖大聊ゝ能本ありて此安國論を校正しなるもみあこれ三賢諸天此所爲とぞ知られゝる

大學三郎能本の住居せる比企が谷といふい去る建仁三年九月二日父判官能員北條時政の爲ゝ滅亡ありし其舊地なるを拜領し文章博士をもつて世ゝ時めきしが前年比企落滅の時庭前の池ゝ入水して果たりし姉濱岐の局の靈魂猶得脫せず祟を爲とて此所より此地ゝおいて一日順寫の法華經ゝ供養を遂らる大學三郎を亦法華堂をいとなみ高祖大士を請待しを佛事をいとなみ妙本寺となり局の靈を蛇苦止大明神といわひ祀り玉ふあれ比企が谷法華堂の始めなりこれより妙本寺となりを二百年の後當山ゝ檀越佐竹常源入道家督の專ゝ引いを管領上杉憲定と合戰し佐竹入道此山ゝ楯籠り應永廿九年十月三日早天より軍始り其夕方上杉方より燒草を積て寺に火をかけ既ゝ堂塔灰とならんと見る内ゝ非戸ゝ中より一道の白氣立昇り忽ち震雷霹靂し大雨篠ゝ衝が如く燃へ立柴もたいちゝ濕りて火は消かり此時黑雲の内ゝ大象をを呑べきほどの大蛇紅ひの舌を閃々とひらたかし火炎を吹と吐出し伽藍の燒亡を驚るを見けれは兵士ども畏恐れて逃失けりあれは去ぬる弘安三年日蓮大士認め玉ひし十界の本尊を此時ゝ住持日行聖人此兵亂ゝ灰となるべきを悲しみあの井桁ゝ裏ゝ隱し玉ひたるゞ此彼本尊の不測を現したるありこれあゝ蛇形ゝ變陀絵と世ゝ

言傳ふ本尊紙中長三尺二寸廣二尺三寸七分今より比企が谷に現存す此時佐竹常源と大藤の分十三騎釋迦堂の前に切腹して相果けり此等は祖傳に預らざる事なれども比企籠場の兵亂また本尊蛇形の曼陀羅の利驗によつて茲に附す

今茲正元二年の春疫病愈々止ず二月十四日十五日の兩日日輪の色赤き事血色物に色皆紅ひに見ゆ日蝕月蝕時あらずして度々あゝ一天湖海りて日に色さへ定ならずこれは世べて去年よりの日蝕月蝕時あらずして度々あゝ駿州富士郡上野に領居する南條に滅する時節にや成果けんと人々生たる心地せざりけるあゝ駿州富士郡上野に領居する南條兵衛七郎といふ人あり北條時政に親族にして駿河國を大半に支配なし世に上野殿と稱して輕からぬ家柄なり上野一門はもと岩本實相寺の檀越たりしが岩本に一山舉て高胆大師に歸依なすにも上野殿をあれより大師に師檀の契りを結び深き信仰し奉りけれども國中の政事にいとまなくして度々高祖に遇奉るとあたく唯時々布施を捧ぎ衣食を供養してその厚志を感されければ高祖も又其間暇なきを察し文通を以て節々御教導ありなるなり又日興師に本岩本に所化たりし時より上野殿知已ありければ折に觸ていに我が邸に關待し高祖に見ゆる心地して聽て教化を受玉ふ日興師も亦其信力の厚きを喜び自高祖に御側に在て朝夕明つる門法を遇々に書といた上野殿へおくり玉ふ世に此を日興記と言傳るなり時に文應元年庚申の七月十六日高祖大師に奉行宿谷左衛門尉光則が邸に推參ぬ拙僧に御府内名越に住居なす日蓮といふ者はべり近來つゞく天地の變異一代藏經の說にかゝて當世日本國をうつし見て審認たる立正安國論といふ一卷の書なりあれいさゝか國恩に報ひ奉るのみ願くは前執權時頼公の賢慮に備へ玉れと其書をさし出されば左衛門光則請取頂て所に御出仕なし此書披露に及びたるに將軍の御前におゐて北條一門をはじめ諸侍侍衆に侍讀學士比企大學三郎を召てこれ書を讀しに玉ふに將軍の御意に曰く國は法に依て榮え法は人に依て亡る近年ちちつゞき起る天變地妖は末法應時の法華經諸宗の惡義に利益なきにもれずお正法誹謗の

如淫く諸天善神は此國を棄て守らず惡鬼國土に充滿をゆへあり金光明經に正法に背くに其國に七難おこると見へたり其七難の中五難いまだ起らず其二難とは此國に軍起ると異國より此國を攻るとの二なり又藥師經の三災すでに二ツ起りてなほ一を殘す兵革亡ぼる近きにあらんこれ我が言にあらず釋迦牟尼世尊金口に佛說ありとぞ書たりけるに時頼はじめ並居る諸士も一同に顏見合互ひに詞もなかりけり北條時頼此書を見て甚いたく快よかりず同廿四日高祖大士を我が邸に召寄東の壺に喚入をまづから對面有て宜やう今度一卷の書を差出し天下の政事を侮り萬人の信心を惑はす邪出家沙門の所行にあるべきやと仰ありければ大士答てむかし周の世に殷紂淫婦あり我が機杼を織ずして周の天下の亂れんとせしを樂じ頻ひし老婆心左傳の昭公廿四年に見へたりぬ況て天下の安危は佛法の邪正に依あれを告さずば出家の本業に違ふに似たり抑も法華經は正法の中の正法にして諸經に優れて在すあと一切の江河の中に海の第一なるが如く一切の山嶽の内に須彌山の第一なるが如くまた一切の星の中に月を第一と仰ぐが如く暗に燈火渡りに船營へば高十六万八千由旬の須彌山を堀凹めて硯となし大千世界の草の葉を筆に結び大海を硯水としてあれをしるすとも盡つくし難きの法華經の功德なり然るを諸宗の經々に其廣大の利益をおし塞んと邪正混じて明白ならす願くは公深くあれを察し玉ひはやく念佛眞言禪律の諸宗を亭止しを我が一乘法を信歸依ならば四海の太平とおらんこと掌を反すよりも速かおらんと有けれは時頼面に怒りをならいし一人の詞を信じて何ぞ三國傳來の諸宗を破らんと中啓取て立揚りて御うち拂て入玉ふを高祖大師に御離たかく若我が言を御用ひなくば自界叛逆難とて御一門に同士討はじまり他國侵逼難とて他方の國より此國を侵さるべし其時腮を嚙給はんずと呼へり給ひしに各近衆愚從の面々もなほ惡ろしきことをいふ日蓮かなと面色かはつて見へけるあれ天下騒

言のはじめなりあれより忠言耳に逆ひ北條時頼同軍時ともに高祖大師をふかく忌憎み給ふことゝいありぬ上一人の心下萬民おおしうつり彼の名越の日蓮坊いまは北條殿も疎んじ玉ふときく討殺したりとて咎はのがれじ阿彌陀如來は怨敵目に物見せんと百人はかり手に〳〵得物持搆ひ名越の御庵室へ押寄たり時に八月廿七日今宵は當る庚申帝釋天へ法樂せんと大師い暫し御經誦唱し終り月もや出ると道戸細目に押明て東の空をうち見やり給ふ折竹縁づたへ白き猿大師の御袖をしきりに曳なればあい不審と思しながらも何ある事の諭しやと彼に引かれて往給ふに路いと暗き山つゝき東をさして七八町山王堂より奥まりたる窟の洞に入來る大師西の方を眺め給へば我が庵室おぼしき邊りおびたゝしき物音叫の聲猛火烈々として天を焦しければさては我が庵室い燒失するにやと思しける此夜は庵室には人をくおくして進士太郎善春と能登坊と唯二人ありけるが念佛禪の諸門徒ども日蓮を漏すあと聲々に喚かゝし松火を投懸々々燒討にぞ進士善春刀おつとり抜はあし無益に殺生おすまじと當るを幸ひ胸打に蹴倒し蹈臥る能登坊を樫に割棒はやうち折て近倚敵を捉捕へ曰よりを高くさし揚て丁と投たる人礫討手に雜人のあはじと皆いづくへか逃散て夜はほの〳〵と明るける高祖大師い人しらぬ岩窟のうちに御經をよとすまして在しけるに不測や猿のうち群て柴栗榎茸子棚の實ならんとかいるし〳〵手折もて供奉し來るにぞおもいずこれに飢を忘れこゝにおくれ給ふあと三日の間後年此處に寺を立てば猿畑法性寺とて今にその鎮場をといめけり其頃鎌倉市中に日蓮名越に燒死したりと專一風聞せしとやさても富木播磨守い怜悧たる家來をつのはた大士の在處を探り索め漸く山王堂の山奥にこれを尊當りに手を取てひろめに下總國若宮の館に伴ひ參らせ富木殿ろの無事を喜び尊敬日頃に百倍し邸搆のうちに法華堂をいとあみ茲に法筵を開らき家門一族のこりあく大戒を受奉りこれより日々の說法教化の外他事わらざりけりけふまも富木の法華堂に來りて受戒せし曾谷入道教信といふい代々越前の國を領し當國曾谷に

居住す此人佛緣淺からず日を追て大法を證得せり二人の子あり嫡子は四郎左衛門直秀といひ次い女子に芝崎と呼ぶ生長して千葉大隅守胤貞の室とある兄弟ともに大師に化導に預り淨堅固の信心者にぞおはしける

曾谷教信後年身延山に登て剃髮して法蓮日禮と名を玉ひ家に歸て法蓮寺を建立す永應四年辛卯五月朔日八十歳にして示寂す嫡子四郎い衛門直秀家督を繼て信力父に劣らず妹芝崎い父存生の日典和地藏堂を本化の寺とし日朗聖人を請して開堂ず長谷山本土寺といふ夫婦大隅守逝去の後尼と成て妙林を號し其居宅を寺となして禮林寺と名づく兄四郎右衛門は後に山城入道道崇と云其子典久末子を大師の法弟とす筑前坊日合あれあり山城入道その日合の爲に千葉郡野呂の郷を寺となし妙典寺と號す又平賀六代目福も入道れ孫なり曾谷の一族本化の宗を信じたる事斯の如し

高祖大師法華堂に在を日々の說法夜々の講談老若男女取交て聽聞するものいと多ありける中に當國白井の住士秋元太郎一座の說法いまだ聞終らずして數珠を切て改宗す又柏井村に鍋阿彌といふ念佛者ありしが念佛無間此法門を難じ來を一言のもとに念佛を捨て法弟となる名を日唱と賜ふこれまでの念佛を言渡んとて眼を据拳を揮り强情に題目を唱ふ其夜夜となく晝となく一村に響くこれに依て首鳩坊と呼給ひしなりその子も亦法弟と成て日恩といひ父の家へ轉じて寺とす今島山唱行寺これあり斯化導のその中に此所より一里ばかり去て千足といふ里にありの地の人なりとて年闌たる婦人日に〳〵來て聽聞するに日我が法名を御本尊を請大師本尊を請て法名を妙正と與へ玉ふ夫婦喜んで踊りなる其郷の人をあまた茲に居たれどもその婦人を見知らずとてあやしんてろの後をしたひ覗ひけるに千足村の池に入て見へず本尊は池の邊りの櫻の枝にかけたりこれより奇異の事也とて祠を建て妙正大明神と崇た今い妙神とて疱瘡の守護神と仰ぐゝる不測を語

りつたへ參詣群集せろの中よも大田左衛門　乗明は人躰重く身分いやしからす富木の内室に此太田乗明此姉なりければ日々あゝよ在る大師此化導を聽り粗ろの宗意を辨へ師を歸依するあと大方ならず嫡子太郎を剃髪せし此法弟とも師此阿闍梨日高あれあり

太田乗明老後よいたり夫婦別々此家よ住んで五辛を食せば肉を喫す法衣を着し袈裟を掛たりとれよ依て高祖も常に聖人と喚び玉ひ其宅をも直よ本妙寺と號せらる弘安六年四月廿六日よ寂す栴檀の林よ雜草なく須彌山よ近づく鳥は皆金色なり貧谷救元太田をはじめ此法堂よ入て邪宗を棄て正法よ歸する者其數を知らず教化の果敢ゆくよおもゝず日數を重ね玉ひ峰の木枯吹絶て霜爽わたる庭傳富木胤繼ゝ法華堂よ入り來り優曇華の花咲き勾ふ千歳の一時御說法も既よ昨日は百座に滿玉ひぬ鎌倉名越の御庵室を去ぬる八月燒討の後番匠左官を遣はして今ゝ漸く成就なきたりと今朝しを鎌倉より告げ來りぬとを御入在て大法弘通なし玉ひ法弟も極越も待わひたりと聞はべりぬとありるにぞ高祖大師はろの志意の淺からざるをよろあび其日鎌倉よおもむきかゝり再び本化折伏の幟を颯し玉ひけり

富木播磨守胤繼ゝ性來書を讀ことを好で篤く佛來を信じ日蓮大師いまだ遠長たりし時より衣食資財を見繼て學問修行をはげまし給へり實よ末法萬年宗門第一の大旦那なりあゝをもつて日蓮もし上行の再誕ならば富木殿は無邊行なるべし父を盛よするものは風なりと遊ばしたるは此ゆゑなりけり百座說法の道場ゝ寺と成て正中山妙法華經寺と名づけ大師手づから彫刻わりまし一尊四菩薩また鬼子母神を建て本尊とし大師を開山とし富木胤繼は建治二年の夏身延山よ登り大師の御手を勞して剃髪し名を常修院日常又常忍と號を大師入滅の後初て袈裟をうけて中山第二世を繼大師御在世の時あぬて此人の志は堅固なるを知召て一切此書類は多く此家よ傳玉ひしゆゑ今此山よ納るに高祖の直筆一百餘通に及ぶ靈末來門外不出と定め今猶其捉を藏る在世の時

より六老中老とも富木殿は敬ひ見るあと大師よあはらず正安元年　己亥三月廿日八十四才にして示寂す中山三代日高四代目祖聖人此人は當國佐倉の城主千乘大隅守貞胤の子なりこれよ依て佐倉より當山よ寺領一萬石を寄附をこれより寺門盛になりもき關東關西來山來寺五千七百餘ケ寺よおよび今よ遵和として日常聖人此餘光宗門みかいやくあと仰で尊び敬て信ずべし

國よ道ゐり法よ傳へゐり我々神國此道の學びといふゝ京都吉田殿二位兼益あれが長上たりあゝよ吉田此御神領武州都筑郡恩田御厨の代官益行といふもの年來日昭聖人と交り厚ありけれ高祖大師これをよき紹介なりとて益行の吹舉に依て吉田家よ門入なし給ひしよ兼益一度詞を交へて大ひよ驚き日蓮聖人ゝ一代藏經の才覺を極たる異人なれ三十二尊の神號より神祕口訣の相承殘るとあろなく傳へたるよしは二位兼益の筆記よ寄詳なりこれぞ法華勸請よわらされば諸神ゝ利益なしといふ日蓮所立神道の根元なり此頃高祖大師ゝ折伏弘通の鋒尖するとく愈々諸宗を攻あびけ俗男女落隆て徒弟となり檀越となるもの日を追て盛なりさるよ北條陸奥守重時諸人の鋭首を信とし大師を恐む事甚しけれともいかんせん今は遁世の身此上なればとて徒ゐ牙を咬でおわしけるが執權時宗幼少よ付き重時の子長時天下の政事を補佐する日となりければあれぞ能き時節なりと重時ひろゐよ子息長時よこれを談じ時ゐ弘長元年　庚　酉五月十二日此朝毛笠小路此辻よ日蓮大師を召捕へ問註所の吟味を遂ずして情もなく山比が濱よひきをてゆき船ようちのせ伊豆の伊東へ流罪とぞきゐへゐる江原池上進士等の檀越も我も〳〵と驚き聚まりてゐりけれどもはや嚴重の四人あれば番の兵士等うち振四邊へ人を近よせずゐゝる處へ日朝聖人あ此日北金か谷よ在しけるが斯ときくより徒跣よて由比が濱邊に馳來り玉ふよいまや御出船と見へければりよゝき腕よ縋を引とゝ此我れゝ流人日蓮が弟子の日朝よゝべるゐし我をも共よ同船させて玉ひねと聲を限りよ宜へば船人いかりの聲あらゝげおのれ青道心奴大切の御用船よ狼藉なさば目よ物見せんと持たる棒を振揚

諸宗門の惡徒等
松葉ヶ谷の
卷室を燒討ち

て綱を絶りし右の手をいつまとうそぶ日朗聖人なにあはしやしもこらゆべき一聲わりと叫びつゝ磯の渚を打とへられ其儘動と倒れ玉ふ餘處の見る眼も中〳〵なるはれ果あきれりさまあり日蓮大師は船梁を立揚り官人の衆中を彼は幼少より我が弟子なてしばしも側を離れざる不便の者を侍べるかし何條一言の暇を告させ玉はれと會釋をそ此方を向ひ日郎々々と御聲高く喚玉へばその幕れしき御聲を耳を入てや泡揚り御船に来た出ざりしかるら嬉しや南無妙法蓮華經と合す掌も有い折れて片腕わかて泣入血の涙大士も臉しばたゝきいりを日郎日頃の教化を忘れたるよを今末法を御經を弘れば杖をて打れるい又遠く流罪を成べしと法華經勸持品を說おかれたる北明文二千餘年此今日唯今汝い打擲れは流罪如來の金言遠はぬうへい廣宣流布も疑ひあし頓て救免の時を待て再びたぐり値までは法の御爲ろに身を愛せを此地と伊東い西東八重の潮路い遠くとも朝日東天を登り玉はゞ日朗鎌倉を在とおもふべし月西山に傾くを見る時日蓮は伊東をありと知れさらば〳〵と念珠を摺此經難持若暫持者と寶塔品の偈文を唱玉へば船は波をもられつゝ一聲高く一聲は低き一句い伸一句い縮り波は間を〳〵遠ざかり沖合はるかを漕出れり磯依の男女跡身の法弟遠島口同會を御題目を唱へつゝ袖をあをならぬ磯際を袖しぼりつゝ見送るうち汐風吹たつ朝潮を御船は見へずありをけり日朗始じた弟法檀越御名殘の幕はしくて御船をきこえし此經難持自然を節づく御經をその節を唱へ登へ沖中節の此經難持とて今の世までも傳へ〳〵り斯て御舟い西をさして走りけるが程あく西風吹起り潮と風とに立合ば逆怒波をおしきり〳〵ろの日の申の頃伊豆北岬を近づきけり船中の宮八大士を向ひけふい生憎風ゐれて舟の退退自由あらずゐれ見給へ彼處の揚き戊りこそ伊東の浦を侍べるかし此處の磯傳ひ程近けれゞ歩行玉へと船よりおろしまゐらせ鎌倉さして走りさりぬ大士いろ〳〵る蒼海の舟をゆられて御心惱しく嚴を腰をうちかけて見やりをふを往べき伊東も程遠く嚴石嶮々と横さわり苦なめらるを水草生岩をせあれてうり涙ば白蛇れあけり狂ふ

を似たり大師は御聲をづかを題目しをはし休らひ玉ふ折ゐら蓋の一聚のさゝ小船竹の子笠を蓑襲して檜拍子高く漕ぎ來り大師を見を大ひゐ驚き御供い天より降をおいせしか驚を捕れて來玉へるあれい伊東が岬の魚網岩とて磯横別れし離島今さしをつる上潮時この荒昔い汐をちて頓て隱るゝ波間の巖石あな危ひかあと舌を巻ての物がたり大師はこれゐ應答して我い鎌倉の日蓮といふ僧なて伊豆の伊東の流罪の身なるが爰ゐ追揚給りもい死ば死ぬあし活とても活ゞひもなく鎌倉ゐ忌憎まれし者とおもひ非のおとく樂たるあらんと語り玉へば何おもひけん漁者は小船を岸をさしよせ我いあしあの川奈といふ磯村を彌三郎とて日を〳〵此岬を漁業しを世を渡る者なるが今宵は亡母の十三回忌の待夜をゐれど佛事はさそおき此風の荒吹を命を的の殺生もあさねば協いぬ業報人御供をたそけ參らせあばせめての追善いざこの船に召れよと御手を取て船をうちのせ乘り人顏不分灯ともし頃おのが伏屋の背戸近き邊りの岸に船さしよせ妻の名を呼立れゞ妻を戻りの遠きを案じ紙燭ともして走りいで舟のうちを大師の在をを見てうち愕くを夫彌三郎爾々ありと宣さとす話半途を灯を吹消し今日とも村の庄官より流罪の出家を暗依かさば辛き目見せんと觸たるはと耳を口よせさゝやくをを彌三郎も心得て人に知れていゐしあろなんとひそかを我々家にしのばせ乘きり妻もとも〳〵聽走を手水洗足何くれと足はぬかちの疲世帶心ばりの夕餉を供奉し掛て見かく也嫁納戸のあさを休らはせ乘りあれより夫婦は人知れず大師を教化をあづかり玆をかくまひ供奉ゐるあと三十日餘り高祖もふのく感したまひ男はさとゐるべき事なれど婦人の身として我をあはれみ何處を米の乏しき時節なるを久しくはなくみ玉はりし事いりの世をあ忘れいべらん定たし我が父母は伊豆の川奈に生れ來り玉へるかさらずばいかで鎌倉殿をいを恐なれ天下の人を嫌いれたる日蓮ををくまで信仰あし玉はんやとて御涙をハもをよろこび玉ひけり

大師船より上陸たまひし處い嶮れゞ浦とて伊東より南二里その磯を今日蓮崎といふ小田原北條

衆臣今村若狭守この地を領したりし時初めて堂宇をなむ寛治二年江戸大久保の日蓮師これを寺とあして海岸山遮那寺と名づく今は越後本成寺の末寺なり又川奈の漁見ヶ浦を去事一里餘彌三郎姓の上原と云大師は舟守と呼玉ふ其跡寺と成て船守山遮那寺といふ遮那寺彌三郎の法名なり

雨あらば宿もかるべき夕霧の霧よぞいさく袖ぬらしそ

今日本國に佛法渡て七百餘年念佛真言禪の諸宗似て非分ある如法の瑞氣いつしか上下萬人の骨髓に染徹り今正法は法華經弘まらせ給ふべきを悪み嫉むと雖へば爲は蠅を嫌ひ蚊を憎の日の光りを見るゝに似たり其上鎌倉に於ても御府内を憚りあく名越の御庵室に火を放ち夜中猥雜なしたる無法人あは何の怨讐もなく正法弘通の高祖大師をば遠く此島に苦しめたるゝ世界不測の改道なり日蓮大師彌三郎夫婦お酷り玉ふやふ傳へきく一向門徒の親鸞上人は一流をたて妻を妻として色慾あく肉を食まて貪欲なく堅く誓戒をあゝろさそあれを清淨の梵行と名づくるはとて三衣を身に纏ひながら肉食妻帶を裏輔とを釋尊一代の聖教よりつて例あき魚鳥を啖ひ妻子を養ふ法外の僧れ却て萬人れ歸依をうゝ又身に一分の過失なく唯一切衆生を救わんと願む日蓮はかゝる責に値へり天れ地をあり隨い海となり子れ親をうち家臣れ主君を害り轉倒乱離の世なればあそ今悪鬼國に充滿志賴ヶの凶徒有て五綱登らず悪病も流行セ此うへいかに成ゆく世なるらんとわりければ彌三郎もさしう門むき斯おそろしき過世おれ御題目の外頼みいならじと夫婦念々信心をはなましけるこゝに當國伊東の領主罪司八郎左衛門朝高五月の中旬より流行の瘧病に犯され既に正氣を失ひ見る目いぶせき大病に醫藥祈念れ驗も見へずはや命の際と見ゆるに此伊東の親族に紀部正清といふ者あり深く事を待ふるに此國へ流され來りし日蓮聖人鎌倉殿へ歸えりさることなれど其弘る御經は法華經といふ尊き御經なりときくろのうへ不測の名僧とて御府内に信ずる人の多しとそいふなるあはれ領主の病びを救ん事を願まはやとそ

づあら大士に見へ來りろの願念を聞ひければ大士聞うちひそと宣ふやう御經文にもし正法の妨なさば其頭七分に破くべしと鬼子母神十羅刹女の誓ひあり今その緋餝正法の罪を憎んで諸天の怒り甚し我祈るとも悔べしとも覺へずと辞退なし玉ふを正清強て願ひ奉りければ六月十七日伊東和田の郎お入玉ひ朝高の枕邊に坐して讀經なし玉ふに三日よして正氣にかへり五日よして病ひ大半に除く朝高正清を始め妻も族もろの奇特に驚き奉夜聚て題目を修行セ朝高すでに本復に及びければ我が命れ聖人の賜なりとて大王を仰ぎ奉るあと大方ならず或時朝高聖人は何を持佛と成玉ふやとありければ久遠の釋尊なりとそその法門を論し正ふ朝高よろこんでいふやふ茲に一つの妙あるあとあり前年よりあの伊東が崎北海上に夜々光明を放ちたりしゞ一躰の佛像を漁者れ網に曳揚たりあは阿彌陀如來なりとし近郷集りて念佛せりしかるにろの頃熱病諸方に起りて死セるもの多し彼の佛像れよく見まあらすれば釋迦如來なりければ村中の者呆れ果て熱病れ流行ゝ此佛の所爲あらんいまはしき佛あなとて我ゞ方に持來りぬ我れも生氣味わろゝれど地頭れ任に預りおきぬあれを聖人にまあらせはやとて腰うち拂て大士に渡し奉りけり高祖れ御法衣の袖もてこれを受取おしいたゞき拜し玉ふに相好微妙の釋尊の立像にあらゝれば尊ひりな久遠の本佛久しく苦海の海に沈んで在したるを今末法第五の時を待て光を放ち出現ありしれ正しく法華經の弘まらせ玉ふべき時節ありと御涙にあきくれてしばし自我偈の文を唱玉ひける識に久成の釋尊肉身の上行菩薩にめぐり値本地の世界に御對面ありし其師弟れ御喜びに本緒大綱の現證にやあらんといとゝ尊く思はれける

伊東が崎海中出現れ釋尊は大士一代の隨身佛に安置す八郎朝高ろの出現近き海邊に海光山佛現寺を建立す今れ總堂と號し大行寺妙照寺龍仙寺廣仙寺いづれも伊東山と號して其靈場を護る又朝高れ邸に寺と成て佛光寺といふ

今日暑き夏の日の樹の葉ふそよぐ風もあき来の所端にはし近く大士は夕涼して在しけるが庭の切戸ふ音づるゝ人ありけるよやと見かへり玉へば法つとし和泉よてゆくりなく内をたる江川太郎左衛門吉久種々は布施物もたらして尋ね来り絶て久しき面何をよろこび涙い近きところ〇かりあり て此非山といふ處に住いべりぬ近来聖人のこゝふ花をときゝむのし懇しく勧たてまつりぬとき あへければ大士もよろこび年来此修行路より今ふ弘むる妙法の深き法門をかたり玉ふよぞ吉久聞 んて御經を頂戴しこれより深く佛乘を信じ一門のこりなく改宗し時々此配所におとづれて供養を 捧げ王ひけりさても鎌倉ふ在ては工藤吉隆をいじた四條進士池上宗伊豆の伊東へ人を馳衣服品々 を送り奉つるあとひきもきらず日朗日興を折々うしあふ安否を訪大師の慈なきを言語て共ふ喜び あへりけり時ふ天台の僧大乘坊松葉ヶ谷ふ来て日昭聖人の法弟とおらんとを願へどといかふせん 伊東ふ流罪とあれば力なし一の徒弟日昭聖人は大師ふ代て法弟性越を数有ありければ大乘坊と日 昭師の法弟とあして玉へれと望たども日昭師は乘て思召す事有て元より弟子を取玉にず茲ふ聖人 の法弟あまさ有れば何れありとも御身撰をを師匠と頼を玉へとありれば大乘坊しばし御庵室ふ 止まり日澄より師と撰ばれさる日朗聖人の智德人品五百年の昔を今ふ察て最尊く思われけり

日朗聖人ゝ大師ふ別れ奉りてより猶その御名殘の忘れがさく朝夕山北ヶ濱ふいでゝ伊東の方を ふし拜を御讀經ありけるヶ或夜波間に光明かゝやき霊木の流れ倚るれば日朗聖人あれを得て手 づから高祖此尊像を彫刻し奉りこれを霊敬をること生身此大師ふ邪ふるが如く御飯を供し茶を 献じ丁寧が親ふつかへし無二の孝心おろろならず在るが時天感隠れ時いさり御敬免有て大 師鎌倉へかへり玉ひ此像を御覧有て汝が至心の餌ふて我精神此此像ふや入ぬらん伊豆の配所ふ 在時目ざろむ夢ふ日朝を聞し年いく度ゞやと慕び感じ玉ひけるとれ高祖大師の尊像を彫刻の始 めありあの尊像をどい武州神文谷法華寺ふ安置ありしが元禄年中故有て同国堀の内村日圓山妙

法寺日性聖人此時此寺に移し奉るしかしてより此ふさ現世救護の利益いちじるく世上ふ被むれ り又大士伊豆ふおいて伊東八郎朝高ヶ病ひを加持をるとを御したゝ此の護符を日朗聖人へ御相 傳ありしを此尊像ふ因をて今ふこの妙法寺ふ傳へ世ふ尾張護符を稱しを信心帰依の霊奇特をい のるもの多しあゝふ又日朗聖人の徒弟をなりし大乘坊日澄といふい相州小田原の人ふまて濱名 霊復守時成の子なり三才ふして父母を失ひ祖母の妙珍をいへるふ育てられ乱國の世のならひさ しもの大家も人ふ抑領せられ程あく家も亡びれば自ら髪を切て天台の僧とありて今本化の宗 ふ師も後元享辛酉年父母の郷跡を小田原ふたづねて妙珍山遠昌寺といふ一寺を建立せり又尾州 名古屋妙光山本遠寺も此師の草創なり

むかし前漢の世ふ千元國と云へる官吏てあて孝行の婦女を刑罪ければ天下三年雨ふらず又燕の恵 王人此諫奏を信として忠臣鄒衍を獄舎ふ繋ければ六月霜をふらせ一人此非道をちあくの如しいか まいはんや國のたゝ世のさたふ正法を弘通をる僧を流罪ふ處していかで其現報のなかるべき弘長 元年五月高祖を伊豆ふ流してよりいくほどもなく陸奥守重時たいならぬ病ひふ犯されて狂はし くなり其年十一月三日ふへなく逝去し其子長時また執權時宗も毎夜あしき夢ふのを魔れ重時後の 車に乘て泣苦しむ形狀も長時の幻現ふ見へ病ひならねど五体麻痺ぶうちさいいで何とをく物怖ろ しく髪へければ僧をあまた請待して一日五部の法華經を毒しめ其追善を修猶日蓮を殺しをへさ ずば悪ありをんと心ふ悔み今年弘長二年十一月十一日数免此狀を認めさせをありければ北彼と陸 る事ありてろ此年もくれ今夏五月廿二日高祖伊東の海邊ふ立て日天子を拜し讀經ありしふ異相の 人来てあの地もはや御名殘なりとて涙ぶして去りぬ大師あやしを思しをるふ其日鎌倉より知文を つたへて伊東ふ来る其狀ふ日蓮法師数免あるべきふし仰出る旨ヶ召返るべし家数久家 承る とぞ奇たりけるあれふよつて大師彼の地ふ人ヶふ別れを告て鎌倉ふかへり玉ひれば帰依の信者

とな〳〵御庵室に馳聚りゐはる〳〵よ喜びをのべ徒弟遍いづれも嬉し涙にくれたりける其夜人々皆燈燭のもとよ聚り三年このかた當地のわりきまをうたり大法すでよ關東よ輝き聖人の御本懐も大師さらよ開入玉はず今來法強盛のはじめより折伏を御願ひつて宗門の御教化をあらまほしど口々よ謂めけれどよならず猶これうへい他宗權門を征伐せば三類の強敵いよ〳〵烈しかるべし其時ころ御經の利驗も現るべしとてます〳〵歓相あるりたり此秋八月廿四日朝より雨風烈しく人家を吹倒し山崩れて谷を埋め大雷八方に鳴はたたき由比の濱よは大船八十餘艘微塵に碎けるとぞ同十一月廿二日よいさしも賢哲のきこへありし最明寺殿あとし三十七歳よして遁去ありしかど上下の諸人親よ別れし幼稚よ等を世よ力あく見へにけり爰よ駿州富士原郷松野代邑主松野六郎左衛門といふ人ありし同國上野ある南條兵衛の通家なるを以て當祖大師の檀越となり夫婦ともよ師依浅からずありなるが松千代といふ一子ありはじめその母懐妊よ蓮華の咲を見て懐妊せり八歳の時四書を師玄生長に隨て十三經十七史諸史百家の書をよみよく文章をつゝり性質凡人あらず名利を物の數とせず出家とならん事をねがひ比叡山に登て剃髪しけれども彼の山は宗法心よ協はずとて本國よ歸り或時岩本實相寺よ遊んで學頭智海法師に此事を語る智海聖をひそたて今鎌倉に日蓮といふ名僧あり實よ當今は英雄あり我前頃この山の沙彌伯耆坊をすゝたて其法弟となしぬ今日は日興と改名して隨身するよしきゝぬ御身を佛教の根元をきゝたんとおぼさば鎌倉へゆき玉へとをありけるよぞ夫ころ近き頃我が兩親の歸依ある僧なれば因緣浅からずとて松葉が谷よ來り事は如來を物がたりけるよぞ大師も別を喜び給ひ遊華院日持と名を喝ひき此時廿一歳後年六老僧は一人よ加へられ能登阿闍梨日持聖人と稱したる英傑あり

秩野六郎左衛門本願として北地よ一寺を建立し日持聖人を開山とところの徒弟日敬日圓等は其後

を繼てありなるが後年兵乱の為よ寺院殿堂し元和四年紀伊の屋室發珠院殿松野の地理狹小とて同國有度郡香が谷よ移し伽藍を再營あし玉へり今は貞松山遍永寺あれ也日持上人は高祖大師入滅の後つら〳〵思召やう我が師本化の再顧として此日本國宿緣厚くこへよ遊跡あし玉ひ大法今大半國中よ弘まりたり此國の弘通は日昭日朗等にてへや事たりぬべし閻浮提廣宣流布とあるは日本一國は物れ數ならず爾くは我れあれより外國異朝よ渡り佛緣うすき蠻夷の諸國を弘通せんと大願を發し給ひ嘉年永久二年中午九月十三日高祖の十三回忌を我山よ營ま十月十三日御正當身延山よ登て大師の御廟を拜しを御暇を皆奉り明れば永仁三年正月元日齡加はつて四十六歳元朝の喜びよ盃を聚法を法弟よ勸り寺を檀越よ任せ唯一人法衣を振々旅立たまひ奥州津輕より弘前よりゝ路の傍れ大石よ題目を書てあれを日本の名殘として松前より秋鶴に渡りて行衛知られず成玉ひけるとゝをもつて日持上人ハ今よ正月元日旅立の日をもつて命日正當と仰奉るなり寺院凡十八ケ寺みな當宗門よてそれ内の大寺を日遍山法華經寺としるそ此寺日持上人の墓あり石碑ゐ五月廿八日とあり年號は唐國の年號よして見別ざる文字ゆゑ松乘よい謂ずまて歸りぬと年譜録孜よ見へたりあれみな日持上人艱難弘通の跡よしてこれを見聞あと雨夜北是の心地して床しくも亦尊くぞおもはれける

此秋の最中の月もやゝ虧て初鼎が書ぞ渡るあるを故郷の空あつがしく日遍大師しきりよ慈母の事案じ玉ひ日朗〳〵の弟子日澄の兩人を將て旅立ゐゝ安房の國よおもむき給まひ絶て久しき我が宿をそれと書信たまひしよ歓と敬交を家内よ人の立騒ぐよぞ何事ゐやと疑ぬさまへば御母公此程病にふして在せしが今朝しを秋の長雨よ假よ病のさしつめて唯今相はて給ひぬときくより大士ハ走りより日遍よはやるはと喚べどさけべど亡魂の消て果なき今ハの訣れ大師は心取直し事機感の厚きい定業も又あゝし轉ずる法華此利益今一度我が母を蘇生させを給はれと本尊を書したゝ地獄

の松にこれを掛け御經讀師ありけるに病即消滅の文にいたり緒切れたり患悩の氣息次第に立かへり御眼を見ひらき手を舉て南無妙法蓮華經と唱へ給へば大師は嬉しく傍側に皆厚き御介保に日を經て次第に快復なし給ひ涙ながらに御物語りかぎりしられぬ嬉しさに思はずこゝに日數をうきねたまひけりその頃安房上總の兩國に疫病大ひに流行し死するもの多かりければ彼の御母をいのり消し給ひたる其奇特を言傳へかたりつぎて大師を尊信し此惡病を拂除き給はれと願ふにぞ大師は白布に御題目をしたゝめ其端を舩に結びつけてこれを海に流し曳つゝ浦々海上を淸めぐらし又小湊ちかき濱津の村なる井戸の中へ護符を御認めありし石を沈めこの水を諸人に飲しめ給ふ程に忽ち疫病退散して萬人の喜悅いはんかたなかりき今その井の邊りに寺を建て厳長山釋迦本寺と稱しけるさるに當國男金村に小林民部貞信といふものあり一子勝十郎齢四才にして性質凡ならず常に寺に遊ぶを喜び出家を見て嬉しみ戯にも爪紗を結んで袈裟とし木の實をつらねて珠數を造る父貞信もかれ前生の約束ならんとて實名は舊き朋友といひ幸ひ其子の出家となり道學たかき日蓮聖人心おかれぬ昔の好みをもて此兒十一才なりけるを高祖に參りければいと愛で玉ひ御側さらず出家の學行滿足して後年六老僧の其一人として大師入滅の後身延山第二世民部卿日向聖人は此兒にぞ在ける

斯て高祖大士は師匠道善御坊に教導養育の恩を報ぜんと九月中旬華房の蓮華寺に入て淨澄ふかくと逍遊なし給ふ此蓮華寺は眞言宗にして住持淨圓といふも淨澄なての知己にて二十年前此寺を繼れ念佛宗の爲に追出されし事もありけりと身の上の昔語によそへつゝ禪宗と法華との勝劣をかたり玉ふを淨圓種々に難じければむなしく詞に言はんより紙にしるしとゞめんと九月廿二日これを著したゝま住持淨圓に渡し玉ふこれを念佛無間抄と名づけたり道善和尚は紫竹の杖に扶けられ越なやみたる老の坂けはしき路をたどりつゝ遙々華房の房に來り大師を見て心

弱くも涙にくれ繰かへしたる繰言も相貫はあらぬ身の果敢なさ皆て止なば幼き時物よみ手習ふすべをさへ教へ給ひし師の恩をいつか報ずる時あらんと思ひきりつゝ念佛諸宗隨在地獄の業なるよし聞耳うとき老僧に物がたりしばし淨圓坊に止宿して夜を日にわかぬ教化の法問濁る心の底をみを釋尊の本佛よりしといふよしを稱辨へて淨澄に歸山なし給ひけりこゝに去る建長五年宗旨建立の其日より根ざし久しき東條左衛門尉此國の念佛者をかたらひ高祖大士に種々に難じ掃へども雀の鷹を摑み蚯蚓の己蛇に敵たふ如くうごめく邊鄙の念佛者果敢なき禪宗の癡聽にていかで嘯得ん本化の鉄壁をなほ遙々に攻伏られ口惜しくも歯嚼なしてありけるが此頃天津の領主工藤左近之丞吉隆大士に歸依し奉り時しも十一月十一日使を華房へ遣して高祖を招待し來るにぞ程遠からぬ天津なれば午の刻頃華房を立出給ひ御伴には日朗日澄鏡忍乘觀歸依の男女十餘人高聲に御題目を唱へつゝ霜に荒たる時徑天津をさして急ぎ給ふ處に彼の法敵東條左衛門景信は兼て期しさる味方の腹心小手腹卷に身を固た前後に伏さる百餘人小松原の路眞中大士を矢頃に遮ぞぐし合圖を鳴して打て出射る箭は霰劔は稻妻歸依の信者のその中に鏡忍左勝次長英等物の用に立べきはりつか四五人に過ざれども手頃の獲物を引提て大士に御怪我わらせじと目に餘る狼藉人に馳合せしばしこらへて見へけれるが東條景信馬上に在て鐙を合せ縱横無礙に駈たりけるにぞ何かはもつて支ゆべき鏡忍坊は亂軍のうち肩先切れて働き叶ず左勝次も左りの股に矢を射ぬかれ乘觀長英は袖を結びし玉襷きりゝと縮ひも法の爲身は惜まねど多勢に無勢すでに危く見へける處に工藤左近之丞吉隆は東條濱萩の住士北浦忠吾同忠内を逃立て大士を途中に出迎へけるが此躰を見て大ひに驚き妻手刀の鍔緒を取て袖ひき絞り袴の側を端折つゝ只一文字に馳來るを東條馬上きつと見て弓に箭番ひて切て放つを工藤は躬を沈めて其箭を避射損じたりと東條景信乙矢を番ひて射る處を矢よりもはやく飛來る吉隆東條目がけて切てかゝるを景信はやな身をかはし七八合鬭たりそるぞき切尖

文永元年
十一月十一日
東條景信
小松原ゝ
高祖を
討んと

さる火花景信あやうく見へたる處を郎等凡十人餘り吉隆が前後左右を遮取卷滅多打に切立られも
とより金鎖にあらぬ躰の絶に多勢に切伏られあゝに時死なしたりけり東條景信い自餘の者にい目
もかけず高祖大士の御側へ馬一文字に乗よせて年來の遺恨おとひ知れやと此方い徒立彼は馬上二
尺七寸の太刀眞向に振あざし唯一打と切つくるを大士右の御手に念珠をいただき妙法蓮華經序品
第一と九字をとり給へば太刀尖のびて珠數の母數ふたにまれ餘る切先御額右筋迄に三寸ばかり
切つくる仕損じたりと太刀取直し既に斯よと見へたる折柄空中に鬼形の鬼子母神善神現れたま
ひ日月の如き御眼にいりたと睨み給へば景信ゞ五躰すくんで動き得ず眼眩んで馬上より倒と落た
る時しもあれ颯と吹來る夕風に霧立籠て遙近の物は悉目も分ざりければ大士いろの間にゝを逃
れ天津小湊に身を隠し却を便りあしかりなんと武藏往還市が坂にさしかゝり王ひしに日い暮ゝ
るあやうく空かきくれて雪ふりいたし北風さむく身にしみて肩間の御疵を痛のたへがたくおいし
ければ傍の山根に洞のありけるを見そなへし此中に入て今宵い此にやどり王ひ夜もすがら降雪風
に御所疼をて惱ましく御經とゝもに夜は明るを待ひび王ひしに明の朝人の往還ととだへたる此山
坂の雪踏分齢いと闌しひとりの老婆念珠を杖に持りへて漸くあゝに登り來つあの洞をさし覗きし
はし無きたる体なりまが我は此郷は土生神へ日參れ歩行を運ぶものにはべる御身いあなれば雪に
埋みま此洞に夜を明し給ふぞよ見まゐらすれば貴額に疵もあり此雪風の疵口に入ば御爲わしくい
べらんにと自身被し綿帽子を脱て大師に奉る大師はこれを押いたゞき御疵を覆ひ給ひあれ當
來今の世に高祖の像に御綿を奉る事の始めと知れけりさても日朗日澄の兩人御ゝその往處を
尋ぬ當よろこびゐへるうち此日の夕つがた昨日小松原に討死なしたる吉隆の父工藤行光高祖大師
のあゝに花ずときゝて御迎びに參り自ら涉手を取て我が天津の邸に請じ奉り我が子吉隆小松原に
おいて法華經の涉爲に討死したるい天晴佛門の忠臣あり其妻も懷妊をてに臨月に近し吉隆存生の

日出生の兒とし男子あれば聖人の御弟子にあしいべらんといひしに猶耳に殘りぬと物語れば大師
としばし御涙に咽び給ひける後にあの子男子にてありければ父の遺言にしたゞひ徒弟となし刑部
阿闍梨日隆といひしいこれなり高祖大師い工藤吉隆が討死を憐れみ出家の儀式をもつて送葬し法
名を妙隆院日玉聖人と賜ひけるあゝに佛敬東條左衛門景信い小松原の時顔にいさゝかある手疵を
負けるが其疵より物身歴烟次第に腐入るの夜大熱火焔を揚五躰の節々鑊の杵をもつて搗るゝごと
ど牛の吼るが如き聲をあげて泣喚いり自も當られぬおりさまゐて相果ける惡き臭ひ一室に滿て
妻子すら其邊りへは寄がたく非業の死を遂たるもあれ全く正法敬對の現罰なりとてこれを見聞き
のその不測を感じ却て高祖を歸依そるもの多ゝりける工藤行光に我が菩提所なればとて天津領内
眞言寺といふに大師を入奉る住持は僧快ようらずして此宗流を謗るこゝにおいて日澄師は此一問
答をば我に許し給れと大師ならびに日朗聖人に願ひ住持の僧を捉て眞言の邪義を論じ破る其僧た
ちまち改宗して名を日宗とあらたむ大師に寺號を賜れとぬがひけれい大師笑て日澄が手にて改宗
ありたれば其儘日澄寺にてよあるべしとて即ち日澄聖人を以て開山とさだむ其寺今に歴然たり

刑部阿闍梨日隆慧父吉隆討死の地に寺を建て饒忍坊日曉師を開山とし慈父日玉を二世とし其躰
三代に順列すはじめ妙隆寺といひ今は饒忍寺とよぶ小松原御難の舊地い今の聖人誕の地なりと
いふ古今道筋もすあしの逆ひいあれど地理をもつて考ふれば其理わたる歟

茲に年改て文永二年乙丑の春高祖大師い房州を立て下總のうさに志し給ふ海上郡鼻和の眞言宗に
寺に宿り給ふ住持の僧敬導にちづかり法弟となり名をも日正と賜ふ寺を遮乘寺と名づくいたる處
法を弘め諸宗の法敵を攻あびけ玉ふこれより常陸國の筑波山の麓を過玉ふにあの山男躰女躰と峰
を分たる靈山にしてろのうさ釋の得一にゝに住て法相宗をひろめたりと言傳ふ霞ゞ浦より筑波嶽
に見渡し遠き山水の風景を賞翫して野州奈須にいたり玉ふ斯い近き頃中風の御心地にてありけれ

はしばしあゝの温泉よ温泉して御身を潔生なし王ひつゝ此地を踏足ありけるよ原中に五尺ばかり
の大石の見へければ御筆を染き題目を認め玉ふ後人そのまゝよ彫刻て今よ傳ふ中古野火のたゝよ
焼れたりとて年號見へず二年四月十三日とあるのみあり今い小兒の嗽初よい必ずあゝよ供物を
奉るゆへ世よいれを嗽初佛といひつたへたりもくてよ藤原といふ里あり里正治郎助齢七十ばかり
うひゝしく尼師を我ゞ家よ迎へを師檀の契を結ぶ師依のあまり治郎助泣ていふやう我年老たり
再び聖人をば拜しがたし我れ死せば誰を導師とし冥路の燈とせんとありければ大師四流の旗を
製して上行無邊行淨行安立經の四大菩薩の名を書て是い汝ゞ導師なるいとて與へ給ひければ次郎
助よろこびよたへず寺を建て藤原山清隆寺といふあれより路を宇都宮よ求め給ひ君鳥氏よ宿り給
ふ其家の老母剃髪して名を妙金と賜ふ後年日印聖人を請じを一寺を建立して法光山妙金寺と名づ
く此寺よ夜光といへる御本尊を什寶とを宇都宮の城主下野守景綱の姉大師の高德を慕ひ名を妙正
と改て受戒す後文永十一年こゝよ一寺を建て名を長宮山妙正寺と賜ふ城主景綱はじを妙正尼も高
祖の御身の惱ましなるをいたはり中風の病よは當國塩原の温泉功能あればとて勧たけるよゞ前
業所感の疾あればとても愈べしと思さぬど人の心よ戻らじとその温泉よ三日ばかりも在しげるが
程なく宇都宮よ歸りしばを此地よ法を弘め給ふ妙勝といへる老婆ありてふかく大師を帰依したる
を此時のあとありけりとかや茲よ十月廿初たつかた上總國夷隅郡奥津といへる地より里名五郎と
いへるもの来て大師を見へ奉り謹で言上やう我ゞ主人佐久間十郎左衛門尉貞元より佛道を帰
依し領内に釋迦堂を建て香華を供養する事ひさし近頃聖人の宗風をつたへきゝ丘ろの寄特を拜み
奉り何とぞ今度聖人を請待し奉らん爲よ態と此五郎御使ひを承りぬとありければ大師ろの道路の
遠志を厚きを挨拶し程おく星名五郎を案内として奥津よ趣き十月十五日より廿五日まで彼の釋迦
堂において御説法ありけるよゞ領主貞一門此あらず改宗し其歡喜よたへず今年七歳になりける

長禄麿といへる我ゞ兒を徒弟となす然るよ貞ゞ淳の舎弟ありて竹春麿とてあれも今年七歳なり
けるが長春麿ゞ出家するを見を我も僧よなしてたまれと泣て止ずこれ宿縁あらんとて子息長春
麿舎弟竹春麿ともよ釋迦堂よて剃髪せし此法弟とす同七歳なれども伯父と姪となり大師ふかくあ
れを憐を給ひ伯父の竹春を日家と名づけ姪の長春を日保と名を賜ひ兩人ともよ修學增進して後年
廣くあの近國を弘通し中老僧十八人の列よ入給ひけり

此奥津の釋迦堂を寺として廣榮山妙覺寺と號し日家日保ともよ此寺よ在て弘通を弘安年中兩人
心を合せて小湊誕生寺を建立す高祖をもけて開山とし日家は二世日保を三世と次第を又奥津妙
覺寺は同く高祖を開山とし二世い日保三世い日家と定た世の睦法の交り斯の如くなりしゆゑ此
兩山を今よ同根一寺と稱も

此時よ當て鎌倉よは猶うちつゝきたる凶變よ今年と奇怪た事のを多ありき六月三日秋田城之助義
景十三回忌の大法會無量寺よて行れ十種の供養を遂若宮別當隆辨僧正導師として證法あり伊勢入
道行願始た並居追善最中よ大雨大風荒いでゝ本堂た長梁をしゞ參詣のまた即死しれば諸人は
命大事と逃歸る鶴が谷の山ゞ崩れ落家人ともよ牛馬までを生ようずたられ親類縁者を見遇ると
て鋤鍬を擔て人々の馳あるくも前代未聞ときこへ又八月十七日相模武藏大地震十二月四日の
夜彗星一天よ亘ること去年七月廿五日の曉の彗星より廣大おしてろれ芒尖七十餘度に及ぶこれ天災
いかゝあらんと掃部頭範元をゝじめ茂時國繼等の司天歴學の驚山仕にて將軍家た庇の御所よ出御
ありて是を問召在府の大小名ゝ筵の子た牀よ列座せり司天の官人百上皆やうむかし是極帝の時
初て此星出てより今よ至るまで八十五度一度として凶變あらざるゝあた傳へいふ其芒氣の差とこ
ろ必ず災變ありその光りの色青き時ゝ王公將軍破られて四海困窮すその色赤きゝ盗賊國に起て上
下の歎ふりしまた其色黄あるゝ女人權威を振て國家みたる又色た黑きは海邊ゝ賊民起て中國を惱

ます尊勝國土に在故よその天色よ顯るゝあり天あの御大事これよ過ずとありければ府内宮寺まで仰せを御祈り初りゝる若宮の僧正金剛童子の法を修て安祥寺の僧正は如法尊勝王の法を行ひ陰陽師業昌は天地災變の紀を修行し同國繼い屬星の祭をなす又聖日陰陽師小允晴茂を御所の西の濱よ召て如法奏山府君は祭祀を行しを將軍御出有て鉄盤馬一匹銀造の劍一口手籠二合よ紺地絹を入て取せ給ふ賊よ重き御慎とて將軍あとよ恐れ給ひけり此御祈正月十二日に始りて腦巡なる鎌倉中の海氣色も絶て詠る人となく潮を渡りて心さびしく日を送りゝる中に二月朔日の朝日い出てゐりけれども空曇のおとく暗くして物のあいろも定かあらずたゞことならぬ日の光りやど思ふうち已時雨ふりいでゝ小龍なし申時よいたり雨の色うるしのごとくこいいうよと見るうちよ烟りよ泥をふらしろの夜よもなりけるに樹々の枝葉い泥よおされて倒れふし鎌倉の町中い田の中をあゆむが如し開闢このかたの珍事のあとあゝろなき野夫農婦まで身をふるわして恐れけり又時の將軍宗尊親王も北條一族れ我意に窄められ思ひよ驚る月と日の恵みかひなき御身を歎き表より御病惱と聞へさせ給ひ密よ松殿僧正法印嚴瑜などいふ名僧を招き執權時宗を調伏なし給ひゝるが隱れたるい顯れ易く隱謀いやくも露顯ふおよび將軍も是非あく婦人輿よ召て京都よかへり給ふ十一歳の時よ鎌倉よときたき下り現ともなき十五年久しく住馴し御所を立いづるとてその名殘を惜み給ひ固瀬川を渡るとて

かへり來てまた見んとのゐたせ川濁りし水の澄ぬ世なれば

と遊ばしてなく〳〵京都よ登り給ふ

其御子惟康親王もずか三歳よして征夷大將軍よ任せられ天下の御主と成給ひしも偏よ御幼君を名として政道を自在なゝ北條の計らひとこそ知られける今年文永丁の卯高祖大師の御母妙蓮尊尼久しく病の床に臥て在しけるが己よ去る年妙典の經力を以て宗業を新延たる事四年あり今い此世れ緣をこれ限りなりとて臨終正念の御題目の外他事なく見へさせ玉へば大師も御側を去すして晝夜

看病ありけるが日朝日向日澄諸師とともよ師のちゐらを扶け介保し奉れり檀越工藤行光佐久間重貞小林實信い鹽よ薪よ一切の費を供養しければ妙蓮尼は何よ事慮たるよしもなく其秋八月十五日睡るが如く御臨終ありければ大師を悲そよたへさまはず躬みづから葬式をいとあみ塚を築き石を建て佛事をいとなゝ往て諦らぬものは年月也てかれて再び相見ざるものは親なりとゝ百日の間其御墓よ讀經志名殘おしくゝ房州を立て下總よ越き玉ひけり御兩親れ御墓れうちよ寺を建御名を合て妙日山妙蓮寺と號す又遠州貫名の御屋敷跡よゝ貫名山妙日寺を建立しともよ慈父妙日尊僧を以て開祖と仰ゆりあれより大師は上總國垣生郡わさしかゝり玉ひし處路ずがら雨のふり出ければ茂りけちちの辻堂よ立入玉ひしふこゝい傳敎大師の開基よまゝ大悲山笠森寺とて觀世音の靈場なりければ高祖とりいゝす

うきに降る涙の雨よぬれじとてけふ笠森を身よ着するあなと口ずさゝ茲よ一夜を明し玉ひしよ戸の間しらむ有明がた墨田の里ある高橋五郎時光といふ人なりとて畏る〳〵此堂よ入來り大師れ前よ掌を合れは常よ此尊像を持念するよ昨夜更闌て枕のうへよ夢あらぬ觀世音現れ玉ひ我が堂ふ尊き聖人ゐり早く迎へ奉れよとわりければ夜窮を拂て御迎よまいりぬとわりけるよゞ大師其家よ入て敎化なし玉ふ後年中老日秀聖人當地よ寺を建て庭谷山妙福寺といふまた藻原の邑玉響崩兼綱も高祖を請待し檀家と成て師依後からず斯ゝ大師い鎌倉よ歸らんとして若宮の邸へ立寄玉ひしよ主富木胤繼大師ふ向ひ奉りもはや今年と餘日なし殊よ近年覺へぬ寒さなるよ枉て此方よ年を越玉へと强ちよとゝめられ大師もそれと心定めあら玉の寒を待たまひけり此年のうちよ古河の邑主千葉氏富木の一門なりとて大師の徒弟とあり名を日胤と賜ふ後建治元年本尊を御授與ありて故郷古河よりへり法典山妙光寺を開基せり一日富木胤繼大師よ言やう我よ一子ゐり性質學問を好む今度日向師聖人の御側よ在て立振舞を見てしきりふ出家せんとを希ふあいれ徒弟の數よ入玉いら

は彼が僥倖一家の慶びならんとぞ思ひければ大師あれを許して大戒を授け名を日頂と召る時よ年十六歳ありける大師も文永五年の春をあゝよ迎へ日頂をも伴ひて霞と共よ下總を立て鎌倉名越の御巷室よかへり玉ひけり

「頂聖人ハ伊豫阿闍梨と號す眞間山弘法寺ハ天台宗の檀林ありしが先年住持了性僧都富木殿よ論じ破られて逐天せしより學寮の所化も四散よなり失せ今ハ住する僧とあし此寺ハ富木代々の香華院よありければ亂穢ろの無住なるを悲しむ大師日頂あそ有縁ハ山なりとて入山せしめ開堂ありしハ廿六歳の時なりけり後年大師入滅ありて三回忌を池上よて營をし時日蓮聖人は鎌倉よ宗論の事ありて此法會よ値玉はず又日常大ひよ怒り宗論は一生の所作なり三年の法會は又と來るあとなし殊ゑ其身六孝僧の一分よありながら不義不孝の所爲なりとてあれより面會あしたまハず日蓮聖人ろハ過失を悔て中山の門前に來り銀杏ハ樹のもとよ立を寶塔品ハ偈を誦て七日の間雖夜御救わらん事を願へども聽入玉はずうくて正安元年の春日常病よ罹りし時日昭日朗兩聖人ろハ病を訪よ事寄日頂師の過ゑ詫玉へどと聽ずろハ躬よ着て在たる法衣を脱で兩聖人よ渡し玉ひ三月廿日日常聖人示寂す日頂聖人は邸ゐいたり勘氣の身なれば門よ入玉ハず闕よ跪づき兼て賜ひし御紀念の法衣を兩の手に捧ゑ御經を讀誦し歩を限りよ泣て立去玉ひしゑろれより何地よ在しけん其聞る處をしらず日常聖人無慈悲の親よ似たれども高祖を師依するの厚きあり日頂聖人又不孝の子よ似たれども宗義を守るの固きあり此親此子兩人ハ行狀その是非得失凡慮の裁斷却て恐れありとゑ思ハれける

昔天竺よ獨體を賣者ありけり此を買者あの獨體よ斯爲んと思ふ事を立願してこれを彈るよいうなる聞も恪はぬはなし其獨體の耳の孔の深きと淺きとよりや價に高下あり常よ正法を聞たる耳は深くして一生佛法を聞ざる耳はその孔深しとりや茲よ日蓮大士今末法よ入て二百餘年日本國の萬

人ろハ耳の孔の淺きを愛ひ玉ひ本地秘妙の大法を說諭し玉へども身の爲よする見聞ハ口よ苦ある世の故聞却てあれをいみ惡みまゐらすれば愈々彼を不便よ思召玉ひけるハ誠よ大慈大悲と聞つべき今年戊辰ハ春蒲土大元の世祖忽必烈ろの國の至元三年黑的といへる臣下を使として書翰を日本よ贈る朝鮮の國王王値添書をあして臣下潘阜せいふとれを案内として正月十八日京都よ達す北大元の書翰を披見るよ大蒙古國皇帝より日本國王よ言す我太祖天命を奉じ宋國を亡し今中國よ居て西海を治む高麗國もはや我が手よ入願くは日本我が國と好を通じ和親して相交らず四海成一家の如くあらん事を思ふて使を遣す處なりとあり以高麗國王の添書よは我が國大元の命よ從ゑ北德に懷く皇帝今日本と好を通ぜんとそろは利慾の爲よあらず偏に萬國一致の睦をなさんとの心あり早く貴國の返翰を待と書さり京鎌倉の詮議區々よて其書翰の文言無禮あればとて返翰よ及ばずろのまゝ使者を追歸されけるあれ大元蒙古の日本よたゝりをあす始よして高祖大師兼て安國論よ認たる諫言こゝよ符節を合せ宋代の不測これよ過たるいあらずとぞ思はれける此大蒙古といふ國は唐土の西よ當る飛夷あり其先祖の起りは一人の寡婦ありり奥深き閨のうちよ獨逃臥ありけるが每夜よ天より光明さして其婦の懷中に入其光よ感じて自然と孕めり月滿て安產し三子を產中よも季の男子學端生れあからよしを機敏拔群なりしよ其子其孫つゝいて才覺すぐれ終に廣大の威勢を成し韃靼と合躰し雲中九原の地を侵して九十餘部を征伐し兩河山東數千里ハ間よ打殺さるゝ人民算を知ず燕京を亡し高麗國を降參せしハ六十六歳にて病死しこれを太祖皇帝と謚し第三の子窩濶後を繼て太宗皇帝とおり陝西の丘汴城を攻落ま金を亡まて宋國よ及ぶ太宗死して憲宗位よ即ろの舍弟忽必烈世を繼てこれを世祖皇帝といふ至元元年都を燕京よ搏へ易よ大戒乾元とある間よ依て元の世と唱へ今四百餘州を伐鎭ハ其威勢高麗まても轟き虎も畏るゝ國の名を大元蒙古と喚になんわりける今其國王日本を辱ふ心われども表よ仁義の詞をかざり此國よ使をつかはす事さとへば蜜を懷き

る劍のごとし日本の厄難あの時よきはまりその危きあと風前の燈火のごとしあらずいかゞ嘲りゆく世の樣ぞと思ひ煩ふうち五月十二日の朝日輪ふたつ並び出さり關東關西見ざるものなし此時よ當て日蓮大師書通を懇々奉行宿谷左衛門尉光則よ捧ていふ抑々正嘉の大地震文永の大彗星飢饉また疫癘日蓮あれを御經よ考へたるに念佛禪宗等正法に法華を邪間あすゆへよ此禍を招けりしも我々諫を用ひ給はずは他國侵逼難とそ異國より此國を犯すべきよし去る文應元年の七月一卷の書を公の御手を以て御館よ奉れりしかしてより此方既よ九ヶ年今年大元蒙古より使を此國よ來らしむることと我が先言よ符合し終れりこの異國の敵を招くもとは念佛等の諸宗なり又此外敵を退治するものハ唯日蓮一人なり國の爲法のためいさゝあるこれを言上をとそ書たりける奉行光則有無の返答あしこれよ依て其年十一月十一日又一通を書て執權北條時宗よたてまつる天下の安危存亡は法の權實邪正よ依こと前年安國論ふ述たるがごとし願くハ當時諸宗の學者知識を殘りなく問注所よ召れ此日蓮と掛合せ御前よおいて彼の宗々と我々義と邪正明白よ聞召糺られ其邪惡に宗を捨て此純圓一實の御經を御歸依ならば此國に安泰ならん邪掌を反すよりと速あらん國を治め天下を平和よするの根本はこの一乘に宗論よありとそしるしける其ほゝの平の左衛門頼綱北條彌源太極樂寺の良觀建長寺の道隆大佛殿の別當隆觀淨光明寺の行敏西福寺多寶寺長樂寺以上合せ十一通の書をつかはして其邪義を責しのは此寺々はいづれも御由緒ありて經からぬ寺門あれば其日蓮の書よ添書して各々訴上るよそ上下萬人これを傳へ喋々しくも黙りけるこゝよ先年北條義時蝦夷の備とし安藤五郎と五郎をつかはしを奥州津輕よ砦を搆へてゐりける々此秋蝦夷謀反を企て東國へ入し安藤五郎とれがたゝよ討死して砦さへ燒うたれたるよし鎌倉よ注進す大士これを聞たまひ法弟檀越ふ宣うやう哀れあるかな我が日本國蒙古西よ動き蝦夷東よ叛き國よ種々の變災起るあの災難の根を知る者い絶てあし反て法華經の行者を責惱まをゆゑ念々國よ災を蒙ぬるを知らず今よ見よ〳〵諸宗の說

言を信じ此日蓮を捕へて又々流罪死罪よおよぶべし我弟子檀那と名乘ん者い心よ臆し思はるべからず妻子を思ふあとなかれ權威ふ畏るゝとなかれ命惜さに法華經を捨たりとも終よ惡道に爲ようち殺さるべしとても恨いぬ身なりせば一乘法華の爲に骨身を碎き此生死のきずあを切て佛果を得らるべしと進退きはまる世れありさまをあとたゞかたらふかたり玉ふ明れば文永六年二月二十一日曉よ月三輪並び出たり人皆奇怪として見物す茲よ極樂寺の良觀上人い世に聞へたる律僧にまて此年月伽藍を造立すると八十三ヶ所大塔を建ること二十基一代經藏を取立たると十四部諸國よ橋を渡すこと百八十九ヶ所路を造り坂を埋よしその日よ二百五十戒をかたくたもち三千の威儀を刷正女人の手より物を取らず菩薩を踏ず戒行堅固の生如來なりとて御所館の御信仰淺からず世れ人其道德よ懷くと小兒の母を慕ふが如し今日しも御館よ伺侯し執權奉行人と膝つき合せての物語り我戒律の一宗を日本國一圓よおし弘た第一國土よ酒を造ることを禁制し米穀をもたりよして喧嘩口論放埒驕奢の根をたやさんと此年頃それを聞へどもいかんせん日蓮といふ惡僧に妨げられ其綜さへ得果さず嗚呼寸善尺魔あるかな日蓮死ずば佛法い亂離になり國土を安穩よはあるまじ嘆りかけたる天目の茶を毒となれこの事い毒て愚僧ゞ歎なりと嘲へ揚る其讒奏は末終よ高祖の御大事あを知られける斯てあの頃甲州に農民なりとて彼處れ往還此所の辻と大士よつき纏を其說法をきゝ居たりしゞ其法理といひ立振舞を見てあれ日本第一の名僧なりと思ひ定た大士の御庵室よ來て戒をうゝて改宗を大士その名を問玉へども甲斐の國巨摩郡今御勸といふ片山里の賤れ身よまて名を問へ奉る程のもれよもいべらずとて立去ける幾程もなく一人の童を携へ來りてあれは我ゞ長子よて侍るゆまりよ聖人の教を聞ゆるゞ何とぞこれを法弟よおし炊の扶とをおし玉れと願ふよゞ大士その兒を御覽あるよ眼光人を貫くあれ尋常のわのよゐらずとて法弟として名を日蓮と賜ふ時よそが父も側座よしありていふやう願くは我をも御手を勞して制戒せしめ給へ御門

前座を御ひて御庭の草など除て事寒らとんあるよ大士嘲て墾をあろえ久本坊日元と呼玉ひ親子他事あく仕事けり

久本坊日元は俗姓嵯峨源氏安部貞任ゲ末裔なり貞任滅亡れ時ろの母懐妊ながら甲州れ山屯よりありて玆ゆかくれ其出生の子姓を栗て農民とある久本坊ハ北正嫡なり日進師此時十一歳後よ三位阿闍梨と稱し十三歳の時日朗聖人とハとよ宿谷の上の牢よ入十九歳の時桑が谷よ龍象坊と問答す正安二年駿州富士郡細野村よ竹葉山正法寺を草創ま正和二年五十五才れ時身延山第三世を相續ま同四世日善聖人も久本坊の子よして此日進聖人の舎弟あり

今年卯月の初旬大元蒙古より又蒙襲をもたらして對州よ來る宗對馬守宗資これを追あへす蒙古の使その歸るさよ對馬れ國人塔次郎彌三郎の兩人をとらへて船よ載を歸國せりとて鎌倉の風評取しゝよぞありける或夜久本坊日元大士の御肩を磨あゞら語るやう我ゲ生國は至極の山國よて人間も水石のやうあハ有れど山の姿水れハ風景うへ例て見處多し秋よりハ寒冷の他國よ勝りて凄ぎがたけれども青葉よしげる夏山ハ木蔭冷しく岩間を下る瀧津瀬は浮世の塵を洗ふゲ如しいつよき折を得て聖人を伴ひまゐらせたしとありけるよそ去は我とかぬて願ハしきことありいでや甲斐の國より富士山よ登らばやと思ひ立日を黄道吉日これより旅の要意しつ程なくこれゲ道しるべよて甲州吉田よ着玉ひけるる本より久本坊の職人ありとて神職擬屋平内の方へ入來る平内喜んで教化をうけ授戒ま て本尊を賜ふとの近き四邊法を開て師依するもの多し後年ゑゝふ寺を建て吉祥山上行寺といふ大士此地よ滞留のうち信者十人ばありを案内として富士に登山なし玉ひ時に天晴風靜よして十三州は一望の眼下よ遮り誠よ閻浮無雙の名山なりと賞歎なし玉ひ兼て書寫ありて法華經一部を山の半腹に埋め巌石の上よ座ま て暫時ゆ經あそばし玉ひける其地を今よ經が嶽とて其古蹟をとゝむ此末法萬年廣布の基を固めんとの御意なりといひ傳ふるれより山を下て小立村ゑ入しばら

く憩ひ玉ひしに此里人かぬて問つる日進聖人ありとをこゝよ群參て題目を唱へ各々手よ〳〵紙をさゝげもちて御本尊を請ゆ福これを敷へ見玉ふに二十八枝ありこれ御經の數也とて此紙をひとつよ粘合て一紙となし大筆よ題目を書て村長渡邊藤太夫よ渡し玉ふ今駿州岡宮光長寺よ傳來し岡宮三十八紙の愛陀羅とて世よ名高しろれより山梨郡勝沼北原を過て田並よやどり玉ふ主翁の願よまうせ大黒天を畫き授玉ふ今よ存在す又此地よ黒川といふはその頃金銀山有て千軒餘の富賑しかりしかば大士も此里よ入て弘經なし玉ひけりすべて當國ハ大法有緣の國よやゆりけんしばゑの弘通ゆ敬宗のもの多くいまよ勝沼よ上行寺黒川に法蓮寺北原よ立正寺等有ゑろの靈跡をとゝむそれより和州足柄郡板橋といふ地にかゝり象が鼻といふ處の石よ腰うちりけ此ゑたりより安房上總の方波間はるかよ見もるよぞ古郷なつかしくおぼしめししばし兩眼を閉て妙日妙蓮へ御追福の御題目を唱へたまひゝる後よ朗慶聖人これ地よ寺を建て象鼻山妙福寺といふ高祖大士は漸く長月の頃松ばが谷よ歸り玉ひしよ歸依の男女は是を喜び不歸依の族は又いゝある事をゝ言出んとたゞひよ恐み謂りけるさるよ年改りて文永七年午れ二月十四日慈父妙日登俗の十三回に當りければ大法會を修行しを厚く其冥福ゆ備玉ふ此頃些いとまを得て十章抄秀句十勝等無畏抄等數篇をあらハして門弟中よ示し玉ふしゝる處よ安房上總の檀越より鎌倉よ人を遣此恭の宋より夏よかゝり又々疫病の流行前年れ如しあはれ聖人御渡り有て其横死を救ひ玉はれとありければ高祖佛工師よ命せて我が肖像を彫ましゑ白布よ題目を書しを其木像の手よあゞけ是を使よ渡ま此像は我よ異る事なし持歸を前年の如く頻々の海よ曳渡すべしと仰ありければ彼の國の海岸よ是を執行し程なく病難うちもぎける國中大ひよ喜て敬宗の者多かりしと今此尊像今に江戸よ傳へ布引の祖師とて牛込華國寺よ安置せりかくて今年も具羽鳥樓よりはやき年川のあらさまりなる文永八年辛の未世は寒あれど何となく穏なら此近年近日人の心と關夜の影さためなき心地して花さへ待如彌生のはじた大路れ砂

を聞立つゝ京都よりの早馬はまた何とゝ出來つると耳を側てきくもうき大元帥右の國王より雨度の使に返事なきその怠慢を憤り趙良弼を使として又々錦繡を來るよしの注進よそ有々るかく靜ならぬ世の中よかゝて加へて此春より雨一滴も降ずして夏よいたりて大地乾き田植時なる人梅よさへ雨氣催す氣色をあく六月には江河の水涸はてゝ魚は炎天よ焦れ草木は色をうしなひ非の水蓋て渇を凌べき術もなく人の命も頼あき大旱魃海の潮さへあのおろは引潮有て滿汐あくこれぞ天下の大事と見ゆるよそ極樂寺の良觀上人を御所よ召れ貴僧年頃持戒此法力をもつて雨を八大龍王ふ請四民を潤し玉はれと懇よ台命ありければ良觀上人身は不肖なれども佛力法力をもつて願を嘱を現し奉らんと御受をなし退出ありまは爲くもまたいさましく見へよける此良觀といふは大和國磯島の人よして姓は伴氏十一才の時より志貴山よ學問し十三才の時五辛肉食を斷じ其頃戒行堅固の譽たかく建長四年關東よ下向して律宗を弘む北條義時の三男陸奥守重時ふかく此を信じ極樂寺を建立し後入道して其境内よ別莊をしつらひ茲よ念佛まて終る其子長時業時いよ〳〵信仰すゆゑを以て今度あ此雨請の大任を仰付けて其名僧の德を天下よ知らしんといふ北條家一門の結構とはゝをはれける

極樂寺は靈山崎と號も眞言律宗よして南都西大寺の末寺あり其頃關東十三ヶ寺御祈願所のその一よして七堂たかく雲よ聳へ境内四十九院世よ目ざましき大寺なり今は衰廢まて本堂と寺中の吉祥院のみ殘れり寺領今は九貫五百文を寄らるむゝし良觀上人大佛門前の西桑が谷といふ地よ一院を建世よ類なき病人を聚た食料醫藥を施し別て癩病は前世の宿業なればとて戒を授々念佛せしむ此時癩病人多くあつまるよし元亨釋書よ見へたり世よ癩寺といひしは此ゆゑならんか一輪の梅を見て天下の春をしり半杓の水を汲て太海の味を辨ふ淺きはもつて深きを知り小は以て大に驗へつべし茲よ良觀上人既よ天下の台命を受て靈山が崎よひろく壇を搆大慈大悲の雲を招き

甘露の雨を四海よろゝゞんものと六月十七日早天より修法始るよし高祖大士あれをきゝ玉ひこれ幸の時節なりとて良觀上人の弟子よ入澤の道淨坊周防坊といふ二人あり大士此層人を招き宜ぬやう我い經文よ任せて律宗を國賊といふ良觀上人わまた我を惡僧とのゝしる鎌倉府内の上下萬人心の眼盲たればいづれも魔と思る人なし良觀上人今度雨を祈王ふよし道理よりい請據文ろの證據より現證よしく乎みし此般此雨請をもつて良觀上人と我と法の邪正を定むべし若七日の間よ雨降ば我この法華經を捨て良觀御坊此弟子を成給を敬て念佛すべし若又雨ふらずは良觀上人我慢の心を ひるがへして來て我が弟子と成て一乘法華の行者を成給へむかも德敬と德命と守護僧都と弘法大師と雨の祈りよ依て法の勝負を定めたる先例ありと宜へば同人雀躍してよろゝび極樂寺よ歸り斯と告けるに良觀上人も心得玉ひさらば一七日もうちよ大雨を降せ日蓮を我が弟子となし鎌倉中の目を驚さんと百廿人の僧を八面よ列坐せしめ上人は中央の壇よ登て修法なし玉ふ近の男女數千人ろの奇特を拜まんと席處まで居並んたり讀經の聲天よ響き念佛のひゝき地を動く日々夜々の丹誠も既よ五日よ及べども雨の降べき氣色もあし桜葉が谷より御使を立られ今日をいや第五日目雨の降ぬいあよそと有ければ良觀上人聲ゐら〳〵ゞ今は修法此眞中なりとこたへさりあれより泉ゞ谷の多寶寺の僧二百人を助行よたのみ請雨經といふ御經を聲を限りよ讀立て既に廿四日よなりゝれは大士より今日滿願の日ありけれはいろよと問せ玉よ良觀苦しき思をつき此上七日と日を延ければ大士その意に任せ玉ふ天下の雨請といひまた日蓮と法の勝ならひ賭ありと近郷遠村よまていひ傳へろの勝負を見物せんと追々增る數萬の緇白金も爛れ石と焦るゝ六月の炎天雨氣絶たる一百餘日靈山崎の人の山崩るゝばありは其中よ聲も嗄たる三百餘人こゝを一世此大事ぞと汗は五体よあゞれても雨よあらねば靜よ勝よしとと良觀上人いかゝいせんとおぼを磯よ廿五日より大風吹出暴氣を卷て熱湯の如き風天地より吹おろそおぞ鎌倉中此土塵埃空よ高く吹立て眼鼻も明ぬ斯り

の場所汗よまぶれし砂埃人は顔とも別がたくさがひに顔を見合て眼珠右眼左眼ばうりなり其時鰐
樂か谷より商祖太士使をとつて寶玉ふやうむかし能因といふ破戒の僧あり旱の時伊豫の國よあり
て雨請のうたとて

天の川苗代水をせき下せ天降ります神あらば神と讀たりければ
大雨忽ち降來り又婦女此和泉式部といへる婦女も歌を詠て雨を降らすときくかゝる破戒此能因婦
飢の婦女もずか三十一字をつくしてさへ易々雨ゝ降したり戒行堅固の御身といひ三百餘人の丹頂
助行二七日まで祈りても雨一滴もふらざるはいかゝよそや此をもつて思召せ三尺此小澤を跨得ざる
者が二丈三丈の堀を越べしや世に手易き雨さへ降しえぬ人が一期の大事たる往生成佛協ふべきや
尊無過上の法華經の行人を思しとおぼゝ御身こそ此旱を招き民の歎きを成し給ひし根本也千日
蔵日祈り給ふとも雨の降べき道理なし良觀上人賢の出家よし在すならば我慢を棄て來り給へ雨を
降す法と佛よ成道とを教へ奉らんいざゝらば來れ應時の經力を見給へとて御弟子兩三人うち隨へ
靈山が崎より西よ當り田邊が池といへる古池あり大士彼處よ趣き給ひ小板子よ御經を積したゝた
田邊が淵に是を流し御聲をづうよ誦經はじまりすでよ御經二の卷よいたる頃ほひ南の天よ一點の
雲起ると見へしが忽ち大虛にひろがりてさしも烈しく吹たりし風も止海上恰も鏡の如くいと穏か
よ雨降いで田畑山林しと〳〵と樹茅草木石瓦うるほひ初し法の雨三日三夜ふりつゞき人畜鳥類昆
虫まで活かへりたる色見へて天下の喜び大方ならず是全く八大龍王の擁護よて法華現證の利益と
も思れける

田邊の池ハ七里ヶ濱より西よ入あと五町ばうり金洗澤の上あり今ハ想て田となり中央に高き處
よ一丈ばかりの石を建て題目を彫付たり此南の田の中よ蛇枕といふ塚あり其地の跡歴然として
物凄し鎌倉繁榮の頃この池よ雨請のあと往々東經よ見へたり

魚は水を已ゝ世界と見餓鬼ハ水を火と見天人は瑠璃と見人間はこれを水と見る同し一の水あれど
も一水四見の道理よ其身の業よりこれを見るの姿全じからずとかや今正法現證の力をもつて妙
法の雨天下を潤せども信ずるものいすくなく讃るものは愈々多しとぞ茲に七月八日鶴ヶ谷浄光明
寺此行敏といへる住僧壽をしたゝめて松葉ヶ谷よ贈る大士あれを披き見玉ふよ法華經の外一切諸
經皆佛此妄語といひ念佛を無間といひ禪を天魔と罵り大小の戒を持つを國賊と演らるゝよしあれ
論外の佛敵ありと種々よ惡口を雑へ喧嘩欲さの難問を審たりける大士も今ハ論判反て乱妨の基あ
らんとおぼしたし言ひ越されたる不審の條々自已の問答無益なり天下の決斷所よおいてこれを答
へん宜しく其とを計らるべしと返答す今日しも十二日盂蘭盆會の御心得此處に四條頼基筋奉りけふ
は慈母の忌日なりとて白米一斗油一筒錢一貫文を盆の供物よ奉り此盂蘭盆といふいかなるとの
起りよはべるやと尋奉るよ大士は扇を笏よ取直しされはとよ往昔目連尊者此慈母一飯の施しを惜
みて人よ與へず其上よ與へたるよし僞り給ひし慳貪の罪よより五百生ヶ間餓鬼道よ墮給ふその御
子目連尊者佛の御弟子とあり其慈母を救ひまゐらせしよし御經よ見へさるぞこれ盂蘭盆の始あり
けるその餓鬼道三十六種あり食吐食水有財無財あどすべて心よ飽足あとをしらず是を救はんよは
法華醍醐の法味あらでは協ひがさし御母妙法尼の靈魂も此施餓鬼の功德よて佛にあらせ給ふべき
よし細々教化なし給ひけるゝ〳〵る御物語此處へ入澤道浄坊わはたゞしく綜きて我今朝より浄光明
寺に遊びて在しよ此程聖人より和對の問答御斷わりしとゞ行敏和尚聖人の流義を遂々非難したる
を一通とおしてあれを御館よさし上るとて見せられたるを我もあたの如く發生を願ふ心よてわれ
ば潜がよそれを寫しもて參りぬあれ見給へとさし出すを大士手よ取りあれを讀て斯浅々しき法門
は答へ力をあらざれど言ずば愚あるものは諧りたりと思ふべしさらばとて料紙硯の應うち掃ひ硯
まぬ筆の走り書さら〳〵と認た終り是を入澤此入道よ渡し給ふ其論議此ゝるどきと電光のごとし

行敏もあれを見て嗔を消し口惜んで見へなるゥいかんとも爲すべなく所詮我ゲ力よは偽ひがたしと廿二日問註所へ訴狀を差上けるやう近來日蓮といふ惡僧佛法の次第を辨なく諸宗門を地獄と罵り愚昧の男女を誑らかし彌陀觀音の像を火よ燒川に流し劍戟兵具あど富れ內わかくし持無頼共盜者をかたらひ聚め前年流罪御放免のうへい惡行をも止べき筈の處左はなくして亂坊以前よ十倍し良觀上人兩謂の時を天下の御祈れ場所と知りあゲら再三弟子をつかいして嘲弄よおよび此旱魃は禪念佛の事なれば建長寺藤福寺大佛殿等燒拂ひ諸宗の僧の頭を切らば用立處よ除べしなど惡行雜言古へ守屋が惡道も僅ど類をきれとはいばず願はくは此海惡の日蓮ゲ邪義を停止ならば佛法王法ともにさのへ天下の萬民安堵ゥ住しその御仁德を仰ゲんとぞ訴へけるよ良觀上人も一通をさへけてこれを嫌き訴へ其餘諸宗の本山本寺力ゥひなき痴法師までその虎の威を假んとて我後れじと訴へ出又へひそかゥ北條の御一門後室尼御前奥方龍女達よ取入て彼日蓮奴が此程は時頼重時兩君を無間地獄よ落たりといひ諸宗の寺を燒拂ひかねて御師依の道隆禪師良觀上人の頭を切と嵐るよしなどわらぬ事まで種々よ言上るよ子奥方尼御前など驚きたまひそは勿躰なきいひ條ゥな日蓮とかいふ僧の疾いましめずやと婦女心のやるかたなく唯一節よ大士を恐み奉る此內外共鑑奏つもりて九月十日日蓮問註所へ出よと召寄られ諸寺院より御訴出たる其條々逐一ゥ糺ね問ろのうへ先君時頼重時御兩代地獄よ墮玉ひしと云よしろい實よやと眼よ角立て睨らまへば大士打へしんで世界を照らす日月さへ法華經の御敵とならば惡道はのがれがたし況て人間世界の國王大臣落ざるべしや此法門は御兩君世よ在ゼ頃よりの事よしそ今新清しき沙汰にあらずあれまで我ゲ說開きたる法門へ遇々皆あれ如來の金言よまて一言半句と日蓮ゲ詞なし若それ諸宗の鑑奏を信じ我を無實の罪よおこなへゝ國よ同士討に合戰起り果はまた異國より此國を征伐せんと必定なりこれ又大乘經謗師經の文にして强ちよ我ゲ强言よならず自他の合戰もし起らば後悔その詮なかるべしと白洲を打て

逃たまへば列座此言葉聽見合せかへす詞もならざりけり仝十二日の朝立正安國論を持參し平左衛門尉が邸よいたり見參と請頼綱よ向て宜ふやう一昨日問註所の見參悅び入まいらせたり日蓮出家となりしより八萬寶藏を開らき諸佛此本意を明らたり其實へ妙法蓮華經の五字ありしかるを上下萬人其正路を塞ひて流布を妨ぐ諸天善神これ怒て國土を守護せず七難並起て四海安穩あらず先年立正安國論を造ゲ執權最明寺殿よ獻覽よ備へしより今よ十二年外國既よ日本を窺ふにいたるまて其書よ考ゲへたるゲ如くすこしも違へず日蓮日本大一の忠臣ありいかゥある御賞美よも預るべき處却て快よらぬ見參よ入事案外の至り也貴邊は當時威勢の御家よして天下の寵用輕あらずときく願くば此一卷をかさねて御館よ奉り天下泰平の御仁政を扶け給へとて安國論取出しこれを頼綱よ渡して歸り給ひけり

平左衛門尉頼綱は人道して果圓と號す執權北條時宗共近臣ゥして其頃管領と稱する程の威勢なり時宗とへもよ讒言を信じ太子を責懲し奉るゥと度々よ及ぶ法敵の現罰これより二十六年の後嫡男家綱家督を繼ぎ其身は入道して猶天下共管領よて驕を窮め世ゥ時めき其前門を乘うちそる人さへゥかりける時よ頼綱謀叛を企て執權貞時また將軍をさへ討亡し我が二男飯沼安房守を將軍よゥあさんと謀太くも巧みゲるを嫡子宗綱これを聽めければ大望露顯の端ありとて宗綱を殺さんとそ宗綱逃て此事を貞時よ言ず是よ依て父頼綱ならびよ飯沼の兩人を欺いて殿中よよび寄不意を討てろ共親子を殺し一家の所領を沒收し妻子眷屬は鎌倉を追出そ嫡子宗綱へ忠ゥるよ似たれども父の惡事を訴人せしよ依て佐渡よ流され其處よて死せりどぞ現罰の的面斯の如し

唐土楚の國よト和といへる賢人ゥり或日荆山よ遊んで一の石を拾ひ得たりあれを磨かば天下第一の名玉となるへきとそ國の厲王よ獻ず厲王玉人を召て見せしめたるにこれは玉よゥらず左もあき石ありといふ厲王怒て國よ多分の費をたてんとそる事大罪なりとて左り共脛の緒を切て山中よ起

放つあまたの年月を經てゝの太子武王此世となりければ卞和又此石をさゝげて唐かん事を願ふよこれ玉よあらず國王を欺くなりとてまた右の脛の緒を切らる行歩かあばず巖窟の洞のうちよ彼の石を懐て泣事こゝよ二十年武王崩しさせ給ひ其子文王の御代よなり山中よ御狩ありて聞らず卞和を見そないし深くあれを憐を給ひよしや玉ならずとも國王三代二十餘年の念願なればしれを惜ひ得させんとて數萬の黄金を費してこれを磨りしたるよ不測よも天下に類ひなき名玉となりて夜は御幸よ車十七輛を照すゆゑ照車の玉といひ又市中よは十二街の暗をあゝやあすゆゑよ夜光の玉ともよび後年秦の十五城と易たるよ依て連城の玉ともてはやしゝるとあや今本化の大士の妙法蓮華經といふ閻浮提第一此名玉を懐て此日本東海よ跡を垂一切衆生殺憐を王ひ大慈大悲をうれぞとを知らで謗なす北條一門評定所よ集會し日蓮上を流り下を惱し佛法よ邪寄て國を乱さんとする事その罪輕からず縛ゆるりせよ爲ば天下の大事を引起さん疾々刑罰よ行ふへしと平左衛門頼綱是を承はり兵十凡三百人小具足よ身を堅め名越をさして押寄る時よ大士御齢五十歳此日いりある日ぞや文永八年九月十二日夕日を遥る申の刻松葉ヶ谷の御庵室には法弟檀方を集た高座よ在て説法眞中俄かよ騒く人馬の物音外の方急度見渡し給へば平左衛門馬上よてあまたの兵卒ひき連ひ砂を蹴立て寄來り頼綱怒りのあるありゝかやをれ日蓮日頃の悪行ろの罪重く今日死罪よ行ふべしと御館の殿命なるぞと喚いるよゑ堂よ満たる群集此參詣上を下へと立騒ぐ高祖大士に立像の釋尊に法華經一部を手早く取て懐中よお志入給ひ椽ちかく立出給ひ大將頼綱よ向て高聲よ宣ふやうあらおもしろや平左衛門心のいたらざるか理の通ぜざるあ天下此奉行に在ながら事の邪正も問糺ず今よ見よ〳〵自界叛逆難とて此國よ同士討の軍始り他國侵逼難とて異國より此國を責らるべし不便〳〵とありゝる時伊和瀬大輔少輔坊齋藤三郎磯の五郎ひた〳〵と詰寄齋藤三郎大士此襟筋抽へて高椽より引落す少輔坊立ゝりて懐中の御經引出し此期よ及んで尚此經よ未練を殘すあと罵なが

ら第五の卷をもりを大士此御顔を散々よ打擲す雑兵どもよ御經をずさと捨ちらし踏躙り板敷廣廊家此二三間ひき散さぬ處をなし高祖い莞爾として笑を含ませ給ひ末法よ此經を弘むるならば杖を以て打るべしと説れたる御經い五の卷今うされも杖と其五の卷よてありけりと喚ハり給へば物あ吉すあと手を捉脚を挽捕へてありけなくも高祖大士を引立つゝ痩たる馬よ跨原を敷これにうち乘せ奉り前後左右よい長刀抜連三百餘人いと厳重よ取かあみ武藏前司朝直の下知として北門前にしばし馬を駐ぎそれより魚町の四辻よ出て小町通りを引渡そろの[illegible]盗の罪人よと過たり市中の男女日蓮の日來の荒言割當りてあの姿になりたるいと指さし誘り大路せばしと見物を若宮の小路ようちいでゝ鶴ヶ岡赤橋の前鳥居の邊りよて馬より下給ひしのば釋固の武士どを嶽きあいてたり日蓮大士高聲よ呼て宣ひけるやう各々さいゝげせ給ふな子細いあらじ最後よ臨んで八幡大菩薩よいふべき事ありとて本社をはつたと白眼給ひいかに此八幡大菩薩い實の神りたゝしい邪神あるか昔和氣の清麿ヶ首刎られんとせし時お一丈ばかりの月と現れ給ひ忽敬大師宇佐の贊嘆よ法華經を讀給ひしあば靈應有て紫の袈裟を布施に捧ゝ給ひ今日よりい日本第一の行者なり其上今生よ三災七難を攘ひ未來よは無間地獄を助けん爲よ演る法門なり二千餘年のろのむかし大聖世尊靈山において此法華經の末法よ弘まらん時その行者を守護なるべきよし佛勅ありしうば天照八幡と其座よ列ありて法華經の行者よおろかあるまじきよし三度まて誓ひを立ながら今此處よ出給いぬこそ不淑あれ日蓮今腐頸切れて死ぬるおくろ約束よ違ひし邪神也とさし切て言上とべし若夫へとて又馬ようちはり給ひけり見物の男女驚々よ神へ對して無禮の荒言愈々正氣の沙汰にあらずと手を打て笑ふとありまた鎌倉殿の氏神よおゝるゝ事を言あけさるい恐しき僧あなと否を寄ておそるゝとありこれより夜よ入て長谷の小路を渡し御靈の社の前ふいたる時各々ばし待せ給へとて

高祖大出龍

小の日刑罪場

支を主

信心の老婆

途中ホ胡麻

の餅を捧ぐ

馬をとゞめ御伴よありける熊王四郎を召て四條金吾頼基の宅はこの祠の北なるぞ疲ゆきて我が最期の事を告知らせよと有りれば熊王走りゆきて告知らせけるよ金吾頼基あくと聞より兄弟四人徒歩跣にて馳しり出て浅間敷御姿よあり給ひしを見て驚きありけるよぞ大士御座しづかに日蓮い今度頸を切られにきめるあり此殿年が間願ひき事これなり此婆婆世界にしてい雖子となる時は鷹に抓れ鼠となれば猫よ噛われ或い妻子の為又い財宝の為よ身を失ひしことい大海衆に噛よりも多し但し法華經の御為よは一度も身を捨し事なし日蓮貧道身と生れを父母の孝行も心よ足らず國の恩を報ずる力なし今度頸を法華經よ奉りあの功徳を父母よ供養し其餘りをば我が弟子檀力よ分配んと思ふなりとありければ四條頼基涙もなくされば御伴つかまつらんと今宵は死出此旅衣經帷子を其身よ掛ひ御馬の口よ取縋り極樂寺此切通より七里が濱ようち出たり此濱は六里一里よして四十二町の波打際南は海上漫々として夜は遠目よもかねども安房上總よさし向て北に稲村山として小事山々の打つゞき賤が苫屋千稲村よ似たり十二日の月高けれども秋の天とて村雲の晴つゝりつ定なきに身此うへを感じつゝ手づから婆娑を脱ておしいたゞきいかに濁悪の世なればとて七仏傳來の此袈裟を血よ穢を事恐れありとて路のほとりにさし出たる松の下枝ようち掛給ひあれより馬の足掻はやく頓て津村よさしかゝる此の村落よ獨り住居の老婆ありけり齢七十よ近くして掛る嘆なき捨小舟たのをなき身をかゝちりゝ前の年鎌倉の寺院にハからず大士の説法を聴聞し宿緣や厚ありけんそれより朝暮御題目い怠らぬと老朽おれてそのゝちは鎌倉へも歩行あなはで有るが今日しも告る入相頃路行人の語るを聞よ日蓮聖人は今宵固瀬よ頸切らるゝとて鎌倉此大路小路を引渡すとありけるよぞ老婆はおどろき其はいかなる御身の罪あはしらぬども勿体あしいうよせんせたて老後の思ひでよ何をかも供養し奉らんとうち案じ老の手近き麁麻よ苧屑よ貫入し赤小足をあれば此倖ひと心づき牡丹の花の赤足餅ろれあそよけれと心ようあづき飯焚おろしを折柴

柴朶の煙りよ泣老婆も赤豆の鍋を掛るさへ老を扶くる自在鍵煮ゆるを遅きと待ほどよ夜も稍深き往還よ人音たかく聞へ川ゝ松火提灯嚇々しくさしてらすよぞろれと見るより老婆い狼狽赤豆い煮へず爲かたなく粥の節句の赤飯に祝ひ殘りし胡麻塩の有ければ握りし飯ゐ細めり丶折敷等る間もなく鍋蓋の裏うちゝへし胡麻の餅を盛おらべ路ばたよよろぼひ出涙ながらよ奉る大士はこれを見かへり給ひ供養於法師と回向ありてその志しを受給ひけり今にいたつて九月十二日御首繼餅とて我が宗門に胡麻の餅を供ずる由來は斯ぞ傳へけるされば腰越も程あくて見ゆる固瀬の刑罪場名も畏ろしき龍の口道法近くなりよけり抑々この地を龍の口といふ事いむかし此より北よ當て深澤と云固瀬四十里此湖水ありこの淵に悪龍すんで人此子を取噉ふ此處よ長者ありて五人の子をそれが爲よ取噉われしといひ傳ふ其蹟今よ殘りて初噉澤五ッ塚長者屋敷の名ありり時よ人皇十三代欽明天皇の十年夏四月此津村の海上よ霧立雲覆ひ沖合しばらく震動せしが頓て天晴海穏かよありて孤島波の上よ涌出天より花降音樂きゝへ天女忽然としてこゝよ天降り給ふ今此江の島辨財天これなり此時よ彼此深澤此悪龍辨財天の美麗なる容色よ迷ひ我が妻よ語らんとありければ辨財天女示して宣ふやう同し非類の畜身なれども我い天竺無熱池ある娑竭羅龍王第三此女よして八歳龍女の妹なり今年欽明帝十三年佛法いはじめて此國よ渡る其を守護の爲此土ゐ降臨おしたるあり汝は無道此悪龍よして人を噉ふ邪神也若ろの邪心をひるがへしとゝもよ正法を守護おさば父の龍王に言を偕老の契りを結ぶべしとありければ深澤の悪龍忽ち悪心を翻じ固瀬の山上よ迹をとゝめ此龍口大明神と顯れ江の嶋の水社と相向ひ子亥の方よ鎮座なすもゝあれを子亥方明神とも稱するなり斯て江の嶋辨財天能宣有て龍口明神いむかし人を噉ひし餘習あり願くは王法よ背不忠不孝の罪人をば此龍口の神前よを刑罰よ行ひ給へさそれば其血を啜て精力を増し佛法を守護し邪正一如此夫婦の神力を合て國土を守るべしと夫より當國よい此龍口明神の社の前を死罪場と定められし邪正よ年久

しされば龍の口江の島の両社は元來正法守護の爲にかねてあゝに鎭坐ましませを其神前に正法弘通の行者を引居來りしと不思議とぞ思はれける斯て見渡す前は平砂渺々として濵間近に柵欄厳しく結搆へ縦横に張渡し炬火を挟て警固の武士うちりこミて見ければ四條頼基さし俯き御顔ははや唯今なりと泣ければ大士はかゝる御氣色もなくいかに殿原あれほどの悦びをば笑へりしかまとに日頃の約束をば遊ゝ給ふかとありければ兵士どもは立あゝり御馬よりひきをろし敷皮のうへに居へ奉れば平左衛門遙にへだてゝ馬をひかへ雑兵四方を取囲め既に絶なんたまの緒をつなぐよしなき柵欄の外日朗日進日向四條池上荏原寺随身の法子歸依の男女南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱ふる聲も泪にくもり身の置處なき愛別離苦今やと見る間に下知際の刎子依智の三郎直重は兼て聞ゆる三尺二寸の蛇胴丸と名づけたる悪魔降伏の名劔を抜放し玉散刀尖に水うち灑ぎ御後ろに立廻りをありけるが此時三郎直重何思ひけん小腰を屈め涙をそゝりいかに日蓮御坊よ聞召せ御身は大徳の出家なりときく強盗夜討の罪もなく誅抜殺害の料はあらじ唯新法の題目を弘んと諸宗を誹り給ぬにより唯今命をおよぶあれ此直重も齢はや五十いかに天下の嚴命あればとて老前近き身を以て佛法弘通の御身を切も罪いと深く覺ゆるぞ今日より改心有て念佛無間法門を罷たるの題目を棄給はゝ奉行に言譯我の身に替ても命を救はん此上に罪なき御身あるをいかで御救なからんやとありければ大士御後を見かへり給ひ法華經の御爲に身を捨んことは日來月來思ひ儲けたる事なり今此首を捨て佛果を得るならば砂に金を換石に玉を商へるに似たるはと座居たりし大盤石もるぐ氣色は見えざりけり三郎直重是非もなしと立揚既に斯よとミへける折から殿前より空一面にかき曇り須彌山をも吹倒すべき大風礫の如き雨を捧て持來り天地俄に鳴動し大波激て山より高く天に盛り響地に震ひ堅牢地神も身を怒らし給ひけん今も大地も砕くるばかり立列ねたる松火提灯擲火も一時に滅て其の間さしも厳重に搆へたる柵の行馬も打倒され或は虚空に吹とんで白龍火を断るに似たりあゝる處に江の島の方より満月の如光り物鞠のごとし飛出て辰巳より戌亥にわたりて光渡り颯颯お暗き烏羽の夜も天地かゝやき晝のごとし三郎直重おくれじと太刀振揚て丁とうては蛇胴の名劔こはいかに朽木の如く鍔根より三段に折て飛散たり平の左衛門始として三百餘人の兵士どももうろたへ畏れて高遁十段ばかり逃退にぞ高祖大士御聲さかくいかに人々かゝる大罪人を捨ていづくへか退給ふぞ夜も明なば見苦しかるべしいそぎ〳〵頸打給へとさし招き給へども懼て近寄ものもなし斯て風和らぎ雨も疎らに夜はほの〴〵と明てたる平左衛門は此不測に畏れ日蓮が頸切がたきよし馬を飛せて注進す又鎌倉御所においても殿中屋鳴震動たゞ事ならねばこれ日蓮を害するゆゑならんと身の毛立ておそろしかりしかば日蓮が命助けよとの厳命に信濃判官入道觀正畏まつて飛追取御下知の趣き守殿御館に大怪物あれわり日蓮法師誅すべからざるよし南條七郎をもつて仰出さるゝとぞ畏たりける南條七郎赦免の状をさしかざし一鞭あてゝ飛が如くに馳たりしが七里が濵は中央金洗澤の川邊にて彼の固瀬よりの使者に行合て日蓮上人死罪赦免の状を渡す夫より此川を今に行合川と喚なせり

龍の口御法難は靈跡寂光山龍口寺と號も妙典寺東漸寺勧行寺本成寺本龍寺法源寺常立寺本蓮寺の八箇寺あれを輪番す毎年九月十二日は御大會と稱し江戸をはじめ遠村近郷より群集は參詣稻麻のごとし夜半子丑の間御法會勤持品の訓讀又禮贊あり音樂を奏して胡麻の餅を献膳せり し風雨雷電は響今昔樂管絃の聲となる娑婆即寂光實に廣流宣布の時節なりと參詣の男女五百年前を思ひ合せ御報恩の御題目は濡ぬ袖こそなかりける龍口寺建立は時むかしより此地にて刑罪にありしものは又は乱世討死のものゝ殘骨あゝりしかに散たるを取聚めて塚となしあれを離姿の森とぞ今に輪番常立寺は境内にその蹟を殘せり

斯て山嶽の巖石の間において大士に朝餉を進め奉りさて鎌倉殿の下知あればこれより當國愛甲郡

依智の郷本間六郎左衛門重連ダカへ渡り給へとゐりゐれば大士うなづき給ひ我は其路を知らずと仰せしかば兵士五六人前よたちて案内す北をさして住としばしよして愛染堂眞孤院とて眞言の寺ありあゝよ入て暫時休らひ給ひしよ住持長藏法印法弟とあつて名を日間と賜ふ今の藤澤の驛長藤山妙善寺あれ也かゝて追々ゆ後を慕ひ來るもの多く平左衛門もあゝよ追付來り路次の程も眼しを警固共武士そ共外隨身歸依のもともそれあれ前後百餘人此日の未時依智の郷本間の邸よ着せ給ふ此本間六郎重連といふい代々鎌倉の藩臣たり佐渡國加茂郡を領し間郡新穂といふ地よ役所を搆へ總じて佐渡一國の政事を進退を此頃も既よ佐渡よ在て家よは居らず平左衛門頼綱は重連の一族本間三郎左衛門に大士を預け渡し追て鎌倉の沙汰を待べきと言さして立歸る又腹惡したる者ども十人ばかり大士の前に手をつき頭を低聖人いいあある人に渡らせ給ふぞ眼のあたり不測を非を寄りぬ我々ゞ昨夜よりの罪ゐもるし給へ年頃せし念佛は捨はべるとて火打袋より珠數を取出して切て捨るもあり又一生念佛い言じと誓言を立るもありを口々よ題目を唱へつゝ皆大將頼綱共後を追て鎌倉よ歸りけり秋の日影の黄昏て今宵は九月十三日後の明月とて賞翫す夜也けるが番の兵卒數十人緑の邊り大庭よ並居たり月中天よさし登り千草の露ゐ影しをて虫の聲々あき盛しいと面白き風情あるよ高祖大士庭よおりさち念珠を御掌にかゝながら月よ向ひ自我偈すこし續給ひさて宣ふやう今此月天子は法華經の會座よ在しさる明月天子よ在さずや寶塔品よしては佛勅を蒙ふり末法よい法華經の弘まらせたまふときい影の形に從ふが如く守護すべしと誓ひを立それうへ四王天といふは人間の五十年を一日一夜と成給ふときくされば釋尊入滅より人間世界よい二千二百年とおもへども月天子の御身よ取ていわづる四十四日なりその間よいやゞも靈山の約束を忘れ給ひしは不測也よしや守護する事こそ協はずとも媚し顔よ澄ゞたらせ給ふはいかよ大乘經よい日月明らかならずと說仁王經よは度を失ふと說れ最勝王經よい三十三天瞋れ色を現ゞとゝ見へたるゞいかよ

月天子月天子と賞給ひけれい不測あるゝな一國の黑雲月よかゝると見へしが明星の如き大星陣て庭前の梅の梢よかゝり給ひ其光赫々として物を貫くが如し番の兵卒等是を見てあをろろしと様より飛下大地よひれふし又い家の後よ逃たるものもあり落葉をさそう木枯の颯と吹しき物凄く折しも江の嶋此海の鳴おと動々と地よひびき又恐ろしく覺へけるかゝる處へ本間重連の代官本間有馬尉鎌倉より立文を持て走りつき大士よ見へ給へ彼の地の取沙汰よは日蓮聖人も御益所の御懷妊よて一度は御免ありけれども死罪い迷よ免れゞたしと聞つるよかゝる御喜びの御狀出たれば我も嬉しく二時の間よ參りつきたりとあたる御下知の趣よ本間六郎左衛門が預として佐渡よ渡すべし必らず遺失ゐるべからずとぞしるさける明れば十四日の卯の時頃本間十郎又鎌倉より歸り大士よ向ひ奉り鎌倉よて聖人を御歸依なゝ推池四郎い弟ゞ妻の舍弟なれい此方よ立寄り聖人斯ならせ給ひし後い御弟子方々いあゝかり給ひしやと尋たるよ御弟子の長とか聞へし日昭師名越の陽安寺よ在してきのふ十三日の早天ゐ弟子衆よ何やらんいひ含め山北の濱士といふ處に退きあしとよ各々身をひろ之給ふよしさるを日朗師い尙御安室を去りあぬておはしけるよ陽下知としてあまた共雜人松葉ゞ谷よ來り其御安室をうち壞したるよ日朗聖人此よ在したるゆゑあれ日蓮が一類の道心ありとて繩を懸て引立たるを日進とがいへる齡十二三ばかりの小法師あゝ來り我をと縛て給れと手を後よして指俯を日朗聖もて押隔て御身はいまだ小兒なれは彼方へ往ぬと目配てゐ聞入ず我と日蓮が弟子なるいと雜兵の脇に縋り離れ給いず是非おく共よ繩ゐけて名い知られぬるもそいはかよ在家四人を搦ゑ搦り宿屋左門衛の預りとして土共牢よ籠られたりとてあれを見聞く人おかたり傳へ袖を絞らぬいあかりけりと彼の地の樣子かれあれの物語よ哀れを催し給ひけり此本間十郎をはじゑとして本間三郎左衛門本間辨坊本間右馬之尉等みな六郎重連の一族にして依智に住居なしけるゆゑ高祖大士の奇特よ感伏し一門餘類他屬までこゝよ樂り教化を受十三日十四日の兩日よ男女の

敬宗七十八人僧分の者二十五人法弟よりあるよけるの

依智星降の靈場上依智梅星山妙傳寺中依智法塔山遍性寺下依智明星山明純寺あり又中依智よむかし三光山梅光寺といふ寺在て梅の靈木有りしが中古供水よ流れて其跡を失ひしといふ斯數々の寺院いづれを其靈跡と仰がん思ふよ本間の一門多く此地よ住を重遷をはじめ各大士の檀越となり後年その屋宅それ〳〵よ寺を建立あり今よ寺院も多きあり九月十三日より十月十日まで此地よ在し給る御化導の靈跡なればそれあれと思ひなやむ事なあれ今現在の三箇處の靈場を巡拜し心念口唱をあたりなきあそ三論即一能入の信者といふべし

彗閣茂らんとすれは秋風これを枯し賢人明りならんとすれ佞人あれを隱を釋尊よ堤婆あり太子よ守屋あり月よ村雲花よあらし信心色ませば災難又色を增す魔尺魔の世なりなり此頃鎌倉の町おおいて火を放るあと毎夜數十ヶ所或は辻よて人を切るもの多くありてあれ日蓮ゞ餘類此所爲ありとて師依の檀越弟子の輩二百六十餘人を搦捕り所を逐べきゝ島よ流さんか宿谷此牢よ在弟子をば首を切べきかと評議取々あるよ毎夜の惡業猶止ざりなれいひうあよ密吏を儲てあれを捕へたるよ皆念佛等の盜者ども日蓮よ惡名負せんとの計畧なるよし粗きあえなれば二百六十人を幸ひよ宥赦たり此等れよしい四條頼基より使を以て告來る此遊事として龍の口法難の時厚き志を見せ給ひし事いつの世よか忘るべきと細々書贈り給ふ此秋とくれ冬の初めよありけれゞ今歳は例よりも寒さはやくて氷やいたく結びげん覽筒此水のをと痩て身よたへ難き夜半の霜袈裟さぬて寒身さへ夜明てびしく思ずよ月明日朗は宿谷が土の牢よりちあめられいのよ此世を明すいんと涙よ氷る御硯ひきよせ給ひ紙とりのべて此御文章日蓮明日いはや佐渡ゞ島へ參るあり今宵の寒さよ月けても牢此中の躰相思やられていたいしくあそ覺るなれ世間よ法華經は讀を口はかり間はりりい讀ども心よ讀ず心よ讀ども身よよまず讀邊い身と心と心とよ讀給へば父母ならびに一切衆生を助け給ふべ

き法身あり法華經よい諸天晝夜法の爲よ守護すると見へたれいさとへ今は身を苦しめらるとも別の事はあらじ赦免有を牢を出させ給へゞ疾々來り給へ日出度面會を遂べしとう遊はしなる又太田左衛門尉谷入道金原法橋へも法門した、めあれを合せて鎌倉よ贈り給ひ十月十日依智を發ち足ありけるよ警固の武士前後をかあみまたは見送りよは日興日向富木殿よりの入道一人又日朗此御册妙一尼よりの使人ゟ此外熊王四郎ゟと五六人傳添奉り此夜い武州入間郡柴川よ宿り明る十一日新倉よさしのゝり給ひしよ新曾の地頭盤田次郎時光その妻御產よ苦みけるもゑ此地の土生神よ祈念を籠たるよ昨夜の靈夢の告よ明日い日蓮といふ名僧あの地よ來るべし其人あらでは助けがさしとありけるよそ次郎時光曉天より途中よ立て待受奉り北新堀を南大士路の側よ小社のありなる其前よ休息て志いし御經有て大尊を拜ひしよ忽ち安產しゝその小兒も亦壯健あり夫婦をはじめ一門の喜び大方ならずこれより深く大士を歸依し時宜後年出家して日德と號し新曾妙顯寺を建立すく敬宗七十四日上野國甘縣郡栗沢まで時國案内として送りまゐらせ長谷川長源か家よ入來る長源ゞ子孫今尚在て其時の古蹟とて庭よ舊き大木あり長源寺といふも此人此建立といへり又これより近き藤岡も御小憩の舊蹟とて大龍寺といふ寺あり此路いはやき雪也ることもわあぬ山路をきのふは陟りけふい下り伴ふ人々の物語りお憂を忘れ日數かさねし旅の空廿一日の夕月かた越後國三嶋郡寺泊よ着給ひ石川宗有衛門吉廣といふものの邸て次士の事を聞傳へてありけれい家よ迎へて饗應しこゝよ船山を出給ふ日數六日の間よ妻子一屬奴婢まで深く化導を蒙りける後年あゝよ寺を建堅光山法福寺といふ御硯水此井も今お存せりかくて廿七日海上精おだやあよ見もるとて船職のあしましきに高祖は富木氏へ此書をしたゝ此各々あれより歸り給へ人わまさ具して彼の地へ渡ることを鎌倉殿への御りあつて反て日蓮が爲ならずとありければ富木の使なる入道と力あく志人凡僧い聖

佐渡乃
海上難風
波乃
題目

人の在さん處をいけくまても見とどけこれを渡し奉れと言含められはべりぬとて錢一緡をさし出す其餘の人々も火の中水の底までもとおもへども世の憚りよ是非をなく彼袖ふ縋りて落涙を送り奉り湊離るゝ彼船をふし拜みつゝ各々名殘をしくもあへりける志かるよ此日海上俄に風われて彼船を此方へ吹戻し浦々郡角田の岸よぞ着たりける大士は最よ題目を認めて龍神よ法樂し此邊よ人家有りやと其處此處と歩行たまふ折ふらいを美麗しき二人の童子大師を尋して いふやう此山は洞よ毒蛇ありて人畜を害ふ聖人の法力を以て降伏なし玉へといふろの童子の案内よ任せて山よ登り玉ふよ天子ゞ嶽といふ處より其麓窟を望見玉ふ惡蛇蟒まりて日より毒炎を吹出し霧の如き毒氣穴より立登るその惡き臭鼻も拔るやとおぼそばかりに有りれは大師あたりの小石を拾ひ遥々よ御經を書てろの穴よ投入給ひけれいろれより毒蛇ゝたちを隱し永くその害は輟たりゝる此時角田の地よ石田五郎遠藤次郎の兩人ゐりて大士を家よ請待し二人ゝいふやう昨日海上あれ出て御船をとゝよ寄たるは彼の毒龍の降伏を願んとての諸天れ御計らひなるべしとて歡悦大方ならず彼よ角田山妙光寺を建て日聖人を開山とせりさても廿八日早天順風よ角田を出帆ありしよ沖合遥れ大灘よ逆風暴俄よ吹起り大海逆卷荒波の山を重ねてうちあへそ何あハしいしも憑ふべき船をゆり揚ゆり御し掛折て帆綱も切水主梶取も色を失び既よ危く見へけれ折かち高祖大師は船の舳前よ立揚り念珠おし揉御經終り水棹を取て海面よ南無妙法蓮華經と唱給へば其水棹れ跡おのつから白波立て十丈ばかり光明職の御題目海上よ高りくゝとおかまれてしいし波間よ消やらず佐渡の浮題目と今れ世までも言傳へ天氣朗なる時角田山より遥く海上を見渡せばろれ御水棹れ跡いまよ顯然として油の畝とうき沈ミ波間うくれを見へ渡るありさま實よ本地の風景なりと語り傳へりうくて船中れ船子ども目のあたりあの奇特を見て一同よ合掌し題目を唱へ奉るよ龍神納受やましましけんそれより風も小閑し波いとしづかよ夕つりたゝ船い慈なく佐渡國羽茂郡松ゞ崎甲の瀬といふ岸よ着船す大師喜び給ひ墨汁の墨よ水を添て磯邊れ石よ題目を書して此國よ妙經流布せんとを表し給ふ附郡ひ來りし官吏等い彼是問へてこゝよ少飯を奉りければ大師いを快くきあしたし給ひき此地松崎山本行寺よ今ろの時れ木椀折敷など什寶よ傳へたりさて官吏のいふやうこれより其路をたどりて新穗の郡へゆき給へゝ身流罪は下知狀は我等ゞ禁にかけはべりぬ別の用事を取すまし明日は路よて追付ん疾往給へと言さして立別れつゝ去よける大師はひとり困じハて東西しらぬ此島よ其方とのミ教へさる夕霜近る細道を思東なくを歩行給ふよ古き樫木のもとよ立たるひとりの翁頭よ千代の雪をいさゝき頷よ老のあをならぬ容貌等く見へたるゞ今宵はあれよ宿しまゐらせんとて其家よ伴ひて厚くとてなし奉りぬ大師木等を書て與給ひ法門の物語りよ長き一夜も明易くあゝを立出て見玉ふよ樫よ松前明神と顯うつさる祠よてこれい去る文永六年本間山城守の勘請よして準日の神なるよ志きゝ給ひさては此一夜の宿は神の恩よありけるよと喜あび給ひ廿九日の夜は雜太郡小倉ある神職の舍よやどりろの明の日加茂郡新穗なる本間六郎重連ゞ邸にたどりつき霜月の朔日重連ゞ下知として大野の郷塚原といふ地よ追放し奉りけり其住べき處は一間四面の辻堂れ軒端傾き壁を疎らよ夜の湖の風防ぐべうもあらず本尊と頼む佛も見へず下よ板敷迚もあし四邊は京都鳥部山の樣よ死人を棄る三昧原あれば見渡ず方は枯尾花朽さる卒塔婆ぬしや誰問ゞ答へぬ古墳ばかり今宵いあとよ物淋しく北海の荒海寒を起ししきりよ降くる大雪に忍ち埋む三昧堂軒は七尺雪は一丈うち拂はんとする袖も水りて氷柱よとゝ骨身を削る御眼離れを波々と捨ねどもあたりよ有て破簑を御身にまとひ乘て旅路ゞ持たりし一蓋の笠を頭よいたゞき夜ハ明たれど食事をまゐらせる人もなく雪ゞ御手を淨めつゝ懷中より隨身佛立像の釋尊を取いだし尊をつゝ抱て壇とあしこれを安置し奉り御經しづかよ讀給ひ昔唐土の蘇武といひし人ハ胡國よとられ嚴寒よ在て雪を食として二十年を過したるよも劣らづ今日遠末法よ生れて妙法蓮華經れ五字を弘めてゐゝる

貴よりおへり佛の滅後二千餘年日蓮の外法華經の故よりあくまで身を苦しめたる者有とも覺へず日本國の萬人い惡まばゐくた釋迦多寶十萬の諸佛よだよ惡られまゐらせ其面目よろあび身よ餘れりと一心不亂よ法經唱題の外更よ他事なく見へさせ給ひけり玆よ遠藤武者盛遠より四世の孫遠藤左衛門爲盛は罪行て土佐渡國へ流罪せられて憂世の中の惡業煩惱是も亦非ある理りを悟夫婦もろともに剃髮し念佛誦行よ明し暮しけるが一日夫婦の密々語しあはて聞たる外道の日蓮鎌倉殿もゝてあまし此嶋よ流罪せられ程遠からぬ塚原よおりとき〻阿彌陀如來の大怨敵諸萬人の惡知識ひそうに彼を失ひなば千僧供養の功德よも增あたならんと張臂を要い案じて老れ身の仕損じて怪狀し給ひろとあやぶめば昔握たる飯柄も覺へば腕よある物をと一腰ういあを庭よ下立力足踏裏履も馴し大野の塚原道夜もやゝ更て丑滿頃ぬきゐしさしあし覗へばかくとも知らぬ高祖大師捨果し身もきのふけふ降積野邊の雪風はは身を貫く劍太刀食事を絶てなふ五日雪を含んで咽喉をうるほし命の際のは經誦遠藤爲盛うかゝひより唯一討とおもひしが果のしれたる痩道心殺ず雖きことやわる一先ろの法門を問糺し返答詰る其ときよ眼取らそも逆あらずと堂よ押入曾釋もあく我い念佛の行者なり法華ばかりは成佛よて諸宗よ得道なしといふその經據いいづくよありやど鹿怨の難問大師いはしと笑ひ給ひ雪よ消絶あの堂へ殊よ其夜中氣色變來臨ゆ身念佛者よ在すあら得道あらぬ證文は外を尋給ふよ及ばづゆ身の願む淨土の三部彌陀經は其中に舍利弗舍利弗又舍利弗と一尊たらずのは經よ三十八ケ所まで名を召れさる舍利弗尊者ろは經よては得道あら法華經第二の會座にして妙法蓮華經をとつて華光如來とあり給ひし其上觀經彌陀四十八願の其中よも正法を謗るもは如いしとさしきつて彌陀如來も輟ひ給ひしぞされば念佛者は無得道經據はは身の朝夕よ讀む彌經よあるものをはしたあき行者のなと謀すくめ給へば爲盛坊は呆れいて我が太刀をもて我を切その法門よ拳もたゆみ膝行直して不審の條々問ば答ふる辯舌のあざりしられぬ本化の法門やゝ魂よ染渡

り涙あがらよ身の懺悔徒弟よなして給はれと尊よと强き菩提心尊よ頭を摺埋めその授戒を願ひけり妻はかくとと知らずして歸りの遲きを案じ〻び潛よ後を尋ね來て外側よしばしたゝづみて大師の教化夫の得道あら〳〵これと聞果てともゐ大師よ相見あげ夫婦もろとも法弟とあり人目を忍び世を憚り飯櫃を古葛籠よかくし入夫婦ゝこれを背負つゝ毎夜あれるゝ大師を塚原よ供養し奉ること百日餘りろの功德千日の修行よ增るとて妻を千日尼とよび夫を阿佛坊日得とぞ召れける

塚原三昧堂の鎭跡い今の根本寺の門前の地ありとぞ京都妙覺寺日護聖人は徒弟泉坊日成聖人此靈場を尋給ひし時茫々たる荒野のうちよいさゝあの堂有て人さへ住ず傳へいふ此地い高祖大師極難の地ゆゑろの威德今よ殘りて尋常の僧の居がたしとて人と住ずときゝ給ひこれ高祖日蓮の道場大慈悲の鎭室なるを何ぞこれを疎ろよせんと天文廿一年壬子はじめて一宇を造立し塚原山根本寺と名づくこれ法難より二百八十二年の後なり天正年中上杉の家臣直江山城守景綱出圖を寄附し大ひよ鎭跡を輝しなり

斯て此國い北海の島根よしそ人の心も頑よ諸宗の僧もあら〳〵恶く就中生喰坊慈道坊中生唯阿彌等を始として大師の化導をふかく惡を憤りこゝろしこより相聚るもの數十人各々相謀ていふやうむりしより此嶋に流されたるもの生て歸りし例はなし鎌倉殿ゐ捨殺し給ふ日蓮ゐれい佛恩報謝のためよ彼をうち殺したりとも咎めはゐらじと其殺すべき手術をぞ成たりけるよ本間重連これを聞て大ひよ驚き念佛眞言等の獵頭人あまさ邸よ召倚て日蓮は此守護所の預りにして若過失ゐらば我ゲ越度なるゑ殊よ汝等出家の身として人を害せんとの密謀甚はだ如法ならずさばゐり惡き日蓮ならば法門よて貫よかしといひ渡そよぞ夫より法師原相々よ評議なし京鎌倉の名僧さゝ敵對ゲたき日蓮ゐれば正路よ問答おぼつのなし玆よひとつの計畧あり十人廿人つゝ綴掛か立ゐゝり有無の答へよあゝいらず四方四面より質問ゐれ此頃い食ふ飢へ疲氣よ閉られ今は大半死人よ似たり

そあを厳しく責立れば彼念願あわらぬ身の怨の根ざしとして其上よ勧作浮作人知らず誤殺さば自滅の往生難か谷たんこれよ増たる妙術あしと俄よ人を近國に馳廻し腕脛つよき悪道心強れ法師を聚めけりさそも孝行第一と聞へ二十年來あた時も浮世さらぬ日朗聖人いぬる九月十三日より宿谷光則ゞ土の牢よ身を苦しめて在しけるゞ大師佐渡へ趣き給ふとき依智より一通の書を贈り今宵の寒きよつけても牢の中の有様思ひやられて痛ハしきよし仰遣はされしゝは日朗聖人はその御書を顔よおしあて泣沈み給ひしゞ此御書を師匠とおぼしたし明暮あれを懐上給ふよぞ獄舎の官吏もそれ師匠とめひ弟子といひ其真實の敬を感じこれを聞ことよ共よ袖をぞ絞りけるゞ衆生もとより佛性ありあゝよ立入る官吏の自然と日朗聖人の德實を尊び折々の教化よ預りて潛に御題目を唱依し袖のうちよ珠數を爪繰者すくなからず寒行在臨門光則もその法弟は容子を聞てその師日蓮聖人も凡人あらぬを辨へ知りふかく日朗聖人をいたいりける或時牢舎の官吏主人より賜ひしとて蘆橘の實を六七箇日朗聖人よ奉りけれはゝが御師の好ませ給ふものゝ我れ牢舎の身よあらずば海山千里を隔りともこれを捧げて御恍の尊顔を拜し奉らんものをと涙よかきくれ給ふよぞ彼の官吏ひろかよ主人光則ゝ歎き給ひもさて日朗聖人よ回ひ我々よきよ計らひはべるべし久々よて浮師よ値て安否を訪給へとて路個を布施するもゝり乾飯を奉るもゝり杖よ不借あに至れとしのびやりよ土の牢を立出翅を欲き心地して牢よすくをし足蹤を厭ふ空なき北海の佐渡をさしていそぎつゝ塚原ハ雪の中ゝ大師を訪奉るよ夢うとばかり驚き給へば獄舎を護る官吏の情よ些のいとゝを掛て渡りはべるよし品々をさゝげて心を慰た奉りける大師此島よ在すゝと四年といへども月を數ふれい三年よ過ずうち間よ日朗聖人此に師を訪給ひしこと八あどよおよぶそ其辛苦艱難を思へば今泰平ハ浮代よ安座し斯心易く浮題目を唱ふるゝと皆是先師の大恩我等ゞ倖福とぞ思いれける高祖大師ゝ此十二月十三日の朝日輪ふたつならび出たることを安國論よ符合するよしあぞ種々の浮物語有て廿

三日富木殿への書状澄清なる浮瞳義淨へも書を認め二通合せて朗師へ渡し鎌倉より能き便宜もあらばこれを贈りくれよとて名殘をしくも日朗聖人へ浮暇をぞ賜りゝる明れば文永壬申春かへれども北國の雪よ暮れる空寒くけふしも正月十六日鳥獸さへ跡たへし塚原よいとかしましき人音ハいかゝるとゞ心得ぬとうち見やり給へば兼て期したる念佛諸宗誹謗よりかり催したる越後越中出羽奥州信濃當國六ケ國の法師原印生坊慈道坊を先よ立念佛宗よは浮土の三部或は北觀眞言等弘法慈覺の書類まで或ハ手よ持又は雛僧の首よりけさせ數百人さしもふ廣き塚原へ群々と取つめたり今日こそ悪僧日蓮が問答よさしつまり掌を合そを見物せんと在家の男女尼道心蟻の甘きを慕ふが如く蠅の臭きよ集るに似さり六郎左衛門重連これをきゝもし過失ゝとゝもあらんかゝ兵卒よ等棒をもたせつゝそづから小高き岡よ在て見分せう斯て諸宗の僧等日々よ悪口し我一命に取かゝらんと先よ爭ふ在家の族ハ壁々よ阿彌陀如來の敬よ疾ひき出して打殺せと騒立を高祖大師はしばさハかせて後浮壁しづりよ各々づまらせ給へ今日は法門の爲よあろ浮渡りあり何らん悪口雑言ハよしなき事なりと宣へば本間重連それと下知し悪口なすもの二三人首筋つかんで引出そよぞ漸く事改まつて見へよゝる眞言師問ていはく眞言亡國の王なし汝と元祖の弘法ハ大日を崇たる本佛として教主釋尊を侮奉るそれ邪法なるあどい龍樹菩薩の大論九い卷を見よとゝありければ又立替る浮土宗南無といふ字は我が宗の彌陀如來よ備りたるをゝ身は遠んで妙法蓮華經の頭よつけられさるは其高言に似合ぬ不手際とゝらひ詰るを大師ハ答た唐の南岳大師の戒法よも天台大師の行法記よも南無妙法蓮華經と見へたるハ一文不通の盲念佛問答無用と戒められ後より出るはおあじを浮土使ずよ書物をうちひらき物識顔よ悪さし出だし和漢よ念佛往生しゝる事書籍に載ていと多かりゝ向を空無て地獄といふや高祖あさへて念佛一門をひらきたる汝ゞ宗祖の善導は毎日彌陀經三十卷念佛十萬遍を修行ゝ眠らずしゝ三十年又一生涯眠よ

高祖大士
佐渡塚原
に諸宗
乃僧と
問答

女人を見ずあへる行者の身の果は柳に登り首を縊ろの縄きれて大地よ落非業の死を遂たる故その頃の人わだ名して揚柳の自害坊といはれしい極楽往生比人といふべきあ菩提よい非業の死を遂ものは多く地獄よ生るゝと語り慢間しくと言戒されし飼はは宗旨いしらそ僧が諸宗の御經をあ佛方は便いつはりと宣まへど佛よ妄語はなきものをといいせと果ず高祖大師妄語を説てこれを眞實の道よ入るを佛の大慈悲方便といふ此事涅槃經十五の惡魔行品よ見へたるそ老僧その齢まで未た辨へ給はずやと詰りへされ口い鉗んで黙密り風怨たるはどうち咳き人の後背よ後込す利劍をもつて爪を剖それより易き鍾佛法二言三言よ過すして老分の智識色たけい其餘のものい筆で斗る事道心は法門三昧經を忘れて論といひ論を引て釋といふ大師遷々さり示し教導なし給ふよそ雪よ熱湯をろゝぐ如く脊滅落々々と消失て閑しよ增る才學い聖人あなと恐をなして歸るもありあなを尊しとて落降り人目も愧ず改宗をるもまかすへなからを憤怒りよたへあぬて地頭本間に妨ぐられ本意も密ず腹立しをのれ惡僧魔て憂目を見せんぞと日よつふやき歸るもたり本間六郎重遠もろの博學辨智よ感伏し盤振立やよ者等法門よ詰寄たる者は懺悔しき聖人の法弟とあれ左をなきも比は今い用ゐし疾遇ずやと嘆はりてその身を慨よかへらんとせしを高祖しいしと呼といたゆ身いあろて鎌倉よ往給いぬそ北條殿我が詞を用ひ給いぬい今い彼の地よ合戰の始まりりらんと宜へバ重遠きゝわへす聖人何をのたまふそいま天下い無事よしき月は袋よ太刀は稍何を當處よ箭をなけんといひ捨て立歸りゝり廿三日申の刻おろ日輪ふたつ並出たりとて嶋中立騒で見物しかある事の前表ならんと語るうち二月十八日早松來て京都に戰あり又鎌倉よも軍ありとは注進あり本間重遠はゞ惜き塚原よまゐり大士の前に胡跪き先月十六日のに詞いかよやと疑ひ奉りしよ今三十日よして符合せりきれい大聖者の寄來ると宣ふ和遠はあらじ念佛無間も一定なるへし今日よりは聖人の極家と成て給はれと合掌を大士宣ふやう我いゝひなき凡僧あれとも法華經を弘むれば釋尊のほ

使也梵天帝釋を我が左右よ事へ日天月天も我か前後を守り天照八幡も頭を垂て我を敬ふべしかるを上下萬人あれを恐んて失はんとするは唯事ともおもはれずさとへば病ひよ正氣を失ひろの親をも厭りうつゝ如し委しくは立正安國論よしろして鎌倉殿の御諫よさし上奉り合戰の間や虧んや疾ゆき給へとわりけれは重遠恐よ暇を告一族郎等引具しを太刀よ鎧とひしたきつ其夜船を飛して鎌倉へ走去けりさても高祖大士い去年十一月より此北海比響比中よ凍て死るあらば一の不測を書殘さんと欲りし筆を呵よわたゝ比書綴り給ふやう日蓮い日本國の柱なり魂なり柱倒るれい家傾き魂去ば人亡る日蓮こゝよ在を此經を持てばこそしばしも此國安穩なるよ似さり日蓮失時は七難既起て日本國必定喪ふべし此書は釋迦多寶十方の諸佛當世日本國をうつし給ふ明鏡なれはうたがひを見るべしと一切生衆の盲目をひらく大慈大悲をもつて開目抄と名づけ鎌倉の弟子檀越へ贈り給ひける此頃撮道坊といへる天台の學匠那有て此島よ流されありしか關らず大士よ見天台の法華ば正像二千年の用よしき末法本因妙の法華經と經い同じけれとも機よ相違あるとを學ひ大ひよ感じき徒弟とあり名を日淨と賜わりける此日も茲よ來て法門を論談し當月五日は晩天明星ふたつ並び出さるも天涯奇異の變ありとかたり居給ふ處へ鎌倉より目興上人熊王四郎兩人來て大聖人の慈あきを慕ひたがひよ手を取法給けり大士鎌倉は樣子いかよと尋給ふよされい近年北條長時の次男治部大輔義宗京都よ登りゝ六波羅の北に居又式部大輔時輔い南よ居これを兩六波羅とて畿内西國の政事を取行ひ京鎌倉の間飛脚日夜よ往來し四國九州二島の沙汰居なあらよして鎌倉よ間へ關の東西よく治り諸民心易くありけるしゝるよ南六波羅式部時輔は振明寺殿ゝ敬子よて執權時宗の兄ありゝれば我もと鎌倉よ在て執權と成べき身を舍弟の時宗よ其職をられしかへすゝも口惜しとてひそりよ謀叛を企てけるよ其隠謀はやくも露顯よ及び鎌倉より早馬を以て此六波羅北條義宗よ下知を傳へ時しも二月十一日義宗軍兵を率し不意よ發て南の館よ寶かゝる京洛中上を下への大乱と

なり式部時輔ゐべあく討れ家門一族悉を盡して討死せり公家よも中御門左中將實隆卿にあれよ興したりとて押籠られたりときく又十五日鎌倉よを北條左近太夫公時同中務太輔敦時い時輔よ一味して執權を討んと計りし事も水の泡とても消なん身の果を討手を引受散々よ戦を討ひうたれつ悠羅闘諍鎌倉中の男女泣惑ひ目も當られぬ騒亂に謀叛の一類百人討れいしたれ彼も一味うらぬうと人の心の疑はれいのよ成るべき世の樣と安き心もなきにつけ大聖人は御教化よ預り人々い兼て仰の自界叛逆北條一門の同士打よ信力彌々增進はうと日興聖人の物語り聞新らしく聞給ふ折から念佛宗は印生坊と云ふ堺原よ來て三ヶ條の難問を糺たり大士これをきゝ終り言葉はうたちなし後の證據よ立がたしと筆る採其返答をしるしてあれをもたし給ふ印生坊無念ながらもまた返べき詞も無牙を咬で立去ける斯て鎌倉より北沙汰として日遵聖人を雜太郎一之谷に移すべきよし守護所より下知をりたへ近藤次郎清久の承まいりとして薪よ家を造り四月七日こゝよ迎人來り日々の食事を贈るこれい信心の具發よあらを守護所よりの扶持方ゐり此一の谷此地い鶴石巖峰洞水藍を湧へて風景又神妙なり大士時々此山上に登り給ひあゝよ古木此松ありしを深く愛させ給ひ此萬年の緑り我ゲ妙法の樂へよ倣ふべしとて毎日此松ゲ根よ御讀經ありしかばそれ松の遵りより清淨ある泉の湧出たり後年此地よ寺を建て御松山實相寺といひあれを袈裟掛松と稱を總じて謫國御難場よ袈裟掛松とよぶもの多し先師の說ゐ袈裟は十種供養のうの一種あれは大士供養の心もて掛給ひしやおれとも其理為らず袈裟は僧へ供養そべき品なり御經よまんとて先聖が袈裟を脫で僧の行儀を失ふおとろの所間無しこれは僧の立儀たるを掛錫と稱する儀よて聖人は御袈裟を脫られし松といふ意なり惑ふおとおかれさても本化の日輪法の氷を碎き宗門やゝ此島よ流布し信心の聖日々まいやましゝれは生喰道觀等會合して評議なすやう日遵斯てこの島よ在おらは國中ゐ念佛の聲絶べ僧も尼も渴命よ及ぶべき此上い鎌倉へ訴て彼れを寄たん事肝要なりと談合既よ一決し

念佛者兩三人鎌倉へ出府なし日遵毎日高き山に登て天下よ禍災を降しさまへと祈るよ遵俗男女とれを聞依し其祈りれ聲一國よ聽くとそ祈へけるとれよ依て鎌倉より近藤清久に仰せて流人日遵よ親しみ交るものは重罪さるべきよし國中よ觸渡をされば鎌倉より替る〳〵防來を即側よある弟子兼の食料さへ高祖御一人の御扶持なる粟飯を或ハ手よ分折數よ取分師弟とも薄く露命を繋給ふよ程あく本間六郎重連鎌倉より歸り來り大士を尊敬すること厚くはとよ和歌の供物を奉りければ念佛諸宗の惡徒等も今は為そべあくぞ思へよけるの心を起し五子十郎信重檀越と成て入道し同郡中興といふ地よ住居して世よ中興殿と稱を今の河原田妙經寺その古蹟あり信重れ舍弟一位阿闍梨といへるも眞言宗を捨て法弟とあり學乘坊日靜と呼けり時よ日興聖人鎌倉へ歸り日持聖人かはり來て大士よかしずき來る富木池上を始じめとして檀越の人々折々の衣服をもたらし布施を捧げてろの安否を尋ねしむるものひきも切らずあの地と阿佛坊日得も聖人一之谷よ御移ありを路の程もいと遠くありければあの近きわたりよ宗を攝へそ朝夕よ往來せりろの地を八幡と呼て阿佛村といひけるよぞ今北清妙宣寺その古蹟ありけり玆よいと感ずべきは鎌倉辻町の邊りよ朱砂丹を製して世を渡るよのありしゆ夫婦とそよ大士を師依ずるあと厚がりしよいぬる年夫婦死して二歳の女子ひとりありけり賴む方なきうき世れ悲傷夫婦がいまは此際までも日遵聖人い佛れ可來なるぞ我が亡き跡よゆ厚く供養し給ひくれよかしとありし詞を身にしたて夫婦れ紀念の女子を抱き海山萬里の辛勞も法の師よはいとハしと遠く佐渡が島よわたり大士を供養し給ひけれは大士を慕き感じ給ひ一面の御文章ういしゝへ給ふ弘安三歳の天竺に渡り傳教大師の唐よ往しは男子也賢人なり女の身として遠く此嶋ゐ法華經を供養し給ふことたとへ須彌山を懸て大海を渡る人はありとも末代よ此女人い見るべからず餘りよ感じて日妙聖人と名とまゐらせべしとそ書玉ひ日持聖人よもたしめて北旅宿よ贈り玉ふ日妙は涙ながらに歸りけり同

七月の下旬藤四郎といへる人も鎌倉より夫婦ともに渡海して供養をさゝぐ其彼の行者を多く從え
て說法ありし折柄に齢二十にや超ぬらん容顏美麗のひとりの婦女紅白の衣服衣紋正しく此所に見
もあれず往ともも思はれぬ立振舞法席に列なり聽聞して在ける彼說法終て高座に居侍る人問くは我に
本尊を賜はれと諸大士諾ひ給ひたれども其書べきの料の紙なしいかゝはせんと思す處にあれ一御認
め給はれと紅の袖を押つてありければ大士御筆を取給ひ法施し奉る南無妙法蓮華經と遊ばし側に
和歌を　紅ひの袖にさゝげし法の華ひらく心のいつくしき姫とかきて妾婦の國旗原女と書添らせ
給ふを待ずして我が神躰の人間にしらんことを恐れてや一散に袖振拂ひ西天はるかに飛去り
けり今安藝國宮嶋嚴嶋明神の社に此片袖を秘傳へて此女といふ字は楊の一番の鉾尼なかく引は
ねてありといひ傳ふ又此宮嶋の周囲を守護なす神を七浦明神といふ浦と浦とは和調遊び茲に七浦
あり身延に七面の明神あり處に一體不二の感應秘密自在の神力とは知られけり今年文永癸酉卯
月の空の雲間より初不如婦ほのと鳴きつ驚覺られし時を得ていでや本地秘妙の本尊をあらはし擧
らんと四月廿五日より背發の筆を御硯に浸へ觀心本尊抄の一書をしたゝめ七月八日初て大曼陀羅
を書あらはし給ふあれを十界總歸命の御本尊とて久遠の釋尊五百塵點劫具する處の十界にして實
相の妙境なりこれ我等衆生即身成佛の本尊にして佛滅後二千二百二十餘年一閻浮提の内に未まで
決して顯れ給はぬ曼茶羅なり高祖日蓮大士一世の本懐たゞ此本尊に限ること彼の觀心本尊抄につ
まびらかにしてこれ一宗門の根元とある知られたれたふしも日興日向兩聖人左右に在まて大士法
筵をひらき御說法はじまりけり時に一人の比丘尼高座へ離間を育りけ理非と繰らず種々に無體の
雜言をいひふらすにぞ大士ばらく聞へてさて宣ふやうむかし天竺の婆羅陀國に摩訶婆といひし
外道あり國王の御前において德叡菩薩と法論に及び摩訶婆は責つめられて家に歸り血を吐て死せ
り其妻才學辯なるものにて夫婿の死したるを深く隱し紅白粉に粧顏を催ひ華綺なる衣服を着飾

り夫婿に代て問答せんと左あらぬ躰にて其席に入來るを德叡菩薩は其顏色に愁を知り其皆懷に
歎きを察し給ひ御聲たかく汝が夫婿は論につまりてはや死たり疾去ぞやと叱り給ひし例もあり今
我思ひ合そるに汝は先頃塚原にて問答に詰りたる印生坊といへる僧の妻にして人の群たる法席に
邪魔し理を非となかず惡口して我に愧をかゝやかし夫婿の敵討なさんとの結搆と見受たり印生坊
は念佛の利益にて執もしき妖媚を持れたりと仰けるにぞ一座の衆皆こらへかね咸々一同に笑ひけ
れば彼の比丘尼は顏鮮紅にして歸りけり
釋尊在世の時王舍城の郷に內人家九億の數九億ありその內三億の家の人は佛の化導を受また三億の
家には唯その噂を聞しまた次の三億の人は一生佛を見ず聞ず同じ時節に生をうけ同じ地に住なが
ら宿世の緣の爲業とて是非もなし如來の說法三百餘會機をとゝのへ時を竢て四十餘年の後法華經
を演給ひしにさへ五千の僧尼坐を立て退きたる在世さら斯の如し此は末法五濁の闘諍なる例の迎
槊にて信ずる者は不測といふべし茲に北條家の一門に北條掃部輔時盛といふ人あり斯は時房の子
時政の爲には孫にして世に並ならぬ人なりけるが此頃また大蒙古の使趣て筑紫太宰府に來り
我が國の郡郷山川の事より男女の風俗飾まで委しく見聞てこれを記し歸りけるよし鎌倉に聞き北
條時盛ふかくこれを歎き當時の有樣たゞ事にあらず日蓮聖人こそ實に名僧なり我が一門皆これを
惡むとこれ天下の大専北條家の滅亡を招くなりとひとり發明ありて使を立て佐渡が島へ種々の施
物を送り師檀の契りを結び給ひけりこれ後年北條彌源太とて病身なりと世に披露して政事にあづ
からず入道して進盛と號し富士山の風景に遊の心を發んと駿州に隱遁し専ら大師に心を傾け御癖
いとをさなかりけるあくる其年もくれ明れば文永十一年甲戌二月八日の事なりけるが執權北條時宗
の夢に綠色の官服着たる童子來て日蓮聖人を赦さずんば一門の滅亡近きにやあらんと告たりける夢
さめて胸騷怖後もはや明たりければ御殿所を立出忙然として在まける折平左衛門尉賴綱出仕なり

と聞へけるは彼御所へ召され刻限の例より早きあ卿の出勤もえもやめらんと仰ありけるゑ頼綱はしんてあの驍力不測の夢を見はべりきと言せも果てず執權宗時そい日蓮赦免の事ゑはあらぬゑと主從たがひは顔見合せ茫然たゞはぬ夢がたり辰の太鼓の打ゞこちひいき評定衆奉行人迫々館ゑ出仕ありそな〳〵彼の夢語りを傳へきい夢は跡なき忘想なるをと半才覺をいふと多かりけれど執權時宗頭を横夢は心の影ゑもして精神は感ずる處なれば因の世おも夢を占ふ官人ありて聖人もこれをもちひ給ひきをいよ〳〵日蓮聖人赦免ときはまりろ北下知狀をかゝせ宿屋左衛門あれを受とり私の割として北赦免狀をひろゝに日朗聖人ゑ渡しけるこれい日朗聖人久しく宿屋の牢内ゑ在ける時光則はじめ其家人まで深く日朗師の教化ゑあづかり此大法を信じけるもゑ牢命御免れ彼も多くい宿屋光則ゞ邸宅ゑおにせしををつて今日彼の御赦免の狀うけおさめ天へと登る心地してろの御狀を頭ゑうけ夜を日ゑ継ていきせきと佐渡をさしてぞ急ぎける高祖大師い配所も今はあかの相ゑ喜び啼もる鳥を御覽ありけるゑ北顎はかり白きからをあり智々不審々るを大師は碓と聽をうち給ひ我ゞ流罪の赦免も近きゑ知らんゝ北故は唐土燕の太子丹といへる人ひさしく秦の國ゑ囚れとありておいしけるが始皇帝の宣ふやう頃の白き鳥出たらば赦て歸へかへすべきを聞ゆるゑぞ太子天ゑ祈り給ひしゑ頃此白き鳥出たるとあり又我ゞ朝に增基法師紀州熊野ゑて北鴉を見て

山ゞらすゝしらも白々なりゑかり我ゝへるべき時や來ぬらんと詠れしともありとれをあて我が赦免あるべき瑞相ゑやと覺ゆるなりとかたり給ひき卷の日影もたそがれて夜もやゝ子の時ちあくなりにけりときゑ日朗聖人は漸く三月七日の夜小木濱に着船し性蓮坊の家ゑ一夜を明し聖八日あゝをうち立給ふゑ御身の疲脚の惱いとをぼつあなくみゆるゑぞ性蓮坊は遠く新町といふ地まで見送りまゐらせて別れけり日朗聖人心い箭長ゑはやれども海山遠き長の旅漸々あゝゑ近づきて頃も

精弛きて疲をまし急ぐとすれど路はかゆゞさすゞゑ永きはるの日も途中ゑ暮て夕月も木立ゑ暗き爪揚り後山といふ坂道に踏迷ひ雪消うづむ白砂に方角さへもとり失ひ草鞋ちぎれ杖と折れ身跡けゞれてすゝみわず側り此石に腰うちかけ御師いへづくゑ遠まずぞ日朗ゑはべるいと聲振り立てやゝと喚ぶ音は谺につたへ來て路猶へたつ十町あまり彼方の窟ゑ松火をふりてらし日興聖人今宵大士の仰ゑて最遠坊ゞ病身をいたわりつゝ寓ゑ送りし戻り道緘心諸天の擁護おや北聖はやく耳ゑ入るれを知るべゑ山坂をやう〳〵ゑゝゑ尋ね來て御赦免の事をきゝ喜び泪せきあへず互ゑ詞もなかりけり

此地名を後山といひ坂を今い日朗坂といふ腰懸玉ひし石とは赦免石また聞遠石といふ朗師の徒日蓮法師御拘氣の事免許せらるゝ歳なり文永十一年二月十四日行兼清長行巫光綱承はる左衛門入道殿と讀上けるゑゞ大士誦んで永領しとれより諸方ゑ暇を告發足の要意取ゞゑぞありける國中師依の人をうち聚り名殘を惜み奉る中ゑも一の谷入道清久はわゞ宿世の障りゑ今ゑ家を改宗すゑと協はず何とゞ鉢倉ゑ歸り玉はゝ御筆の法華經を渡し玉いれと願ふ又北鄕日静ゑあまりの慈しさゑ佛工伊勢小太郎ゑ大士の像を彫刻せしたて開眼を請今ゑつたへて鏡の尊像といふ最遠坊は我近き頃病にいたゞき身を苦しをたれば餘命もはかりがたし再會おもひ絶ゞをいひまして拉大士ゑ袖をぬらし玉ひ我きた〳〵讒言ゑ逢ふてとゝゝゑ流罪せられはあらゞ大法を此島ゑ弘めたりゑのく〳〵いよ〳〵信心をはげまし大法を護りたき大人の命ゑ水の泡消るゑはやき世のならひ未來たゞたく

靈山の面目を期するのみにて先ち立玉ふ三月十三日の夜羽後郡藤手十四日より網浦みやどり十五日泊なる鎌屋茂右衛門といへるもの御船を供奉し來り給ふ船がりける茲に上陸おし玉ひ路の傍ふ諸神の祠わるを御覽ねつゝ行たりの清水より御手をそゝぎじはし法樂の御經を誦ひこれより甲斐郡府中より宿り玉ふこゝより河あり水嵩度々に及ぶよし同召礫より經を誦て阿羅尼を讀み玉ふ今に此地を陀羅尼町といふ時より一人の山伏出迎へて請待す其案内より任せて往玉ふに彼れ山伏日朗日興兩師の持たる帛包を取て看るうちかけ先より進み眞言の朝日寺といふより入奉りて山伏は彫もとゝいたずなりみけり茲に當院の本尊毘沙門天は行基菩薩の雖作なりけるが此本尊の前より彼れ帛包へ有りなる住持吉祥大慈法印の不測を神し忽大士の徒弟となり名を日朝と賜ひ寺を吉祥山日朝寺と喚改たりそれより信濃路よさしかゝり吉田といふ山里よりたまふ家の主翁芝田右近宿緑や深りけん受戒して一家殘らず歸依の心を發すそのうへ一人の男子を法弟ふ奉る大士喜んで隨身を赦し玉ふこれ後より和泉阿闍梨日法聖人とて中老の其一人とし て佛像の彫刻に妙を得玉ひしへありさをしを當國みは念佛者こゝかしこゝ多く舉りて佐渡の國の者どもは言甲斐なし阿彌陀佛の大敬日蓮を活てかへゝ帛やあるとて蛆蟻より森陰よと評論して途中にうち殺さんと謀りける當國礼領主村田大隅守かぬて大士を信じてありければこれを傳へきゝ家臣をあまたつゝはゝて路次の非常をいまた見送り玉ひけるゆゑ事故なく武藏國兒玉より着きたまふ兒玉六右衛門時國うの慈あきを歡び御赦免を祝し盃をすゝめてこゝより一夜を供養し明の日は欠米川まで送りまゐらそるよ大士悅んで姓氏を久米と賜ひ本尊を授けたまふ久米川愛陀羅ゞ淵とで今より其名を傳へけるかくて又久米川の邊りに開發左衛門といぬ者あり其妻離產より苦で救ひを請ふ大士其家より入て新しき飯匙の有りけるを取てこれより本尊を授て產婦よいたゞあぜ玉へばたちどころに安産しを母も子も慈なき一家一門その感應を拜して一時より改宗せり其飯匙より大士の尊像

を彫んで腹籠りどゝ武州谷中より善性寺を建立して此尊像を安置し安產救護の利益盛なりしゞ後より感應寺よりつゝ又故ありし谷中瑞林寺よりあがた利益むりしにおいらずかくて鎌倉の徒弟極越大士の御赦免を悅び小町爽堂橋の北詣より花室を撫へて三月廿六日今日こそは御着ありとて我も〳〵と出むかへて大士を茲より入奉り宗運のうきりあきを祝して一同より掌をうつて流布萬年と喜びける四月八日高祖大士を俗館より召寄られ上段より執權時宗その外一門列國の大小名左右より居流れたり平左衛門頼綱前面よそゝみ前年より倒ぬ慇懃の挨拶より時候寒暖の應答し聖人をつゝあく一段のよし禮節終りさを言やう聖人前々よりの嗣過々符合なしたり此うへい彼の大蒙古はいつ頃か此國をうつべきや大士答へて經文にはいりと月日は見へぬとも天は御怒り烈しく遍て見へいべれは多分今年の内なるべし頼綱言やふそは何故ぞや大士あさねと天下の上下邪宗を信じ正法をうとを給ふより守護の善神此國を棄てまもらず三災七難たれあこれを防がんあれ此後天下より御大事わらんときは祈りい努々用言宗等より仰付わるべからずもし我がとはより背き給へゝいよ〳〵急いで此國滅ぶべし兼て前年より言上たるい此一大事なりと席を睨んで宣ひしありさまい實より國家の柱動きなく殿中しづまりかへつて見へよける列產れ中より法門尊ぬられしをうれあれと說諭して歸り給ふ今年彌生の初めより雨勢すなりく早魃おありけれはり加賀法印定政御新願の任あれはとて雨請わりしより雨は降山けれとも大風吹荒人家をふき潰し堤崩れて洪水陸を押開東の田畑とゞく荒廢人畜死そることをびたゞし鎌倉殿聽いて又大士を召て雨請の事を尊ぬ玉ふ大士仰あるやう邪あれとお法なれは雨い降るべしゝゝしなから世を害する雨なり此事和漢の例あり とて古き例を引き言上あり〻るより鎌倉殿のさぬての命は聖人の念佛無間停止法門い道理いさる事あゞら世間是を用て喜ばず今よりろれを認た玉ひ所の西門外より新たより愛染堂を建長印一千町を寄附して天下安全の祈願所と仰かんとの台命ありけるよゞ高祖慎んで諸宗無得道は法門い大慈大悲乃根元あり天下の

存亡に唯此一事にあり日蓮此國に生れたれば身をば従任奉るやうなれど心に隨ひまひらすべからずとて坐を立て退出なし玉ふ執權時宗熟々あれを察したまふに日蓮聖人は實に末代ありがたき名僧なりあとに其心魂のゆるかぬ事眼門よこれをいい大丈夫とと英雄とを稱する に此人の事也佛の御使なりと名乘も荒涼の言葉わらずと頻りに感激なし玉へどと天下の人れ謗りをおもひ一門の聞りを聽て一心決定なし玉はず去とて樂說も心易からずと宗門弘通の定驛を世て五月二日使者を以てこれを渡し玉ふに其狀に曰く頃年あきた異法れ盛力御國殷も深し三國比類なき妙宗後代にあるべたき尊僧いづれの宗あれに比せん日本國中に宗門を弘る事其妨あるべからず城左兵衛尉殿日蓮上人をありて月日れ下に時宗の黒印ありて奥州仙臺孝勝寺に傳來すかくて高祖大士これを見るあはして歎息なし玉ひ我言を用ひそして徒に此狀を賜ふは鉾を取らずして鉾法を學び藥を服せずして醫師を頼が如そるとし世を憚り人を懼るは眞實の事あらず唯我が大法に詔ふれみ古人れ詞に課むべきを課めさるはあれを尸位といふ退くべきを退らさるあれを伺祿といふ尸位と伺祿とは國の佞人なりといへり三座いさえて用ひられそ身を退くは先賢のならひなりとあれより遂世の御志しに決心あし給ひけり此夷堂橋れ御庵室後に寺となりて妙蓮山本覺寺と號し身延山十一代行覺院日朝聖人高祖御眞骨をあいに分て東身延と稱す此東南川を隊て比企ヶ谷なり大學三郎能本宅を轉じて寺となし高祖大士開道供養ありて亡父判官能員の法號なる長興寺また今年八十歳世妙本此兩親れ名をもりて長興山妙本寺と號し太學三郎能本宅を寺となしたるを見て御身比企が谷に住職して當地の弟子檀方を教導をべきよし御願みありけるに日昭聖人を召て。う今法運既に開けたりといへども諸宗の强敵何間をうらいひ宗論に事よせ權威をうりて當宗を伐んと計ることを度々に及ぶもも上に偏頗の方人ならば正法も却て辱じめをうけ邪宗の爲に寺を潰し僧を追るゝ事もやありなんされば身不肖なれども拙僧寺を離れて謫玉に居り甲冑を枕として身を

安んぜず宗門に不幸の法難あちん時に横合より討て山其相手とし戰ふべしさすれいよしや無法の難義を受るとも我身ひとりの事よして宗門と寺とふ怪我はあらじ大聖人ふりまあれを察し給れをありけれい大士も皆其約束を忘れず他まて宗門の後援する事を感たまひ日朝を以て妙本寺を住職あさした玉ひけるこへは日朝聖人の法弟日澄師に小町に正覺院とひへる眞言れ寺ありけるを唯一人ひろのに馳向ひ一問答に攻落して寺號を大巧寺と改て先第一に比企が谷の末寺といなしたりける時に宿屋左衛門光則に入道しを西信と號じてありけるが大學三郎が其宅を寺となしたるを見て我が郎のうちに一寺を建立し父の名を山號とし我が名を寺號として行時山光則寺と呼び日朝聖人を請じて開山と仰ぐ皆の恐敬今の粒越實に郎正一如の大法といひつべし高祖大師に數多れ檀越我が方へ御入ありを皆口々に御勸めありけれども玉へず無てれ約束なればとて波木井六郎實長の方へ志し甲州身延山へ赴き玉ふ五月十三日諸方へ暇を告なて既に打立玉ふを老若男女御名殘りをおしみ送り來るをれひきもきらず三里五里の外に別れを悲しみ猶忘れがたくて農に岐ち丘に登りて御後影を拜奉るも多りける隨從に日興日向日頂日持日道の余人本坊猶正四郎を附添奉りけるその夜に酒匂に一宿なし玉ふ濟度山法船寺その跡なりといふ十二日駿州竹れ下給木聚八が供養をうけ玉ひ十四日車返し十五日富士の大宮なる遠藤左衛門の家に宿りて玉ふ夫婦喜んで布施れ鶴田一結とさゝぐ又柏餅を獻じ酒を勸むこれより里の名を柏酒村といふ鶴田山本光寺といふ寺あり此日次宮れ莊野中村ある山非五郎受戒しを粒越れ契りを結ぶこの人は富士郡長貫河合を領するゆゑ世に河合入道と稱す今それ地に河合山妙光寺あり十六日内房にやどり玉ふ爰に一人の老尼あり當郡次鹿村ある三澤小次郎の叔母なりけるが兼てより大士れ高德に歸伏してありけれは一室を淨土こへに大士を請ぜ精進しを勤ゆるもてなし奉るそれ夜潮々の水音しづかに月かけをもりろく袋に浮び山里の風景をあいろにや協ひなん

金臥ふす夜のちまり寝れぬい月を身延よ相のへるかな

と一首の歌を口吟給ひし後年日蓮聖人もこゝよ月を見て

谷川よう河る今宵の月影をうゐぶさよ寝てゞめけるかな

と詠たまひ又草山の元祝聖人身延詣の時この地よやどりて

うゐぶさよ寝られぬものゝ片敷は枕の山ゝ不靈のしら雪

と詠じ給ひしあれを内房三詠と世よ稱すいま高祖の靈跡をとゞめて長遠山本成寺といふ一寺あり

さても高祖大士これより甲州の地に入り南部は真言寺よ一宿なし給ふ住持大輪法印その德を感じ

改宗して名を日藏と賜ふ十七日相俟といふ處よいたり給ふよ山水の美景ゑもいはれざれば石よ腰

うち掛てしばし休らひおいしるゝよ此近きあたりみそむ正右衛門といふものゝ妻なりとて山家の

あらひ頭のうへよ飯櫃ををいたゝき頓て大士の前よおろし粟飯を盛る大士これを喜びたまひ各々

並んで喰終りしに又一條六郎信長と云人あり茲地よ往居するゆゑ八呼んで相俟殿といふこれまた

波木井殿の一族よてありけれいこゝより子息太郎光家を案内よさしろへて送りける波木井六郎實

長いろの一門帰依の者を伴ひ遠く途中よ出迎へその德一かたならず先波木井の邸宅へ入奉りあ

れより六郎實長は地割をあし給圖面を張し相應なる一寺を建立せんと企て玉ひたるを高祖は堅く

辭退あし我ゞ意よ協ふ栖は斯ありたしと御望ありけれは波木井殿も力なくされい貴意よ任せ奉ら

んと番匠二三人木を伐茅をつゝぬいさゝかなる御庵室をぞいとあみはじめけるかくて大士いしは

らく波木井の方よおはしけるが當地より程近き小室といへる處よ德長法印菩智といふ才學の修驗

者ありよし聞たまひ五月雨の蹙吹されそ青葉よ旅る風いさぎよく在けれい日興日向社兩人を伴ひ

遊びかたらよ彼處よおもむきゐたりの石の上よ御腰うちかけ讀經ありしを菩智法印聞とがめこゝ

よ來て法論よ及ぶ菩智たちまち説破られ閉口して徒弟となられ耶を願ひけるまたその小室といふ

地の水田よは蛭おびたゞしくゐりて畔を塗野夫苗植る賤女が手足よ吸入血を流し見る目いぶせ

く思し召大士田此畔お立てしばし御經ゐろばしける是より此地此蛭い人よつく事おく頭よ一熱の

星ありて世に小室蛭といひ傳ふさそゞよ山里い夏も木陰の涼しくて思はず坐よ路を徒行石和とい

ふ地にいたり給ひし頃此程の空の辯とて俄よ雲立雨ふり出しかと宿るべき家さへゐらずしばし巖

際の雨やどり日は暮さきて入相の鐘もかそけき山河の流れようつる灯火は人の住家と覺ゆるは一

夜の宿をたのまんと河原づたへよゐもを給へは痩枯さるひどりは老孤身に鶏衣をまとひつゝ出迎

へこなたへ入らせ給はれとありて蘆の網戸もまはらよて人すむべくもあらぬ家よ伴ひまゐらせ我

ゞ鵜飼を業として物の命を取つゝも唯一筋の玉は緒をつなぎ兼たる悪業人罪人何と予我を憐れま

此宿業をたすけさせ玉はれと合す掌さへもいと細く滅なんとする燈火の火影よふして流しづむ大

士いこれを不便よおぼし御經しずうよよみすまし玉へば彼の老孤も苦痛なる聲細々と共よ御題目

唱へゝるゞしばしゝ大士を伏拜み御經力よて業障の闇とはれ菩提よさいる聲もおしこれをあ上

人の賜なりと悦ぶ聲も山川の水は昔さへ小夜ふけてきゆるとゝへし燈火は岸のほたるの影落の明

方ちかくなりよける四邊はひろき河原ふて宿りし家の跡もおし日興日尚もともよ茫然としてあり

ければ大士いあやしみ玉ふ氣色をなく斯い孤獨地獄とて殺生人の落る地獄ありとて茲よ三日の間

御行をとゝめ用ひ磔よ御經を書とを川よ投沈た玉ひし北幽靈濟渡は登跡を鵜飼山遠妙寺とて今よ

石和お殘りゝる夫より北原を過玉ふよ貽殿寺といふ興言の寺ゐり地藏堂の側の石よしばし休らひ

在したるよ畑うつ農夫祈願村童など立聚りければ高祖安國論を取出して說法あし玉ふに信心を

發し題目を唱ふるもの多きろれより此地を休息村といふゐくて金川原の里岩間平兵衛の家よ八玉

ふよ此地の領主米澤丹後供奉をゝゝぐ夜よ入て八代よいたり玉ひしよ夜しける杜陰よ鬼火隱々と

してもゆるよぞ其夜宿の主翁よかたりたまへい近き邑二子を產て死たる婦人ありその靈魂よいべ

るといふ大士あれんで回向むし玉ふ今は二子塚と傳へたり西手より口野よいたり玉ふよ丹下と
いふ老人杖よすがり非戸を隔て彼方より聲かゝて日蓮上人よへ在さずや日もはや暮近しと恐よ
止宿をすゝめ給るよ此家よ三日滞留ありて説法教化むし玉へばはじめ補陀の時非の向ひより聽
かゞたればとゞ姓を向非と賜ひけるゝれより信州蓋本に弘通をろの跡清淨山眞福寺といふ又甲州
甘理を渇玉ふよ雨俄よふり出々れい松の樹間よ雨やどりなゝ玉ふ法永山本照寺ろの古蹟といひ傳
ふ八代郡山梨郡信州飯田郡蓋本まで遊化むし玉ひ日蓮凡廿日あまりを経て六月十七日波本非よゝ
へり玉へばかねて聖人の御告抑よまりせて袋みたりとて身延山の麓溪川よろうて柱ハゼづか十二
本三間四面の草堂の茅もて葺る軒ふかく奥まりたる中央よ須弥壇を立て本尊を安じ香華油らよ燈
明を熱じ宿に綱代の日陰を覆ひ替を簡窓あり物寄べき机をあり北の庇よ香厨をまふけ側に夜の具
おさむべき棚もいとあみたり庭よい草を垣と結めぐらし様々の雜草を植其外手鞠撫子千日紅を
ど何くれと時の草花を多く植ならべしは佛よ供ずる料なるべし高祖大士は御歌はかぎりなく茲よ
入を其間を愛し快く御經讀誦ましける久本坊日元はあひ〳〵しくこゝよ来り居て薪
を採溪川よ水を汲炊をいとあを浴をすゝめ朝ゆ花を摘夕よ佛燈を熱じ庵を清め席を掃ふあれを御
門代八役といふ日元いよく恐よ此八役を勤たける抑この身延山といふは甲斐國巨摩郡廿分内よし
を大檀那波本非六郎左衛門實長の邸宅より戌亥よ當り本化の跡をとゞめ玉ふべき靈境よしを北よ
へ白根が嶽稜々として天に聳へ南へ鷹取山とて天竺の雞足山のごとく西へ七面山とて鐵門よ似た
り東は天子ゝ嶽たりく雲を帶また北よ早川南よ波本非川東よ富士川西よ大白川これ四の山四の流
れの中央へ身延山よしてろのうちよ寺ばうりの平地ありあゝよ勅宣御安堵よ高祖大師朝よへ日天
子拝し日課として御經一卷その餘力使僧量勝持寶塔など御意よまかせて讀誦ありし日中よりは徒
弟樵越のたりあ一乘の妙理を御演説夕暮よへ一座の僧俗を圍居て御題目の御修行あり夜へあとさ

ちよ觀念の床よ一念三千の妙境を觀じ但見妙果は夢を結びたまへば妻戀鹿のよびしきりよ御目を
さまし我等一切衆生我が身のちちよ三觀一心の月曇りなく澄けるを無明深重の雲よひき覆れ流
轉生死の凡夫を迷ひ果し事を思召つゞけて和歌を詠玉ふ

さち渡る身はうき雲もれぬべし妙の法の鷲の山風と遊ばして佛乘を讃歎なし玉ひき高祖此
山よに入ありてより婦依檀越の布施を受るあとを細へず法子よ命て田鋤を鋤て粟を蒔菜を植寄
一耕作を言とし貿の實を採柴栗を拾ひ四季折々の木の實を貯へ玉ふ波本非殿をその淨心を察し人
知ず麥粉大豆なよくれと密よ香厨よ入置て大士よしらせ給らず又高祖は浮馬を好ませ玉へはとて
に應富の側よ廐を立たくましき馬を駐で其御意を慰め給るまとや如意寶樹へ萬の寶を降を遠近國
郷をいへず信心歸依の方々より日々夜々衣食財産の供養雨と降ゝ雪と積大上は福天人界の長者と
ぞをもれれける一は天氣快晴あればとて雨三人の法子を伴ひ叔縁ゝ挑ひ炭殿を請で身延の嶺よ攀
登玉へ長天雲清て眺望うぎりなく方東へるかよ見やり玉へば伊豆相摸の山々を越て一筆ひける
淡墨れ如きは房州よ岬なり大師思へず筆をしはり故郷よ密なづかしを面親の在せし昔を思ひ出
しばしに經遊ばしなるの此峰はに應室よりへ五十餘町天の梯迫もなき嶮岨ありしを行々あゝよ登
り涉兩親の廟墓を遥拝し遥かの汨をろゝき玉ひける大士い五一よして父母を慕ふ大師六十にして
二親を戀させ玉ひき内外開典もと二ッあく大師聖靈其道一ッありとそ思へれける此石蹟を奥の院
と稱し今よ思親閑育恩堂の名を殘せりけふしも上野ある南條兵衛殿酒二箇樽子一箱造物荷等午
房品々を家の僕よもたらしつ御庵室よ訪來りゝ此樣大元蒙古九州よおし寄天下の大事よ及びたる
ろの顛末結られるこゝよ去る十月の五日對馬國上縣郡分八幡宮ゝ神託より火焔立上ること數
十丈國中あれを見を出火あらんと騒聚たるよ何事なゝあれいあなる事の前表ゝやといふ間も無
其日の申刻對州西の海上黑みわたり蒙古ゝ且祖忽心船のを乗して且州ゝ繼母東尼船をゝ將として

高麗の縦官洪茶丘を先陣として其勢合二萬五千餘人兵船九百餘艘高麗國佐須の浦より押寄たり此津の守護代相馬次郎資元助國手勢を引き馳向ふ蒙古岸なしたる七八艘軍卒凡一千ばかり陸より上りて守護代の陣へ押やゝる相馬父子其外家徒の者討死して敗軍より是ぶ蒙古の賊軍處々に火を放て狼藉すあのよし對州より博多へ注進す同十四日豐岐國より取寄赤き旗をひらめかして上陸 嚴しく攻討まぞ當國の守護平内左衛門尉景隆協すして城内より自害して相果たり賊軍勝に乘筑前今津より箱崎に迫する九州より東條又友臼杵松浦の面々菊地原田兒玉の一黨傳を繰出て合戰を挑ども賊い進退自在の修練といひ殊より陣中より電電のひゞきをあして大なる鐵の玉を飛ばし軍兵其玉より當ば粉の如打碎られ又燒燃るもの數を知ず忽ち蒙古に退立れて敗走を菊地次郎肥成赤坂の松原に踏とゞまりけれども一支もあらへず廿九日より至て東郷覺忠の子三郎景資大友兵庫雜波在助菊地肥成を始た討死の勇士おびたゞしく今は誰有てこれを防くもれおく蒙古八方より乱入し男をは打殺し婦い縛て船へ寇る民百姓逃惑ひ山中の樹の茂り谷間の岩窟に親子兄弟壁を乖氣息をつたゝひ そゝ隱れをれと ひ炊きれ煙りを見て賊卒とも其隱家を探しあるくよぞ是非なく米を咬水を飲で日を送るあとより眞あるは斯山中より陰れたるをも赤兒れ啼聲より尋ね出さるゆゑ家内七八人の命はより替へがたしとて兒を生埋よし谷川へ流しさるも多かりけるとそされいあれらの有樣を聽聞して親を負子を懷にして足を限りより逃去て此三四十里の海岸より居るとの絶へて一人をなしあへよをいて賊軍ども心のまゝよ金銀米穀を取わつた九百餘艘に積入ていつしか出帆して殘りなく歸りしを知る人さらよあるりける京都鎌倉より合戰の用意とりしく ふありしれ合い徒となり此うへいいかなる世より成もくらんど上下萬人浮雲の思ひより住しけるかゝる天下れ騒乱も安國寺より符合あすをそて法弟檀越いよ〳〵信心の色を增高祖大士い浮世の安危を余所より見て此身延の澤より光をあくし御經唱題の外さらより他事おくおはしけるとゝより房州天津ある光日尼遠く使を來り我が子彌四郎ろの主人の爲より人を

制て自殺あしたるよし布施をさゝゆて個向を願ふよぞ其彌四郎を一度我が教化を受たるものなりとて懇より退轉攻營を玉ひけり又今日おとづれたるは椎池四郎とて鎌倉司船の官更るなが深く大士を歸依しいま遠く安否を此山より訪來る時に波木井殿ひとりの尼を伴ひ來りあは報報 女より駿州江尻七村の色主村岡民部より嫁したるが今い夫婿より別れて剃髮せりとて受戒を願ふ妙國日義と法名を賜ふ文永十二年を雪れ中より暮て明れば建治元年乙亥二月十六日房州東條の新尼より使をもつて布施を寄り甘海苔一袋をそへたり大士あれを見るあいし我幼りしとき慈母小湊の磯より此海苔を摘玉ひしを稚心おぼへあり海苔の色香は今より同じけれども憂世のさまのかはり果たるなど御書攻認て贈り玉ふ春も半途は過ながら山家は遲き梅の花やゝ咲匂ぬ香をとめて日朗聖人ひとりの兒を携へて登山し春の暮詞除寒の挨拶いひのぶれば大士御喜斜ならず寒さ淺げと波木井よりおこしたる油の如き味酒より幸ひ者より土器出してそてあし玉ふより日朗上人は狗釋〻て此兒い下總國葛飾郡平賀忠晴の一子より名を萬壽麿とよびはべるが此月れ初めつゝた其受携來て徒弟より なしてよとありしゝへ許して北企より ゝ殷ゆるゝぞ御師れ見參より人受戒そも願はんと遊々伴ひ登りしといひ逃るを大師い兒が手を取て御膝根より居らしれ玉ひ容貌骨格凡人あらずこれ我が弟子あり必ず我が法を弘むべしと御經を授かせ今日より經一廻と嘆んぞとて其儘身延山よりとゞまれおき學問修行怠らず聰明絶倫より而りけるが後年肥後阿闍梨日像上人とて法を京都より弘た玉ひしは此兒より ぞ在しける卯月十六日佐渡國より中興入道信重身延山より登て一れ谷なる法華堂も今は寺となしぬ寺號をつけてたまいれ願ふよぞ大師妙法華山妙照寺とするして賜ひけり此五月大蒙古國又杜世忠を使とまて日本より和睦せん事を言經たるを太宰府より鎌倉より送りなれども事あらすしてこの頃高祖は擇時抄二卷を著して大法流布の必要時より依ことをしたへめ鎌倉の徒弟より贈り玉ふ新

ら下總太田の貫谷次郎左衛門敎信先年佐渡より渡しをひし觀心本尊抄を拜み述門無得道といふ文を見認り法華經の前半分をば讀まじといふ富木殿種々に育喩せども心解ず困じて十月三日此耶を身延に告來る大師直に鉦を探てろは不相傳の觀ひなるよし細々したゝめ得意抄と名ずけて是を送り玉ふ付谷敎信ふかく先非を悔みたり在世の時既に斯のおとし大師滅後十九年中老尺日蓮入滅劣の義を立てより八十餘年代間に諸派代勝劣きろひ水化一味の海に多端の波を發したる耶歟かゝしくぞ思いれける又佐渡に在したる時徒弟に屬たりし最蓮坊選淨らの身の罪を帥敎免ありしとて御敎を慕ひおの山に來り稚ちかき下山といふ里に庵を結び日夜に高祖を訪まゐらせ法を聞あを身代樂とせりその遺跡のありて下山長禁山本國寺といいふあり樫の柱に道淵もいろづく秋の末つかた庭の切戸より入來る人ありり雖ぞとわやしみ見玉へばさいつ唱法論ふうち負て膝を折たる小室の山伏蓮智法印手に提重を持ながら扉よつき一別已來の廻答も四綿に針のぬんおろ根こい愚婆が手搦の餅たへて久しき背信のしるしに携へいべるかし嗟なくときあ志めせとさし出すを大師いよろあばしきよし聽へ引ゝ庭に馴ふを白狗を檢猶たゝいて來々とよび此餅ひとつ授與へ玉へば尾を搖ながら喰ふと見へしが忽四足をふるはして血を吐て死てけり蓮智は面色土の如く消を入たき風情にて我先年法門ふうち負て口ふい法弟と名乘ながら心い解ぬ裏表上人を悔怪し來らんたくと早く知召賢明不測の大上人ゆるさせ玉へと庭よおりたち五體を大地へうちつけ〳〵懺悔の本心あらはれければ大師も不便におぼしたしろい成悲願の心お入し繋よして御身よたへて咎あらず我此唱のよをうたよ

おのづあら邪よふろ南はあらし風あそ夜の窓いうつらたと詠さるぞと感銘入北身の法門より邪即是順の理を敎へ名を日傳と賜ひれ狗の横死を悔み本都婆を立て供養あし玉ふ彼の小室の一村もこれを見聞て改宗の者多し蓮智日傳い父を轉じて寺とあし德永山妙法寺とよび又最初法論の地

を寺を建妙石山照睦寺と稱し其身い身延の山内よ移り庵を結んて朝夕大師お耶へ奉り身の罪滅を祈りける其地を醍醐谷といひ菴を志願坊とて今よ殘れり十一月の末つかた下總國富木殿より鶴目一貫文既綿の小袖一鉢十管饅五挺はるしゝと贈り越したる歳暮のおとづれよ今年もくれて建治二年丙子の正月雪踏分て南條殿餅七十枚酒一筒芋一駄大根河のりあと春の祝ひふこれを奉る松野氏より柑子一籠種々の果實をさゝぐ別て此頃森闘て厳澤なる大非正司が力より乾柿四箱酢一桶蓮立土家など赤の氣色の贈りものよ山中もやゝ御心のどかよ日を送り王ふ處よ上野殿珍しくと書信玉ひ亡父の追善の布施あゞ取揃へて來り種々の物語りうち交て法華經は未來の成佛い一定とあそ承われ現世よいさまでは利益い在さぬよやと疑ぬ王ふよ大師はうち咳嗽たまひいやとよ現世い謗未來い來あり未來の米のよく實る程あらい現世の謗い奚事成べし昔九州よ大橋太郎といひし謗俗ありけるゞ鎌倉石大將家の御勘氣を蒙り鎌倉へ召下しあまりの憑さよ土の牢よ苦ゑめ年を經て後よ殺せと下知ありけり斯まてよ重き罪とも知らぬ火の鑄柴よ殘る其妻は懷妊しをありけるゞ今は知行も沒收せられ一族家來も四散になりゆきてさのむ方なきわび住居歎きのうちよ月滿て男子出生有けれは夫の紀念と育揚名を一妙磨と呼なして七歳の時よ出寺へ登せ手習學問そのうへよ夫婿代常よ信玉じひし法華經を讀あらいし玉ひけるよ或日清々家よかへり呼よ向ひて歎るやう朋輩北兒達貴子等ゞ親あし子よ親なし子と嘲り笑ひはべるゝし我父いいりくよ在すゞ天なくてい雨ふらじ地なりれば草木も生ず我が母わりて父の亡ことやゝる今もがたを歎へて玉はれと問兒よりも問るゝ母親胸にせき來る血の涙うくし果べきことなならぬば涙を押へてされはとよ身の父太郎殿鎌倉殿のに怒りよ値鎖よ繋ぎ張興よ與乘られて彼の地よ下り玉ふ時沙身い此母の胎内よありしを北子の行末願むぞと唯一言を此世の名殘ろれより絶て音もせず殺され給ひし沙法りきあへす又生を在す時もなく夢さへ遠き東路の曙よたよも知よしおく願むは御身たいひとり父上の朝恥お贖給ひ

し法華經といふはこの世のちの世浅からぬ功德ときゝを御身よあらハし給ふとけも父上の生て
在さは其身の厮婢死たまひあは追善と思ひあきらめハべるかしと語り給へば一妙磨ハあれより山
を立かへり一心不乱ゑ法華經一部口誦ゑまゝなりけれハ十二歳のとき母ゑと告ずたゝひとり鎌倉
ゑ下向し鶴が岡八幡宮ゑ通夜なして父の安否を知らして給はれと御神前ゑ祈念しつ御經を讀ずま
しけるゑ其音律微妙ゑして金の鈴を振ゞ如き珠を轉ゝ妙音自在參詣の男女おゝはず涙ハふり落あ
へるを忘れて聽聞し神前ゑ非集人の山をぞおしたりなるゝ處ゑ源氏所政子の方夜ゑ入り御忍
ゑて浮參詣あり殿廊より浮内陣ゑそゝんて浮邪ありしゑ折節彼の兒の御經を聞給ひわまりの餘さ
ゑ浮歸館有て右大將殿ゑかくとは物語ありけれはその明の朝彼ハ兒を召寄御持佛堂ゑおひてあれ
をよまし給ふいと不測なる凡音聲骨身ゑ徹るゑ浮經の涼しき聲ゑうつゝなく聽聞ありける折ゑ
らは外門ハるかに響しく人聲そるにぞ兒は驚き浮經よみさしを右ハ人をかへりてあれは何邪ぞ
と尋るゑぞされはとよ今罪人の頭を切とて町々をひき渡すなりといひけれハ思はず兒ハ聲を揚て
泣々り子細やあらん其を語れと仰ありけれハ泣々語る父の身の上ハや殺されたまひしや未だ活て
ましまその八幡大菩薩ゑ浮さとしを願ハんと此浮經を讀ゑていべるなり我父ゑ思ひ合せて人の聞
切らるゝといふがりあしく覺ゆるありとありけれは右大將殿いろき梶原景時を召れ簡年汝ゑ預け
たる大頭太郎はいかゝせしやと問給へばその大橋ころ唯今町を引わたし山北が濱にて死罪に行ひ
はべるよし宣上す右大將殿いそぎ其罪人を助けよと宣ふにぞ梶原提灯て馬を飛せて大橋を廻來り
大庭ゑ引居たるる見るゑ十二年土の牢ゑ苦しられ糸を以て足を繋ぎたる樣ゑ痩ほろかたるをふ
とき荒縄にて小手高くいましめたり右大將殿兒をさし招き給ひろれは汝が父あるぞ縄をとゝて速
戻れ浮經讀たる布施なるぞと仰ありしかば一妙磨ハ夢かとハかり高樓より飛下りて慈父懇しと縄
りつく太郎もはじめて我が子なるをきゝ手に手を交ず親と子ゞ降ハ涙の玉襟袖ゑあまりて見へゑ

けり御願の内ゑ在またるは臺所を始とし之並居席の大小名涙ゑくれを詞あし右大將殿仰ゑハ世
ゑ尊きハ法華經あり我朝敵を退治して父の怨を討今天下ゑ權柄を取て美名を四海ゑ揚すとハ伊豆
國經ヶ小嶋の配所においを法華經八百部を讀し功德なりと昔の經力今の功德おそひ合を大橋太郎
ゑ元ハ知行を與へ玉ハハ父子いさんて錦紫ゑ下り再び家の榮へたるハこれ現證の利益ありといと
長々しきは物語ゑハるの日脚を短くおぼへ茲ゑろの日も暮ゑける同月八日の事なりき富木殿その
卅公九十三歳ゑして逝去ありけりとて自らその遺骨を持て身延ゑ登山を高祖ハ引導を願ひあゝゑ
塔をたて其寶塔の前ゑて高祖ハは手を勞して剃髮し名を常忍日常と改ハ歎きのうちゑ喜びの涙を
交へ下總ゑ歸り玉ふゑ程なく平賀左近將監忠晴一子龜王麿を僕の男ゑ負せて庵室ゑ尋來り聖人
の恙なく渡せ玉ふよしハ途中ゑ富木氏ハ歸るゑ値て承はりぬといと懇ゑ挨拶しさていふよう此兒
をハるゝ〳〵登りまゐらせたりとありけれハ大士許して徒弟とあし玉ふあれ比企谷第三世日輪上人
といひし學匠あり時ゑ一人の道心遠く房州より來りしより一封の書通をさし出しける大師封おし
きりて開き見玉ひしゑ此三月十六日清澄ハ道場ゑ坊選化のよしをしるす大師これを見てかあしを
ゑたゝ玉ハず去る文永甲子の秋華房ゑて對面しまゝらせ口ゑ苦かる良藥ハ我が法門を聞召しいさ
ゝかゑ意ゑ協ひてし其より今ゑ十三年むゑし忘れぬ師の恩を繰ハいしつゝろの書を閲ゑ當て悲み
玉ひ孤ハろの住塚を後ゑせず白龜は毛寶が恩を報ず蓄生すらハく此如し佛法を聞ハも報恩の志
あかるべしやと別室ゑ籠りて報恩抄二卷をあらハし日向日寶を御使として清澄ゑかはし給ふ爾
人ハ道場坊の御墓の前ゑろの書を讀み上て亡經を吊ひ爾師ハまた一字一石の經を書經塚を築て歸參
あし此緒を大師ゑ語り奉りければ其歡喜色ゑ顯れりとゝゑ日朗聖人の慈悲妙一尼逝々身延に
登山し種々の供養を給り佛法の大事を問給ふ序次此程鎌古ゑりの使節九人を長門の國司より鎌倉

に乎両祖は左右の法弟をかへりみて鎌倉殿我が曾を用ひ給はずうのうへ卵なき異國の使を戮したるは何事ぞや見よ〳〵災害これより起らんと眉をひそめて歎き給ふ處に池上右衛門大夫宗仲おもひよらず登山有ければ大士よろこんで思いらく此山に逗留をそゝめ給ふ宗仲も大士の御慈に背あじとこゝに起臥御側に事へけるが大士の常の御膳部には藜の藜野菜の鹽煮粟稗の乾飯など炊大鍋へたる飯食をおし給ふを見て宗仲頓て家にかへり其妻子に語ていふやう久しく身延山に在てその朝夕を拜しまゐらするに厚味を食す衣煖かに襲着て身を放逸にするに碧堤の道にあらず我師来法の導師にて在す身の法の爲に其身を苦しめ飯食にさへ猶飽さまゐずいと勿体なく覺ゆるぞわれけうよりあれにならはんとて一生涯の行を改ず在しけるあゝ駿州富士郡に真言宗の檀所瀧泉寺といふ所にて五人の學頭五人身延山に登て離問す大士一言のもとに説破り給ふに五人の口鉗て閉れ如しこのうち一人は僧同郡賀島の住士熱原甚四郎國重の子なりそれ慶をさしずして法子となる越後阿闍梨日辨といひしい是なり又下野坊日忍といふもこの日辨の肉縁の舎弟にぞおわりける父甚四郎國重もあれよりふかく宗門を信じ富士郡信者の上頭たり此頃高祖を賀嶋へ請待なしけるにより て日興上人を名代としてこの地につかわし又日辨日法も共にゆきて其化導を扶けしめ玉ひければ富士の根方にいよ〳〵宗風かゞやきけりあゝまた中老日法聖人當國北原の修驗者宥範法印を伴ひて登山し此人い先年甲戌の春聖人路傍に石に腰うちかけて安國論を説玉ひしを聞て感とおし此頃我に隨て得道を願くは師の道弟とおし玉れとわりければ授戒して式部阿闍梨日乘と名づけまた住居の寺を安國山立正寺と號し日法聖人を以て開山と定め供養を遂し玉ひけり又此日乘の門徒に空存といふ僧あり日乘の事を聞て直ちに身延に登り改宗して徒弟となる遠明院阿闍梨日春是也此頃い秋の初風吹立て衣涼しき朝宵のうはる時候の障にや大士はいと恙例ならず日を經ては身惱ま

しく稍百日余りの病惱にひき籠りて在しなるか四條頼基信州殿岡に在てこれを傳へ聞急ぎ登山しては脉を診へその顔を視て歸りけるが其後しばし沙汰信も聞へず頼基思ひ煩ひて殿岡より錢三貫文白米一俵魚五十枚酒大筒一小申に柿五把柘榴の實十箇これを使にもたせ沙汰安否を問奉る大士とに喜ひ玉ひ飲食を嘗まましたる實はいらずは藥にて所勞を速に平愈し本より潔く成はべりぬ今又種々の食物を贈り玉ふあれい釋迦佛に貴邊の沙身に入替て藥より常の食物まで供養し玉ふよやとは歡びのは書をおくられける此秋より日興聖人も病ひに使て大士にしばしの暇を請伊豆の熱海に温泉お養生して在まけるが此地の走湯山の遍滅坊博學の聞へ有ければ一日病の快氣にまかせろの人を尋て法論に及び忽に説伏たり其時遍滅坊の弟子あり奥州登米郡新田の領主五郎重綱の子にして頗る才發なり側に在て此問答を聞て改宗し日興聖人に伴れて身延山に來り大士に隨身して名を日目に呼後年日興聖人の命を受て富士大石寺に主職せりかくて延治三年丁丑の正月御阿闍梨日高聖人大士に告奉るやう久本坊日元舊冬より病苦に閉られ御庵室の邪公見るも苦きげあり我無量罪滅のため一千日の間八役を勤め水を汲薪を樵り阿私仙人につかへし千歳の修行をなさんとも許を給はんやと有ければ大士ろの心に任せ給ひ是より久本坊に替て給仕泰公厚かりける時に下山村に邑主兵庫頭光基といふ人あり一字の堂を營て阿彌陀如來を安置し因幡法印といふ法師を請待して供養を怒たりこの僧近來大士の宗道を信じあたるをとりて其供養に法華經を讀けり下山兵庫甚だ不興にありけるゆへ因幡法印かぬて大士の認たたまひたる一卷の書を取出して兵庫によましめ御念佛禪の諸經一題い往生成佛のやう見もれども實には人を救濟る經にあらず日蓮

聖人の歌に曰

蘆の葉のうたちい船に似たれども難波の人を得しを渡さぬと詠たまひしにも其教法は知られい

べると深切に説論すにぞ兵庫いじたて夢の覺たるおとく改宗して大士の檀越となる寺を建て平

泉寺といふさても此頃鎌倉大佛門前桑が谷よりおいて京都叡山の僧龍象坊來て說宗し諸宗より法門の不審あらんもれば尋ぬ問るべしとありけるにぞ市中北博學より聞じ生佛ありとて日々の群衆潮の佛が如しあゝよ三位坊日進聖人十九歳折ふし鎌倉よりありしが彼の龍象が邪說此界を抗いで鎌倉中此目を覺さんと桑が谷ふ赴たるよ堂内の聽聞人爪をを立ざる巻衆あり日進師ハ緑此端よ居てあれを聞居けるよ佛法の事よ疑ひあらば離よてもこれへ渉渡りあれと再三きあへ々れば日進公ハ右まさの人を押分て高坐の前よすゝみ凡佛法は一道よてあるべきを今は諸宗と立わられ何れを如來の正法と分がたし後世の大事願ばくハ教導よ右づからん龍象答へていふ諸宗いづれも正法よして成佛得脫の道あり日進公あさぬて宜ふやう聖人は何れも成佛得脫の道とのたまへども佛の渉心ハしあらず一乘此法のみ有て二もなく三もなし又正直よ方便效を捨よと說四十餘年の經々は未だ眞實をつまれば日進公聖ハり右々我ハ日本第一法華經の行者日進聖人ハ弟子日進といぬ離僧なり夫程の事も辨へなき分際よて人の迷ひを晴さんとの仰は過言なり今より說法やめ主へと喚ハり玉へは群衆の人々おどろきて若きあ似合に學僧りあ今しばし在して法門を演たまへと諸人そゝたけれども袖を拂てりへり玉ふ龍象坊ハ闘盤の所化に說伏られ面目なくや思ひけん其夜いづちとなく逃失けり後に人の語るを聞よ京都の烏部野よて人の死骸を堀喰ひ叡山を追れて又鎌倉ふも近年新嘉を發て人の屍を喰ふとてがしましきも此龍象坊此所爲よあやさてしも問答勝利の喜びよひきりへて江間遠江守ハ聽言のそのありけん嶋田左衛門山城民部の兩人を御使よして四條頼基よ仰遣さるゝやう汝頼基六月九日龍象聖人說法の場へ甲冑を帶して狼籍し散々よ惡口なしたるよ是其身の不覺主家の恥辱なり今日々法華經よ心を寄まじきよしの誓狀を書て來るべし其事のならず汝知行を沒收し長の暇を泉をべしとぞ聞へける頼基驚て歸へ來るやう日進坊の問答の場へ稍後れて參

りたれと遥隔て聽聞したるのを惡口狂綸ハ思ひとよらず定たて聽言のもの〻所爲なるべし其上我法華經を信するとハ身此得脫の爲のみならず三代相恩我が君一君一門官臣もまたありて御馬前忠勤を盡すとの其かす多し我は獨君公の後世を永く敬ひ奉り未來永々忠勤を盡さんとの志願也嗚今命惜さよ知行をかなしみ法華經を捨る神文を書ならば重恩此我君忽ち法華經の大怨敵とならせ給ふべし主君大切と存じ奉るゆへ決して書まゐらすべからすとありけれは是非なく知行を沒收せられ今年三歳なる兒をいだき親子三人流浪の身となり給ひける高祖大士身延山よ在てこれを聞たまひ陳狀とて一書をしたゝためとれを御身の作として主君よ捧ゲたまへとて頼基よ贈り給ふ基を頼基陳狀とて御書祿内廿九の卷よ出たり是よ久本坊日元の妻ありとて七歳と五歳との男子兩人を左右よ携大士よ見わ々夫婿は去る十一月朔日よ身まゐりはべりしが此兒童等ハ聖人の徒弟よあしてと今際の遺言なれば將てまゐりぬとて潸然と泣大士御法衣の袖を絞給ひ兄の日進も學問修行長者しく生立たりあの二人も久本坊々紀念なれはとて其儘法弟となし給ふ此兩人後年よおよび日善日上とて日善ハ身延山四代の貫主たり日上ハ古郷なる甲州今飯防妙榮山久本寺の開山よなり給ひけり今年の秋ときのふの雪ハ路絶冬の日よ池上宗仲の邸紫銅の佛器二具使をもつて遠く供養し奉れば十一月十八日太田乘明の妻室下總より緑裏の小袖あらびに綿を送りまゐらせ又同廿八日貧谷入道よりあぬて高祖より細字此法華經一部授與ありしを喜び其御布施として小袖二重鬱目十貫文扇子百本をさゝ々奉りける或日大朗々よ風もあく寒ならねとも日影うらゝゝのよあり々れは深遠の巖石よ坐して一回の說法をなし給ふとき獨の少女年廿歳よあへす柳色の裙衣よ濃紅の裳を更を高坐間近く聽聞せり一坐の人々何ものなりやとありをを汝本躰をあらはせと仰ありけれは桃李の顏ハ笑を含を我ハ佛勅をうけて大法守護のためあれより西海氣川の山上よ四方八面の嶺を構へ身ハ諸佛諸神と同坐よて長の一方よ安住し利益を

七面ゑひらく圓滿具足を父とし兜子母を母とする吉祥天女あり聖人願くは我ゑ一滴の水を惠まれまはれといふにぞ大士問ある華瓶の水を與へたまひければ晴天俄ゑ雲を越しさしも美麗うりし少女忽二丈ばかりの蛟龍に現れ金の鱗を逆立て鰐の牙を咬鳴し颯と吹來る山嵐渦卷壞ゑ容形をあくし西をさきてぞ飛去け！一坐は男女頸を縮め身を震はし其形現の尊形をたしゑ邪ミたる者もなありけるとかやこれ末法に鎮守として水火に難劍戟の災を除き利生を萬々年ゑ願し給ふ七面大明神これ也こゝゑ當國八代郡遠光寺といふ寺あり波木井に祖父加賀美遠光の香華院なりしゑ此寺の住職宗明 和尚ハ 桑西禪師の法弟なりゑ此頃大士ゑ歸依し改宗して名を日宗と改めさり當國戸田の長遠寺大心阿闍梨も亦あれを聞を後れじと眞言を捨て法弟とあり名を久成日心と賜ふ此十二月はじめりあさより大雲度々降りゝきければ御庵室の柱撓んで此を倒したり大師はあゝる大雪に中ゑ在家の力をかる事も便あしとて日興日心なと竹を添繩に結んでゑの破損を修復せり建治三年とこゝゑくれ年新まりて弘安元年戊寅 山中のあらひ雪深く往來とだへ走御庵室へ白米一駄搗一駄芋一駄十字三十枚春の新の餅として南條殿より來るあの三月十九日より椙越の頌として法華一部の講說を始めたまひこれより日々ゑ懈りなく三箇年ゑ走て成就せり日向聖人御側さらずあれを書とゝめ給ひし世ゑ日向記と稱そるゝ此間書ありけるけふしを內房の尻當士の一之宮ゑ殺生のかへるさありとを聖人の涉安否を訪來るよしいひ入けれゝ大師日向師を取欠として仰あるやう神は所從佛は主君なりその從者の神へ參詣に序をもて主君の佛を訪たまふあと尼御前の御身ゑ取とは罪いと深し今日は見參ゑ入まじあさねて訪せたまへとて其儘あへし給ひけるゝゝる折から相俟る丑右衛門あわたゞしく馳り來て我ゑ妻雜產ゑ苦まむ聖人救はせ給へとありけれは其ゝ前に年我れじとて此地ゑ來りしとき途中ゑて栗飯を供養したる妻女なるべしとて懇ゑ御厨念ありて護符を與へ給ひしゑたちまち安產して母子ゑ恙なし夫婦喜んを種々の供物を献し其恩德を感じける特

ゑ七月廿七日ありけるゑ阿佛坊佐渡國より遙々登山なしけるゑ高祖且歡び且嘆き貴邊は齡九十ゑ有さすやしゝるを甲戌より五年の間ゑ三度まで海山萬里を越を遠く書信たまへるあと生々世々のおもひでなるべしとありけれは阿佛は複紗解ひらき淸淨なる單衣取いだきあれい妻に千日ゑ聖人へ縫ておあしたる布施物ありとて來りまた袈裟と法衣を從あらべ我餘命いく程となし願くは出家の員に入あの法衣を着あの袈裟を掛て寂光の旅立せんを思ふありとありければ大師もほと〳〵喜びたまひ剃髮に儀式をとゝのへ初て日得聖人をめされければ生前の本懷を遂さりとてしばし滯留し秋風たゝぬそのうちゑとゐる故徒弟を添て佐渡ゑ歸し送り給ひけり日蓮大師を去年十二月大晦日の夜より御腹あやましをうち臥在す程ならねどとゑうく春より夏かけて御心悩しくありけるゑを四條頼基御藥を奉りその驗あや六月頃より日を追てまゝゝろ伸やかゑこれほど全く恒の御心地ゑあらせ給ひ御歡喜の多數御書したゝめ能便りもがなと思す折あら金吾頼基より价を來りければ其書を探て御覽ゐるゑ昨年六月このあた流浪に難儀も法の爲と愛年月ゑ遠て信心も彌增たるゑ諸天の御はからひゑや主君江間遠江守先非を悔我を召返し再び開く家の運をとの領知より土地肥てゆたかなりと聞へたる佐州非箇田の莊信州殷岡甲州內船の鄉を賜ひたり今生ゑ此福を得來得脫を得ると皆これ聖人の賜物なりとありけれは其書通を本尊の御前ゑさゝゝゑて歡喜給ふあと天あたならず返書を書て价をかへし給ひける內船は當國八代郡ゑして今ゑ寺あり正住山內船寺と傳へたり大師い婚しきまゝ其訪來人あとゑ頼基が身の安堵をあたり給ひ御喜びのうちゑ年暮て弘安二年己卯 正月春の始に御祝として上野殿より餅九十枚鏡芋五十本を奉る又御帶一具三十疊六十秋元太郎よりまゐらせれば四條頼基の妻女より綿目三貫文を供養と其外遠近の椙越より春の書いはゐのべ客ゑ應對价ゑ返書のとげき春もいつしゝくれ散櫻戸ゑおとづれて遠藤九郎守綱ゝの父阿佛坊日得三月廿一日に身まありたりとて其遺骨を頸にかけて登山しゝの遺言ゑ任せて塔を此山ゑ

僧たり大師厚く追善此法會を儲け涙たおぐらみ塚原のもきの底より我が命を繼さまはりし書恩を報じ給ひける遠藤守綱も大師の法弟となり父の墓所をも制禁し阿佛坊日滿と號す佐渡より歸りてその家を寺とし遠華王山妙宣寺とよぶ父日得を開山とおし第二世に日滿住職なしたりけるときより武藏國島郡金龍山淺草寺に住持寂海法印本覺坊河内坊といふ二人の隨身ありこれ行李を持たせ遠く旨やう此身延山より鎌倉へ歸りはじめて大師より對面なき膝を摺頃を低身の弟生なのべ偏我さいけころ隅田川より渡りよりくりなく下總ある富木入道より値まのらせ我が天台宗ころ實より法華の正統なるぞと難じかへりし我がとひより入道頃うちりて否々それはと詰返す數番の論より否の根すくを餅ようれ小嘲のでとも いひかへす理もなかりしあ在家に御身かくのおとしその御師の聖人ころまをへまほしと告ゆへれば入道もよろこびそさればとて御てたまひし紹介に書翰はこへよりけりとさし出しそれより大師の化導を受世の嘲も物かはとそれまへ改宗して名を日寂と賜ひ日れば隨身の弟子これより感しともより大師の徒弟となりて日增日可と召れけるより日寂はこれより歸國して淺草寺の程近き湯場といふ地より寺を建深草寺長昌寺とて今日の邊繁へける稍なく庭もやへ荒し落葉ふみわけ問人も多かる中より別てけふ江川太郎左衛門吉久豆州非山より遠くおとなひ來り布施をさへ少て聖人の安否いかゝと尋ね玉ふよむかし和泉よりし時おもはず途中より因みたる昔語りより夜宿を忘れこへより日暇をあさね玉ふよ高祖大愛陀羅を書て授け法名を日久と配したまふの四大天王の齒は大藏の筆なりけを又梁牌の本尊を授賜ふ年月をしるさず裏より一首の歌

霜柱水りの氣より雪の桁さきゆく水より火あぞ消けれとありこれを世より鎮火の本尊と稱す後年非山より本立寺を草創あり日るうくて矩き冬の日より池上より鶴目一貫文淺想裏の小袖細一製帶筋栗をあしいさへの寒中の伺をなす南條殿よりは白米一駄を供養とと細谷川の氷りても下ゆく水の年月いはばしと止る堰となく弘安三年庚辰正月五日のことあり き相俱村ある正右衛門が妻三歳ばかりな

る幼稚を抱て御庵室よりおとづれて去るの年九月夫增より死分れ人間の盛りも花の一時より願すくなき世をおもひ我も此兒も聖人の徒弟となり夫增の菩提身の佛果を願んとありければ大師憐れをてその暫を切て日佛と法名を賜ひ此山の麓より栖で折々より御衣を洗ひ清め御法衣の綻びをつゝりて事へたてまつりけるその幼兒は是好歷とよび給ひ後出家して日了といひ大師入滅の後西郡中野村に毋の在所なるをもつて毋と共より其地より住て妙了寺と開基し又相俟なる父の家を寺とおして正覺寺とゝ名づけしとなり茲より日法聖人あの頃身延山よりて一夜御庵室を立出玉ひしに溪川より光明赫々とさ走りれば立寄てろの光りの根を尋給ふよ檜此大木よありければ我久しく佛像の彫刻を願たれどもかゝる靈木を得て止事あれと大師より容許を受て高祖の尊像を彫み奉れり今身延山栖神法窟の尊像是也さてを鎌倉より在てゝ大元藏古の賊船定て寄來るべきやは評議ゐ依て筑前博多をいしめ海岸の城を修復せし此山陰山陽兩道の大小名をもつて京都此四方を堅め東山北陸の軍兵を越前敦賀より屯し追々大軍を九州よさし下し防禦の備より他事をおく世上の心騷立て危ぶむうちより年も暮弘安四年辛巳の春守師御齡六十歳耳順ふと言はいふ世のうきふしの躰相を問もいふせき御庵室深山は春も雪ふゝし如月中旬貴島の初音めづらより窓此戸をさきの不き給ふよ思ひがけなき京都東寺の異廣法印雪踏分て見へけるよを現あらず思召三十年前京都遊學のその時より厚く交りたる好身もてゝよ本門の大戒を授たへて久しき其後の宗門弘通此物語りよしばし月日を送られける大藏古の一亂とよかく今年ゝ過をべからずと上下萬人心を痛めけるより鎌倉中の弟子檀方歸依の信者ゝよろこひて法華敵對の現罰唯今ならんと誇りがよいひ罵詈あるよし遠くこれを聞給ひさそゝ不愛の者共かおかゝる國の煩ひも日本國中の諸萬人諸宗の醉より本心をうしなひ法華經の妙藥を用ひず災害こへより迫りたるあり大聖世尊本化の菩薩も子の病を親此看が如くさだ此て不便なりいたゞしと思そらた然るを我が大法の實相より誇りいしたなくと市中より物を賣夕如くより嘲するを佛天への

恐れ國土へ此悪りをり去る文應元年七月より言へき事い我いやいへり今さら人よ何をかいはんもし路頭よ蒙古の事を私語ものあらば永く師弟の緣を斷るべしと六月十六日この趣を書て一通の文廻をあし熊王四郎にもたをて鎌倉中の檀方よぞ觸たりなる誠よ佛法を知者は世法よ違といふ此御心添ころ導けれさても天下の人の思慮よ逸いず七月朔日霧よ雲り走沖合にそれと定のよ分ねぞと數萬の軍船日本さして押來る此事いやくも京鎌倉よ註進す四國九州の諸軍勢は筑前博多表に出張して今やと扣へ待かけたりさる程よ大元蒙古の大將軍宋朝二百年此武勇を一戰よさりひしき大唐四百餘州を切平らげ其勢氣よ乘じて日本を伐取らんと究竟の精兵二十四萬餘人軍艦四千余艘よ取乘ておしよせける其海上船の備を見るよ大船を舳と艫とかけならべもやひを入を通歩の板を渡し陣々よは油幕を引て千艘を立列ぬ又陸の方へい大板を筏よ組て四五丈ばかり鎖を以て水の上よひき並べ波の上よ平なる路幾條も山來をあれより馬の轡を揃へて陸よ馳向んとの結構なりゝくの如く五島より東博多の浦まで海上四圍三百餘里俄よ陸地とありて鐵城を携へたり我が日本此陣取は博多の濱邊十三里の間石此堤を高く築き前は敵を防ぐ爲に切立となし後は味方此爲よ平らあよして船引自在なると思ふ處よ敵の船よは佶棹此如き敵十丈の柱をおろして其上の横木よ人を居らした遠望鏡をもつを見渡すゆゑ日本の陣中眼の下よて毛髮の尖も算つべしゝくては合戰いゝゝあらんを評議區々此處へ彼の賊船より山嶽を崩るゝばかりの響をあし大鞠の如き鐵丸飛來り霹靂く事おびたゞしく此鐵丸一度よ二千三千うち出すあれに當つて死するもの幾萬人そのうへ城門櫓お火燃つきて打消よいとまなく唯呆れおのゝくばかりなり斯をい勝利覺束なしとて松浦の一黨一千餘人その夜浦つたひよ夜討をあけたりける其志いいさましけれども味方いもづか九牛お一毛たとへは千駄の薪の燃立たるお一杯の水をそゝぎたるが如く敵とも多分討取たれども終よ皆生捕れ鐵の索よて彼の船端よ縛りあらべて日本勢に見せたりければ重ねて戰いんといふものなかりゝ

るゝれより大元の賊船頭竹の勢よて乘門司赤間ヶ關より長門周防よとりかゝらんと見へたるは誠とよ盤石の下よ鶏卵を置よりも危うかりし而りさまあり時よ入皇九十代字多天皇敵國を苦しめ給ひ鎌倉よ勅命ありて將軍惟康親王日ゐらずして御進發よいさたまりたれとも日本の危急人力よ協いずゝれて數ケ度の忠諫よをよびたる正法の行者日蓮上人よ護念のちらをからんものと遠く身延山に仰せありけるゆゑ高祖大士國恩を報じ奉るい唯今なりと長六尺五寸幅五尺五寸の大旗兩面よ月と日をしたゝめ四方よい四大天王八方お八大龍王を畫うしめ中央日月のうちよ輪圓具足の大曼陀羅を御染筆ありてあれをさゝゞ給ふ宇都宮貞綱先陣として軍勢三万餘人あ此御旗をさして九州よむゝひ筑前博多の山上よ壘をつらぬき怒敵退治此御旗曼陀羅酬謝として朝嵐しよひるかへりいとも尊とく思れたり時よ弘安四年八月朔日一天よ五色の雲みたれたりよと見へしか颶風俄よ吹起り山を拔樹を飛はも震動雷電大元蒙古數萬の軍船風よ木の葉を卷ゞ如く磯よ揉當船と撲合四千余艘の賊船も見るがうちよ微塵よ碎け軍卒も大半は波の泡と溺れ死未草青千間具萬の三人の大將も波よ漂ひ流るゝを生捕ける翌二日の早天空晴渡おたやるよ成ければ三度勝鬨を揚を軍神をいさめ奉り御代萬々歳と祈しける鎌倉の將軍出馬よ及ばを九州の軍勢又よ血塗さをして十二分の勝利を得たる事ひとへよ法華經の威力日蓮聖人の守護ありと將軍家よも後感悅有て此御旗を宇都宮貞綱よ預けさせ給ふ爲より池上宗仲おつたへて今は兩面を別を月の御旗は身延山よおさた日の御旗を武州本所押上天松山最敬寺よあり是他國侵逼の難を防ぎたまひし本朝萬年守護の御本尊と稱し奉るなり是よ依鎌倉の檀越より法經の利益はじたて天下よかくれおきよしを祝し布施を獻し喜を演もの多ゝりける九月二日波木井六郎實長今年六十の賀を祝とて大士を其邪宅よ請待し奉り一門衆て賑ひ喜び實長今日より家督を嫡男彌六郎長義よゆすり譲を切て入道法寂日圓と名づく大師自ら我小像を彫で波木井殿よ授げ年頃の愚を謝して八日の朝暇を告て身延山よかへり給ふ此頃

にいたりては法道大ひよ開け山また山の峻しる身延の澤よ高祖を訪奉るとの絶間おく日々れ春
間貧賤男女星と列ぬり雲と布御庵室の處席諸人居並んて錐を立る坐もならざりければ是非おく地
を担し石を居新よ六丈四方の堂をいとなみ初て身延山久遠寺と稱し十一月廿四日をもつて開堂の
供養を行れけるよそ遠近れ恐新群集をそ成したりけるうくて高祖大士常よ富木殿の舊恩を忘れ給
いず常忍の懇を手自御彫刻ありて側よ安置し朝夕よ尊敬を加へたまふ常忍もこれを見そいと勿躰
おき事よおもひみづから大士の尊像をきざみ平日禮拜怠り給いずそれを互交の尊像とて今猶現存
せりとそ法門無盡おぎりなき衆生教化よいとまなし往を送り來を迎へ春去夏を夕顔の花もしばゝ
て爾々い袂涼しき文月中旬高祖は御身よ病を發し御氣色い常よ替らせ給はぬとも御食亦もやゝ減
じ起居何となく御家躰輕からず見ゆるよそ四條北企をいじめとしてあれを開て追々よ登山し御動
靜を防奉るよ高祖大士思召とやありけん池上宗仲の宅よ入て發生をせいやと仰有けるよそ遠路の
山河いかゝならんと皆々案じわずらひ々れども折角の御意よ皆あく恐れ多しとて其要意取々よあ
りけるが波木井入道よ次男彦次郎實綱を御伴よさしそへかねて愛し給ふ遺物此度馬もおん寵みよ
まのせろれよて送り奉る法子檀方多く附添まゐらせ九月の八日饗食を召て程なく身延山を御出立
ろの夜は下山兵庫が宅よやとり給ひ九日い曇澤なる大井莊司のもとよ御止宿十日よい曾根の次郎
ゞ方よ宿し十一日黑駒十二日河口の梅屋上所よ止密十三日吳地の遠山藤學がもとよおん入十四日
駿州竹此した鈴木繁八止宿十五日相州鬪本下田正五郎左衛門これみおもとより歸依のかた〳〵お
れは御意ろのうちよい永き別れとをぼしめしをあるところよく此供養を受給ひ十六日平塚長谷川氏よ
やどり給ふ其跡松巢山要法寺といふ十七日瀨谷の妙光寺よ入せ給ふ住持文敎阿闍梨宗旨を改たて
法弟となる名を日成と賜ふ十八日午此時池上よ着給ひ十九日御書を御したゝめたまひて離盛多かる
此程の旅路彦次郎實綱厚く介保あゝ給ひ馬を亦よく飼が懇よかあへり彼是御心ずくしの恩恵生々

忘れがたし我病愈へめでたく面會すべしゝうし老病心ろもとなしたとへ我何處よて死しいべると
も墓をば身延山に建させ給へうしと書て彦次郎の歸る便宜よ波木入道よ送りたまいけり廿三日大
曼陀羅を書て主翁宗仲よ與へ給ふよ宗仲つゝしんてこれを受て直やう去る延治元年我ゞ邸のうち
よ本門寺を建立なしたれどもいまだ開堂の供養を遂ず聖人御全快の上は一會の御法要を願ひ奉る
とゐりければ大士も今般の病氣はもいや定業よして愈べしとも覺へず儀倖けふは食もすゝみいと
心も晴やうあるはと側わりを洪鐘を鳴し法鼓を打てゐりければ此程大士の病ひを訪てあゝよ來る
僧俗男女ろの大堂よ居並んて整々と見へよける大士强て起出給ひ沐浴盥漱御屐を召て堂お升り歸
經唱題なし給へい大衆も同音よ和し奉る夫より高座お登り立正安國論を講釋なし給ふ一會れ佛事
式法の如く行いれ皆々宗運萬歲を唱へけりかくて大士は疾病いよ〳〵おもらせ給へども御疾床よ
いまして法門を談じいさゝゝ例よあはらせ給はず側らをうへりをて我ゞ死するときよは大地震動
もべし左もなくは我い死なじ各心を勞しさもふなとありを十月三日日朗を召て立像の釋尊立正安
國論御免狀二通御紀念にまゐらもよし仰有し又日昭日朗日興日向日頂日持の六人を六老僧とさだ
め我ゞ入滅の後はあの六人を我が如くよ仰ぎ事へよまた我が遺骨は身延山よ納めて六老師輪番よ
あれを守護もべしと左右を召てこれを仰遺したまい又御法子檀方へ御遺物を贈け與へたまはんと
て日興師よ筆をとらせて一々よ是を記させ給ふこれ彼と冬の日影の移り易くけふしも十一日諸師
檀越一寸れ間をも惜んで御側さらずわりけるゞ高祖大士は經一歷よ經一と御病床ちかくめしよせ
られおもき御枕を擡ゞ右の御手をさし伸そろの頂髮を三度まで撫撫給ひ鳥の將お死ぬる時ろの鳴
聲悲し人の將よ死なん時それいふ言よしといへり汝今年十四歲つゝしんて我ゞ遺命を承諾れ我建
長五年夏此頃いしめて本地難思の妙法を弘通し日本國此一切衆生を救ひ得させんとの願も今す
でよ滿足すといへども我一期の間鎌倉殿よ諫言三度よおよび伊豆に三年佐渡よ四年住處を追れし

弘安五年
十月十三日
高祖
大士
武州
池上
八
滅

と二十餘度そのうへ安房上總下總武藏諸國の教化は年命たらず唯今入滅なをあけ心殘るに道都の弘通いまだ此御題目一天の君の御耳に觸奉らず汝これより日朗を師と賴み學問修行成就せば華洛は登りかならず本化の妙法を天聽に達しくれよかしと懇ろる御遺戒は經一歴に御手はすがり一聲よゝと泣しずと畏を告す詞さへおさだは蘆る朝時兩袖ほしあへぬ日朗日向左右ゝ御介保あゝろをあめて夜禮と御側はある僧俗男女御題目を唱へつゝ送る日脚も短くてけふ十三日の朝卯の時頃一搖ゆるぐ地震れひゝきは各御病床は馳參りるは高祖大士に安然として一座はしめし宣ふやう今後五百歳の時を得て宗運ひらく法は華一乘妙法蓮華經といふは大聖世尊五百塵點劫の間本因本果は妙行はして我等衆生一念信力はうちは其功德を讓受るあれを即身成佛といふもし信心明くして我が教へは違へなばこれまで永く六道の苦難はも懲ず又惡道は沈みやせん其時日蓮を恨み給ふなと御聲しずかは御教導ありて御側は命てかねて御染筆の曼陀羅を掛させ給ふ後の世は隨滅度時の御本尊と稱し奉るゝおれなり斯て幽微き御聲は齊盡品を誦み給ふは子大衆も一同は靜と御經を誦澄し奉る御香爐の煙たゑ〳〵は薰じたり御次の間の漏刻殷々としてひゝき此辰は腕にやとおぼゆる頃慈顏御笑を含給ひ寶躰眠が如く大涅槃に入り給ふ時は齊算六十一歳壬午は生れて壬午はかくれさせ給ひけりゝくて日昭聖人南無妙法蓮華經と唱へ揚たまへば僧尼俗子のゝいたまあく御題目を唱へ奉り地を走る獸林は群かる禽も五十二類の愛別を啼鳴あのとき池上の滿山諸才は花發いて法性の春を表すこれ我が宗門御會式は花を挿由來へこゝは始りける十四日戌の刻寶棺に収め奉りその夜子は上刻御出棺御葬式の順列は朗慶は華血をさゝけ次郎三郎大續火を奉赤白二本の大道華は上野殿は四郎次郎又赤白二流れの旗は池上右衛門大夫中田左衛門尉は番燈は富木入道饒鉢は太田左衛門入道花瓶は南條時光御文机は富士四郎太郎御隨身の法華經は四條類基御隨身佛は比企能本御香は源内三郎是より左の方は日位日忍日持右は日保日實日法これより

御寶棺御前は日昭御後は日朗御輿脇は日高日興日合日秀日祐御天蓋は太田三郎明持御太刀は兵衛志御腹卷は椎池四郎御馬は熊王四郎あれを奉行別徐あはして結界四門の西より入を東門より出て南門は入る三巡四遂式法の如くろれより寶棺を茶毘所は安し火を擧て栴檀の薪はうつを此夜月ぬきらゝは星きらゝきは沙羅雙林のむらしをあゝに思ひ出られ十六日御眞骨を拾採て寶瓶は収た檀場純陀が家は入滅なし給ひ此日遠大士は身延山の民位に當り多摩河の湯宗仲々宅は滅度あし給ふ今古かいらぬ大涅槃ビゼをもはれける斯て廿一日の朝法弟擅越一同の御伴はは眞骨池上を御出立ありて身延はをとむき給ふ其夜は相州飯田は御此宿廿二日竹は下廿三日駿州車返廿四日上野南條氏廿五日身延山は御着ありけれは波木井入道父子喪服を着して御出迎に及れ廿六日はは二七日の御法會執行ありて甲駿二ケ國の檀越信者衆のおとくは詣て群を奉り十二月二日は中陰の佛事ありて在家の男女皆々涙あがらは山を下る六老僧は御廟所の邊近く各々庵室を搆たをふ日昭聖人は不輕院今の南の坊日朗聖人は正法院いまの竹の坊日興聖人は常在の院今林藏坊日向上人安立院今の圓澤坊日頂上人は本國院今は山本坊日持上人は本應院今の經の坊これなり四條瀨基は今年家督をたてゝ其身は主君は暇を請身延の山内は蹈場坊をいとなんて拉は龍りあれより生藤山を出ずして此坊會は終られける明れば弘安六年壬申正月廿三日百箇日の喪終て各相議して輪番をさたむ正月日昭二月日朗三月日興四月日頂五月日持六月日辨日忍七月日合伊賀八月日法日位九月日興十月日實日保十一月日向十二月日秀日家と相しるして此月まづ日昭上人御番をはじめ給ひける今年十月池上は一周忌をいとなをを高祖世のとき御書を賜りし者は其御眞跡を持參して目録は入べきよし諸國の檀越は解渡し各持參りてをとれを記をは御書百四十八通四十卷とし錄内をいふ又此時は渡たる御書猶多しやて三回忌は法會のときまた池上は衆集ところは書二百五十九通

二十五卷ともてこれを綸外といふあわせて六十五卷浮書四百七通あれを御妙判と稱して世に傳ふ嗚呼大ひなるかな本化の智德其法いよ〳〵實あるかもゑに其位いよ〳〵卓を身に日本國東海の磯材に海郎の子と生れ佛勅に任く唯有一乘の妙法を一閻浮提に擧かせ給ふ高祖の前に高祖なく高祖の後に高祖なし實に一天四海佛門の棟梁衆生救護の大導師なり大士在世のとき左右に侍て宜ふやう我たとひ宮樓那が辯を振ひ目連が通力を現すとも其言ことの當らずばその詮なあるべし今當世く事此後に合ことを世の人我を信ずへし文應元年の立正安國論に勸へたる三災七難をな一々符合したりされは身は下賤に生れされい人は賤り悪むとも持つ處は尊き法華經なれい終に弘まるべし此御經の世に弘まるならば賤しき我が身も還て尊あるべししるれい後年に及び我が師に利益ありて人の渴仰せんと今の鳴が岡に鎮座ある八幡大菩薩の如くなるべしと仰蔵されし錄内十四此卷此金言虛からす大士の十三回の忌辰に當經一廢廿六歲今い龍華院日像と名乘大士の遺名を頭上に戴いたゞき永仁二年四月廿八日京都に登り對裏日の門に門人たちて朝日に向ひ初て題目を唱いじめ說法弘通四十年の後に弟子大學大僧正妙實うの後を繼給ひ時に文和元年六月廿五日入寂九十九代後光嚴帝に奏聞を染させ給ひ日道大菩薩と勅號ありて僧正妙實に下賜りけるあれ高祖大士滅後七十一年に相當る我が師に今の八幡大菩薩といいるゝやうに崇めらるべしと仰蔵されしあと茲に符節を合せたるは疑に本化上行の御再身兼知未萌の大智識とあろ思合されなる御靈廟は窟身延御庵富の地にしを八面の佛堂にうちに佛石碑あり銘い日昭上人の作銘なり又御眞骨堂に水晶八角れ玉の瓶四方の四大天王に後陳祈願の形にして七寶の瓔珞珊瑚に天蓋に莊嚴し御眞骨は鮮明にうのうちに拜れたまふ

何ゆゑに碎きし骨の名殘をとゝもへば袖に玉を散ける

と歌元上人の詠給ひしも誠に尊とくをもはれける當山い十一代行學院日朝大菩人御靈を今の地に移し二十三回の祖師堂を建立し山門仁王門五重三重の大塔本堂位牌堂經藏鐘楼また通本樓を渡て唐門を入千疊敷の大方丈大書院三十六棟甍をあらべ御眞骨古佛堂三箇所に御寶殿ろの外諸堂の廣大壞るゝいとまなし塔中の寶舍二百七十坊別に西谷檀林を擁へたり當山の結構ら斯のおとし諸州の本山國々に本寺ゐいせてあれをいはいその數量知るべからず今大士に滅後五百有餘年日本一州法華の寺院〇〇〇〇餘におよぶまあとに本化六萬恒河の砂の算にしられは宗門の繁榮い宋法萬年動きあき皇國に柱石とはしられたり

撰者曰祖書錄内綸外結集に事い別に評論われども此書い唯古來に傳說を折衷し侍一代の編作を旨とするなれば結集の一事い世間普通の說に任すのを讀者讀慢と爲と勿れ

明治二十年十二月十三日飜刻御屆
同　廿一年　一月　山　版

飜刻出板人
宮城縣平民
佐藤孟三
日本橋區新右衛門町
十番地寄留
精文堂
同區同町同番地

（定價一四）

發兌元